



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北大構内の遺跡 XII
Description	平成11・12年度調査報告。K39遺跡地球環境科学研究科研究棟第2地点，K39遺跡本部裏地点，K399遺跡工学部J・I棟間地点，K39遺跡西門地点，他。
Issue Date	2002-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53584
Type	other
File Information	HokkaidoUnivSites12.pdf



北大構内の遺跡

XII

平成 11・12 年度調査報告

K 39 遺跡地球環境科学研究科研究棟第 2 地点

K 39 遺跡本部裏地点

K 39 遺跡工学部 J・I 棟間地点

K 39 遺跡西門地点，他

北海道大学

平成 14 年 3 月

北大構内の遺跡

XII

例 言

- 1 本書は、北海道大学構内において、平成 11・12（1999・2000）年度におこなった埋蔵文化財調査の成果をまとめたものである。
- 2 調査は北海道大学埋蔵文化財調査室指導委員会の指導のもと、北大埋蔵文化財調査室が中心となって実施した。なお、埋蔵文化財調査室指導委員会・埋蔵文化財調査室室員は以下の通りである。
【埋蔵文化財調査室指導委員会】
 小泉 格（大学院理学研究科 教授）平成 13 年 3 月まで
 （埋蔵文化財調査室 室長）同上
 林 謙作（大学院文学研究科 教授）平成 13 年 3 月まで
 島本義也（北方生物圏フィールド科学センター 教授）
 渡邊暉夫（大学院理学研究科 教授）
 三田地利之（大学院工学研究科 教授）
 平川一臣（大学院地球環境科学研究科 教授）平成 12 年 4 月より
 小杉 康（大学院文学研究科 助教授）
 （埋蔵文化財調査室 室長）平成 13 年 4 月より
【埋蔵文化財調査室 室員】
 椿坂恭代（非常勤講師）平成 13 年 3 月まで
 高倉 純（非常勤講師）平成 13 年 4 月より
- 3 本書の編集は小杉 康がおこない、本文（Ⅰ～Ⅲ章）は高倉 純が執筆した。整理作業分担は以下の通り。
 遺物水洗・注記・接合：高倉 純・小野哲也・松田宏介・木山克彦（北大院生）、宇井謙輔・村田千春（北大学生）
 遺物実測・トレース・レイアウト：高倉・小野・時田太一郎（北大院生）・佐藤紀子・高桑房子
 図面トレース・レイアウト：高倉・中沢祐一（北大院生）・佐藤・高桑
 遺物写真撮影・レイアウト：高倉・松田・野沢悠子（北大学生）
- 4 動植物遺存体および関連科学については、下記の方々に分析を依頼し、原稿をいただいた。
 第Ⅱ章 5 節 1 動物遺存体：高橋 理（千歳市サケのふるさと館）
 第Ⅱ章 5 節 2 植物遺存体：椿坂恭代（札幌国際大学吉崎研究室考古植物研究会）
 第Ⅱ章 5 節 3 火山灰同定：中村有吾（日本学術振興会特別研究員・北海道大学大学院地球環境科学研究科）
- 5 発掘・整理作業には下記の人々が従事した。
 林 謙作・小杉 康（北大文学部）、椿坂恭代（北大埋文調査室）、高倉 純・大西秀之・高瀬克範・中沢祐一・小野哲也・江口志麻・澤井 玄・サリモヴァ・グリナラ・時田太一郎・松田宏介・木山克彦（北大大学院文学研究科院生）、筒井啓行・マハムード・アリ・佐々木拓也・西明日香・宮岸理恵・古谷いづみ・北口将史・野沢悠子・山崎慎子・宇井謙輔・村田千春（北大文学部学生）、岩山康子、金森ミサヲ、木引和子、久原洋子、後藤京子、小林美津子、斉藤邦子、佐藤幸代、佐藤紀子、佐藤由紀子、菅原スエ、高桑房子、伴 道代、西田静子、西田政衡、福岡孝子、藤井フサヨ、古谷いづみ、宮塚雅子
- 6 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる。（順不同、敬称略）
 秋山洋司、石井 淳、出穂雅実、上野秀一、加藤邦雄、坂井秀弥、仙庭伸久、西脇対名夫、羽賀憲二、藤井誠二、宮塚義人、吉崎昌一
 札幌市埋蔵文化財センター・北海道教育委員会・北海道大学文学部北方文化論講座
- 7 出土遺物・調査記録は、北海道大学埋蔵文化財調査室で保管・管理している。

凡 例

- 1 方位は、真北に統一してある。
- 2 挿図の縮尺は、各々にスケールをいれて示した。基本的な縮尺率は以下の通りである。
遺構 発掘区セクション：1/55
 竪穴住居址：1/50 または 1/30
 竪穴住居址カマド：1/30
 土坑：1/20 または 1/40
 炉址、炭化物集中：1/20 または 1/40
遺物 土器：1/3
 石器：2/3
- 3 写真の縮尺は、遺構については任意であるが、遺物は挿図と同じ比率である。
- 4 遺構図面で使用した遺物記号の凡例は、図2に示した。シンボル等の凡例は図1に示した。
- 5 土器と石器の属性凡例図は、図3～6に示した。
- 6 遺構の平面図、断面図、本文中で使用した遺構の略称は以下の通りである。
HP：竪穴住居址，PIT：土坑，SPT：柱穴，HE：炉址，DC：炭化物集中箇所
- 7 図26は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「札幌」を使用した。
- 8 土層観察の際の色相、土色は、原則として『新版標準土色帳』（小山・竹原 1973）を用いた。
- 9 層名の記載は、北大構内標準層序の場合はローマ数字で、各地点ごとの自然堆積層、遺構覆土、炉址・炭化物集中箇所の土層の場合はアラビア数度で記載した。カマド覆土の場合は大文字アルファベットで記載した。沢状の落ち込みの場合は、SWを頭に、各地点内で個別の沢ごとにA，Bと名付けていき、その後にハイフン、層名の順番で命名していく（例：SWA-1，SWB-1，SWB-2）。

《目次》

例言	1
凡例	2
目次	3

《本文目次》

第Ⅰ章 北大構内の遺跡と調査の概要

1. 地理的環境と遺跡の立地	6
2. 1999・2000 年度調査の概要	6

第Ⅱ章 発掘調査の成果

Ⅱ-1. K 39 遺跡地球環境科学研究科研究棟

第2地点

1. 調査地点の位置と周辺での過去の調査	10
2. 調査の概要	10
3. 層序	11
4. 遺構と遺物	12
5. 小結	15

Ⅱ-2. K 39 遺跡本部裏地点

1. 調査地点の位置と周辺での過去の調査	17
2. 調査の概要	17
3. 層序	17
4. 遺構と遺物	17
5. 小結	22

Ⅱ-3. K 39 遺跡工学部 J・I 棟間地点

1. 調査地点の位置と周辺での過去の調査	24
2. 調査の概要	24
3. 層序	26
4. 遺構と遺物	26
5. 小結	32

Ⅱ-4. K 39 遺跡西門地点

1. 調査地点の位置と周辺での過去の調査	34
2. 調査の概要	34
3. 地形と層序	34
4. 4 層検出の遺構と遺物	44
5. 6 層出土の遺構と遺物	46
6. 13 層出土の遺構と遺物	50
7. 小結	51

Ⅱ-5. 動植物遺存体および自然科学分析

1. 動物遺存体（高橋 理）	56
2. 植物遺存体（椿坂恭代）	57
3. 火山灰分析（中村有吾）	59

第Ⅲ章 試掘・立会調査の成果

1. 試掘・立会調査で確認された土層堆積	61
2. 1999 年度試掘調査の成果	62
3. 2000 年度試掘調査の成果	67

第Ⅳ章 まとめと展望

《図目次》

図1 遺構凡例図	5
図2 遺物記号凡例図	5
図3 土器部位呼称図	5
図4 口唇部断面形模式図（仙庭編 1995）	5
図5 石器計測位置図	5
図6 円磨度印象図（Krumbein 1941）	5
図7 北大構内の遺跡と 1999・2000 年度調査 実施地点	7
図8 地球環境科学研究科研究棟第2地点周辺の 遺跡（地点）	10
図9 地球環境科学研究科研究棟第2地点の位置	10
図10 地球環境科学研究科研究棟第2地点調査区 の配置	11
図11 地球環境科学研究科研究棟第2地点 F 1 西 壁セクション図	12
図12 地球環境科学研究科研究棟第2地点第1号	

堅穴住居址実測図	13
図13 地球環境科学研究科研究棟第2地点出土土器 拓影図	14
図14 本部裏地点の位置	17
図15 本部裏地点 I 区調査区	18
図16 本部裏地点 F 1 西壁セクション図	18
図17 本部裏地点第1号堅穴住居址及び柱穴実測図	19
図18 本部裏地点出土土器実測図及び拓影図	20
図19 工学部 J・I 棟間地点の位置	24
図20 工学部 J・I 棟間地点 F 1 南壁セクション図	24
図21 工学部 J・I 棟間地点調査区	25
図22 工学部 J・I 棟間第1号堅穴住居址実測図	25
図23 工学部 J・I 棟間第1号堅穴住居址及び 柱穴・土坑実測図	26
図24 工学部 J・I 棟間地点出土土器実測図及び 拓影図(1)	28
図25 工学部 J・I 棟間地点出土土器実測図及び	

拓影図(2)	29
図26 西門地点の位置	34
図27 西門地点の調査区と遺構の分布図	35
図28 西門地点トレンチⅡ北壁セクション図(1)	36
図29 西門地点トレンチⅡ北壁セクション図(2)	37
図30 西門地点トレンチⅡ北壁セクション図(3)	38
図31 西門地点トレンチⅡ北壁セクション図(4)	39
図32 西門地点トレンチⅡ北壁セクション図(5)	40
図33 西門地点深掘り区北壁セクション図	41
図34 西門地点4層出土土坑実測図	43
図35 西門地点6層出土屋外炉址(HE-1)及び 第1号礫群実測図	44
図36 西門地点6層出土屋外炉址(HE-2)実測図	45
図37 西門地点6層出土土器実測図	46
図38 西門地点6層出土石器実測図	47
図39 西門地点6層出土礫重量(左)・最大長(右) ヒストグラム	48
図40 西門地点13層出土竪穴住居址及び屋外炉址 (HE-3)実測図	49
図41 西門地点13層出土炭化物集中箇所 (DC-1, DC-2)実測図	49
図42 西門地点13層出土土器実測図及び拓影図	52
図43 西門地点試料採取地区地質柱状図	59
図44 西門地点テフラ分析結果	59
図45 樽前aテフラ及び白頭山苦小牧テフラの 岩石学的特徴 中村(2002)による	60
図46 構内試掘調査土層セクション図	61
図47 構内試掘・立会調査位置図(1)	63
図48 構内試掘・立会調査位置図(2)	64
図49 (理)地震計設置予定地試掘調査区と 遺物の出土状況	65
図50 (理)地震計設置予定地試掘調査区 北壁セクション図	65
図51 (理)地震計設置予定地試掘調査区 出土土器拓影図	66

《表目次》

表1 1999年度実施調査一覧	8
表2 2000年度実施調査一覧	9
表3 地球環境科学研究科研究棟第2地点基本層序 観察表	12
表4 地球環境科学研究科研究棟第2地点出土第1号 竪穴住居址覆土観察表	13
表5 地球環境科学研究科研究棟第2地点出土土器 観察表	14
表6 本部裏地点基本層序観察表	18
表7 本部裏地点出土遺構覆土観察表	20
表8 本部裏地点出土土器観察表	21
表9 本部裏地点出土石器観察表	21

表10 本部裏地点出土礫観察表	21
表11 工学部J・I棟間地点基本層序観察表	24
表12 工学部J・I棟間地点出土遺構覆土観察表	27
表13 工学部J・I棟間地点出土土器観察表	30
表14 工学部J・I棟間地点出土礫観察表	32
表15 西門地点基本層序観察表	41
表16 西門地点深掘り区土層観察表	42
表17 西門地点4層出土土坑覆土観察表	43
表18 西門地点4層出土礫観察表	44
表19 西門地点6層出土屋外炉址土層・土坑覆土 観察表	45
表20 西門地点6層出土土器観察表	46
表21 西門地点6層出土石器観察表	47
表22 西門地点6層出土礫観察表	48
表23 西門地点13層出土屋外炉址・ 炭化物集中箇所土層観察表	50
表24 西門地点13層検出沢状落ち込み土層観察表	50
表25 西門地点13層出土石器観察表	50
表26 西門地点13層出土礫観察表	50
表27 西門地点13層出土土器観察表	52
表28 工学部J・I棟間地点及び西門地点出土の 動物遺存体	58
表29 工学部J・I棟間地点及び西門地点 出土の炭化種子	58
表30 北大構内試掘調査土層観察表	62
表31 (理)地震計設置予定地土層観察表	66
表32 (理)地震計設置予定地出土土器観察表	66

《写真目次》

写真1 地球環境科学研究科研究棟 第2地点出土土器	15
写真2 地球環境科学研究科研究棟 第2地点の調査	16
写真3 本部裏地点出土土器及び石器	22
写真4 本部裏地点の調査	23
写真5 工学部J・I棟間地点出土土器(1)	31
写真6 工学部J・I棟間地点出土土器(2)	32
写真7 工学部J・I棟間地点の調査	33
写真8 西門地点6層出土石器	47
写真9 西門地点出土土器 (1:6層出土, 2~15:13層出土)	53
写真10 西門地点の調査(1)	54
写真11 西門地点の調査(2)	55
写真12 西門地点出土炭化種子	58
写真13 (理)地震計設置予定地試掘調査区 出土土器	66
写真14 1999・2000年度調査実施試掘抗の セクション	68

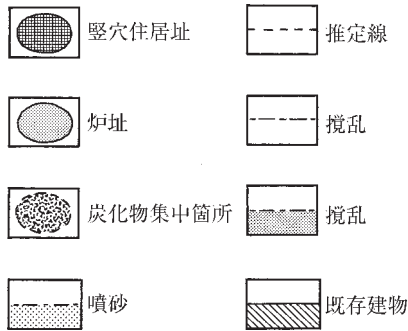


图1 遺構凡例図



图2 遺物記号凡例図

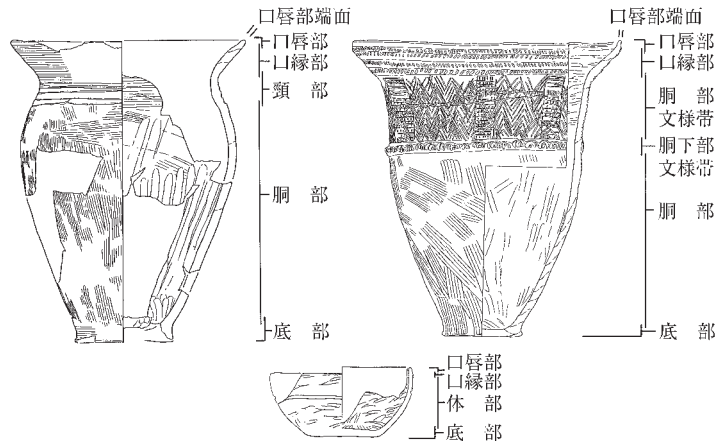


图3 土器部位呼称図

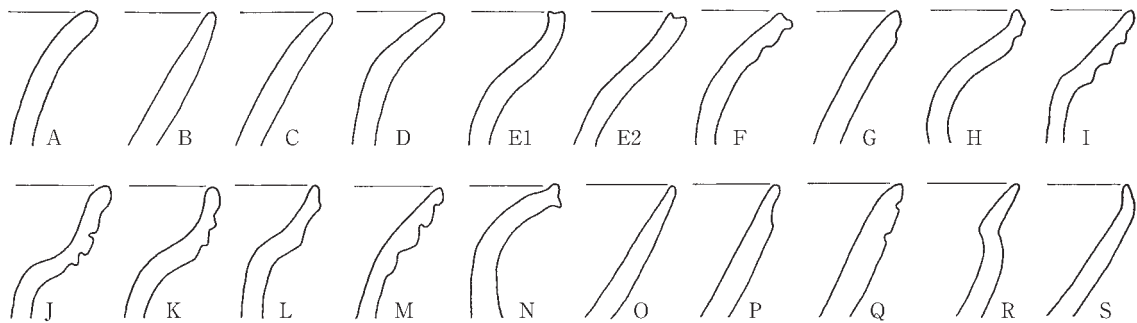


图4 口唇部断面形模式図 (仙庭編 1995)

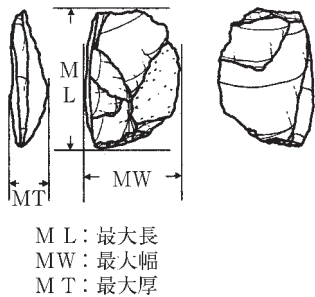


图5 石器計測位置図

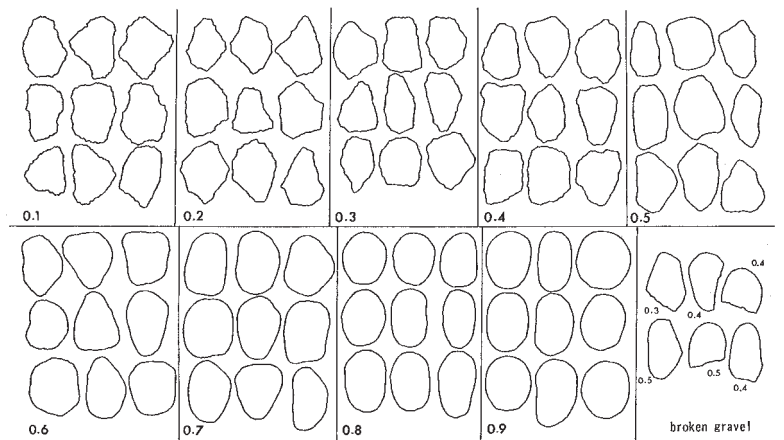


图6 円磨度印象図 (Krumbein 1941)

第 I 章 北大構内の遺跡と調査の概要

1 地理的環境と遺跡の立地

北海道大学が位置する札幌市の地形は、新第三紀から第四紀初頭にかけての造山運動によって形成された北西部から南西部の山地、主に支笏火砕流堆積物からなる東部の丘陵地や台地、豊平川や発寒川によって後期更新世から晩氷期にかけて形成された扇状地や河岸段丘地域、北部に広がる沖積平野地域に大きく区分される。北大構地はそのうち、豊平川によって形成された扇状地のなかでも最も東に位置する札幌扇状地の札幌面末端から北部沖積平野にかけて位置している。

札幌扇状地札幌面の末端には、明治の終わり頃まで、豊平川から地下に浸透した伏流水の出口である湧水池が多数形成されていた。それらを水源とする複数の河川が札幌面から沖積平野へむけて流れている。北大構内を流下する旧琴似川水系に属するサクシュコトニ川、セロンベツ川もそうした河川に該当する。サクシュコトニ川は、偕楽園（ヌプサムメム）を水源とし、北大構内を通過したのち、恵迪寮付近でセロンベツ川に合流し、札幌競馬場の北側でケネウシベツ川に合流する。セロンベツ川は、北大植物園（ピシクシメム）を主な水源とし、北大第一農場の西側を北へむけて流れ、上記のようにサクシュコトニ川と合流する河川である。北大構内の遺跡が立地するのは、主に両河川沿いの自然堤防上であり、時には沼池跡、名残り川の周辺にも遺跡が立地している。

北大構内には、これまで多数の擦文期や縄文期の遺跡が存在することが確認されてきた。第二農場を中心とした北キャンパス内は「K 435 遺跡」、それより以南の南キャンパス内は「K 39 遺跡」として一括登録されている。しかし、それらは実質的には「遺跡群」と呼ぶことができるような遺跡の集合と考えられる。本報告では、便宜的に発掘調査がなされた区域ごとに、「K 39 遺跡〇〇地点」、「K 435 遺跡〇〇地点」と呼称して記載をすすめていくことにしたい。

北海道大学埋蔵文化財調査室では、1994 年度に実施したゲストハウス地点の発掘調査において、北大構内の標準層序の統一化を検討した。その結果、層序を大きく 9

層に区分することが試案として提示された（吉崎編 1995）。発掘調査された各地点の層序を報告する際に対比をおこなうので、以下に概要を示しておく。

0 層：客土、盛土。

I 層：黒色土層（旧表土）。

II 層：灰色シルト層。

III 層：白色粘土層と有機物の多い黒色土層の互層。

IV 層：灰褐色シルト層・粘土層。

V 層：黒色と灰色の粘土の互層。

VI 層：灰褐色シルト層と粘土層。

VII 層：青色粘土層

VIII 層：砂利、砂、シルトの互層。

2 1999・2000 年度調査の概要

1999 年度においては、試掘調査を 15 件、立会調査を 15 件実施した。試掘調査のうち K 39 遺跡地球環境科学研究科研究棟第 2 地点と西門地点に関しては、引き続き本調査を実施することになった。2000 年度では試掘調査を 17 件、立会調査を 8 件実施した。このうちに工学部 J・I 棟間地点および本部裏地点に関しては、引き続き本調査を実施した。西門地点に関しては、前年度に引き続きの本調査を実施した。

本報告書では、第 II 章において発掘調査の成果を報告する。第 III 章では試掘・立会調査の概要について報告する。

2000 年度に実施した試掘調査のうち北 23 条外周樹林帯予定地、馬術部馬道通路フェンス設置予定地、(理)地震計設置工事予定地（以上、K 435 遺跡）文系総合研究棟建設予定地（K 39 遺跡）においては、遺物や遺構の検出を確認することができた。(理)地震計設置工事予定地を除く 3 つの箇所に関しては、次年度以降に調査が本格化されることになった。そのため、上記 3 箇所での試掘調査の成果については、2001 年度以降の調査成果を報告する際にその成果を報告することとし、本報告には掲載していない。

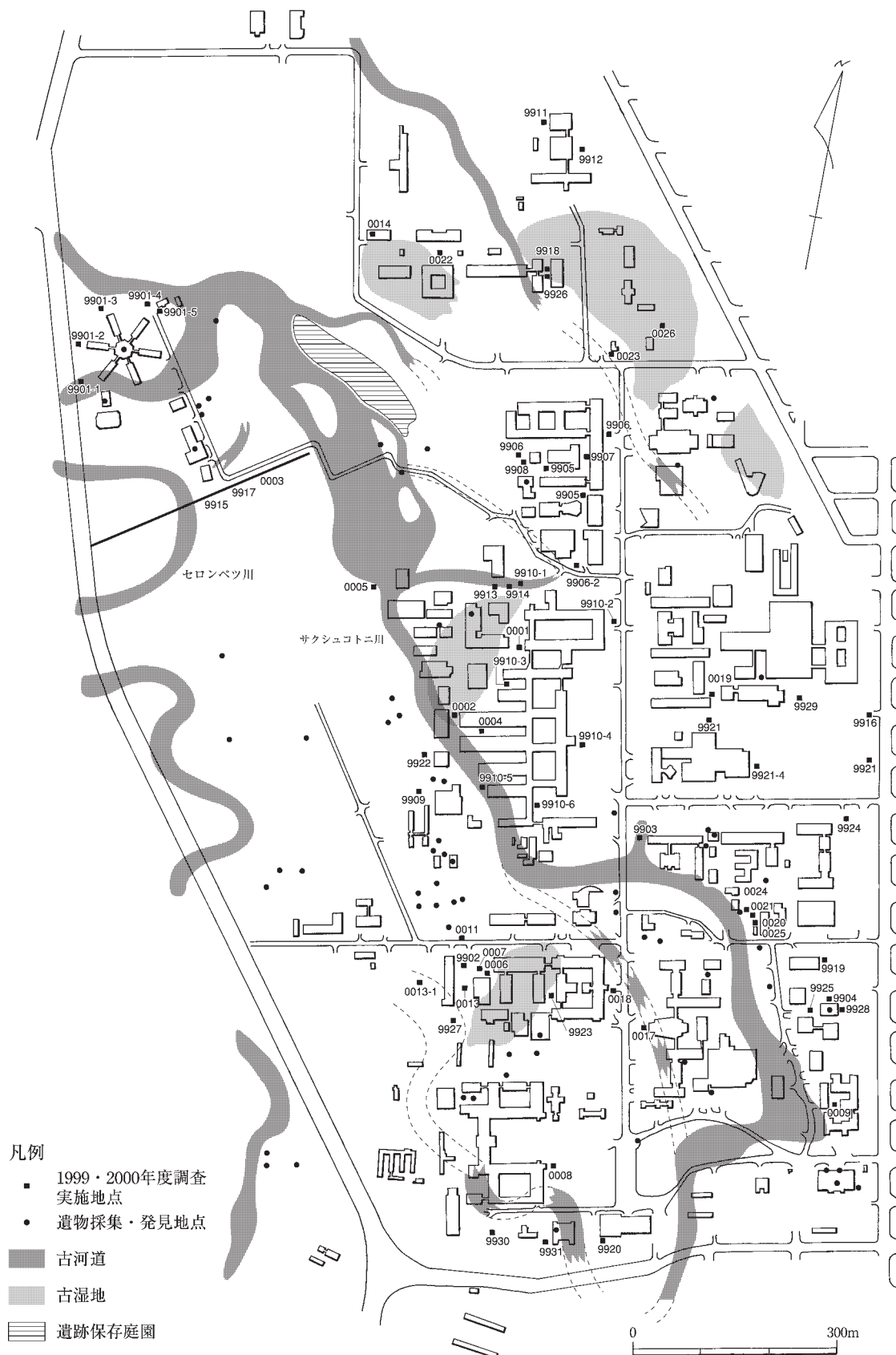


図7 北大構内の遺跡と1999・2000年度調査実施地点

表Ⅰ 1999 年度実施調査一覧

調査番号	調 査 日 時	工 事 名 称	調査の種類	調査面積	時 代	遺 構 ・ 遺 物
9901	'99 4/15	恵迪寮周辺街路灯設備工事	立会			遺構・遺物なし
9902	'99 4/16	触媒科学研究所プレハブ設置工事	立会			遺構・遺物なし
9903	'99 4/27	電子科学研究所ヘリウム回収設備工事	立会			遺構・遺物なし
9904	'99 6/2～15	地球環境科学研究実験棟新営工事	発掘調査	981	擦文	住居址，土器片，礫
9905	'99 7/27	高等教育機能開発総合センター ボイラーユニット設置・樹木移植	試掘調査			遺構・遺物なし
9906	'99 7/28	総合メディア交流棟防火水槽設置工事	試掘調査			遺構・遺物なし
9907	'99 8/4	高等教育機能開発総合センター E棟改修工事	試掘調査			遺構・遺物なし
9908	'99 8/5	総合メディア交流棟ゴミ置き場設置工事	試掘調査			遺構・遺物なし
9909	'99 8/6	第一農場ポンプ室新営工事	試掘調査			遺構・遺物なし
9910	'99 8/4・13, 9/13	工学部研究実験棟新営防火水槽設置工事	試掘調査			遺構・遺物なし
9911	'99 8/26	低温科学研究棟新営予定地樹木の伐採・伐根	立会			遺構・遺物なし
9912	'99 8/30～9/2	低温科学研究所研究棟新営工事	試掘調査			遺構・遺物なし
9913	'99 9/13	工学部研究実験棟危険物倉庫建設予定地の 樹木移植	立会			遺構・遺物なし
9914	'99 9/14	工学部研究実験棟危険物倉庫設置工事	試掘調査			遺構・遺物なし
9915	'99 9/16～10/8	西門整備一歩車道新設工事	試掘調査	775	擦文	屋外炉址，土坑，住居址，沢状落ち込み，土器片，礫
9916	'99 10/21	医学部附属病院ロードヒーティング配線工事	立会			遺構・遺物なし
9917	'99 10/17～29	西門整備一排水溝新設工事	発掘調査	670	擦文	屋外炉址，礫群，土器片，石器
9918	'99 10/25～26	低温科学研究所研究棟ガス管理設工事	試掘調査			遺構・遺物なし
9919	'99 10/23～24	地球環境科学研究実験棟中圧ガス管理設工事	立会			遺構・遺物なし
9920	'99 10/28	クラーク会館改修工事空調機用排管設備工事	立会			遺構・遺物なし
9921	'99 11/2	医学部附属病院熱源設備・ガス管理設・渡り廊下設置工事	試掘調査			遺構・遺物なし
9922	'99 11/5	工学部吸水管設備工事	立会			遺構・遺物なし
9923	'99 11/8	理学部本館ガス管理設工事	立会			遺構・遺物なし
9924	'99 11/13	13条門街路灯用ケーブル埋設工事	立会			遺構・遺物なし
9925	'99 11/15	地球環境科学研究実験棟中圧ガス管理設工事他	試掘調査			遺構・遺物なし
9926	'99 11/15	獣医学部プレハブ設置に伴う給排水管設置工事	立会			遺構・遺物なし
9927	'99 11/16～22	理学部総合研究棟新営工事	試掘調査			遺構・遺物なし
9928	'99 11/21	地球環境科学研究実験棟低圧ガス管理設工事	立会			遺構・遺物なし
9929	'99 11/26	医学部附属病院ロードヒーティング配線工事	立会			遺構・遺物なし
9930	'99 12/1	記念碑建立工事	立会			遺構・遺物なし
9931	'00 3/24	留学生センターガレージ設置工事	立会			遺構・遺物なし

表2 2000年度実施調査一覧

調査番号	調 査 日 時	工 事 名 称	調査の種類	調査面積	時 代	遺 構 ・ 遺 物
0001	'00 6/12	工学部系総合研究棟新営に伴う樹木移植	試掘調査			遺構・遺物なし
0002	'00 6/13, 7/6～11	工学部系総合研究棟新営に伴う共同溝工事	試掘調査			遺構・遺物なし
0003	'00 6/19～7/15	西門整備—平成のポプラ並木植樹	発掘調査	927	擦文	屋外炉址, 土坑, 土器片, 礫
0004	'00 6/22～7/28	工学部総合研究棟新営に伴うポンベ庫・液体燃料庫・排水溝設置工事	発掘調査	83	擦文	住居址, 土坑, 土器片, 礫
0005	'00 7/5	工学部地中熱交換器設置工事	試掘調査			遺構・遺物なし
0006	'00 7/6～7	理学部総合研究棟新営に伴う薬品庫設置工事	試掘調査			遺構・遺物なし
0007	'00 7/7	理学部総合研究棟工事に伴う現場事務所の排水溝設置工事	試掘調査			遺構・遺物なし
0008	'00 7/7	水産学部記念碑建立	立会			遺構・遺物なし
0009	'00 7/7～25	本部裏渡り廊下設置工事	発掘調査	83	擦文	住居址, 土器片, 礫, 石器
0011	'00 7/13～14	理学部総合研究棟工事に伴う樹木移植	試掘調査			遺構・遺物なし
0012	'00 9/1～10/25	北23条外周樹林帯予定地	試掘調査		続縄文	石器
0013	'00 9/13・25・26	理学部ガス管理設工事	立会			遺構・遺物なし
0014	'00 9/29	第二農場南ケーブル線埋設工事	試掘調査			遺構・遺物なし
0015	'00 10/27～11/2	馬術部馬道通路フェンス取り付け工事	試掘調査		擦文	遺構・遺物確認
0016	'00 11/2～5	(理)地震計設置工事	試掘調査		擦文	土器片
0017	'00 11/7～17	文系総合研究棟新営工事	試掘調査		続縄文	遺構・遺物確認
0018	'00 11/13	総合博物館門柱設置工事	試掘調査			遺構・遺物なし
0019	'00 12/12	医学部附属病院渡り廊下取り付け工事	立会			遺構・遺物なし
0020	'00 12/14	(理)倉庫取り壊し工事	立会			遺構・遺物なし
0021	'00 2/21	中央変電所腐葉土置場解体・樹木伐採除根	立会			遺構・遺物なし
0022	'00 3/6	獣医学部車庫新営工事	立会			遺構・遺物なし
0023	'00 3/7～9・13～14	モデルバーン事務所改修機械設備工事	立会			遺構・遺物なし
0024	'00 3/9～12	中央変電所機材庫解体工事	立会			遺構・遺物なし
0025	'00 3/27	中央変電所新営工事	試掘調査			遺構・遺物なし
0026	'00 3/29	遠友学舎新営工事	試掘調査			遺構・遺物なし

第II章 発掘調査の成果

II-1 K 39 遺跡地球環境科学研究科 研究棟第2地点

1. 調査地点の位置と周辺での過去の調査

本地点は、北海道大学構内の南東部、北緯43度4分13秒、東経141度21分2秒に位置する。遺構・遺物の包含層はおおよそ標高14.2mである。サクシュコトニ川上流部右岸に、遺跡（本地点）は立地する。

周辺には、サクシュコトニ川上流部右岸にいくつかの包蔵地点が存在する。南から1984年度に調査された中講堂（学術交流会館）地点（吉崎・岡田編1987）、1995年度に調査された地球環境科学研究科研究棟第1地点（小泉・林編2000）、1983年度に調査された薬学部受水槽予定地点（吉崎編1985）がそれである。また、次節で報告する本部裏地点も本地点から至近の距離に位置している（図8）。上述した地点のうち中講堂（学術交流会館）地点からは、性格不明の小竪穴が2基検出されている。

2. 調査の概要

本調査は、北海道大学大学院地球環境科学研究科の新研究実験棟建設に伴い実施された。本調査区域のすぐ南側には、1995年度に調査された地球環境科学研究科研究棟第1地点が位置している（小泉・林編2000）。第1地点からは、すでに報告されているように、擦文期の遺物包含層の存在が確認されている。第1地点における遺物の分布状況から考えて、今回の調査対象区域においても、擦文期の遺構・遺物包含層が存在している可能性は高いと判断された。

調査区は、まず新研究実験棟の建設予定地をI区とし、その周辺で新研究実験棟建設関連で配管等の工事が予定されている区域をII区と呼称した（図9）。さらにII区のそれぞれのトレンチにはIIa トレンチ、IIb トレンチという名称を順につけ、調査を実施していった（図10）。

調査は、まず重機によって客土を除去したのち、北大構内標準層序I・II層に相当する自然堆積層に関しては、

人力で遺構・遺物の有無を確認しながら掘り下げた。その結果、調査区内にはかつての北大の建物の基礎が縦横に残されていたことが確認できた。しかし、人為的な攪乱による破壊をうけていない区域もあり、I区の南側では竪穴住居址が1基検出された（図10）。

第2地点は、第1地点の調査結果から考えて、擦文期

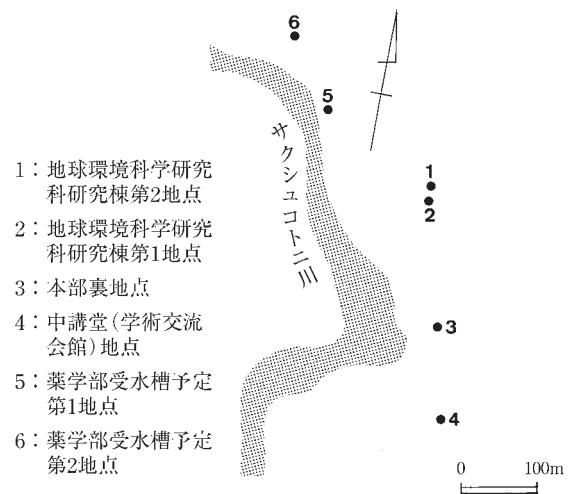


図8 地球環境科学研究科研究棟第2地点周辺の遺跡(地点)

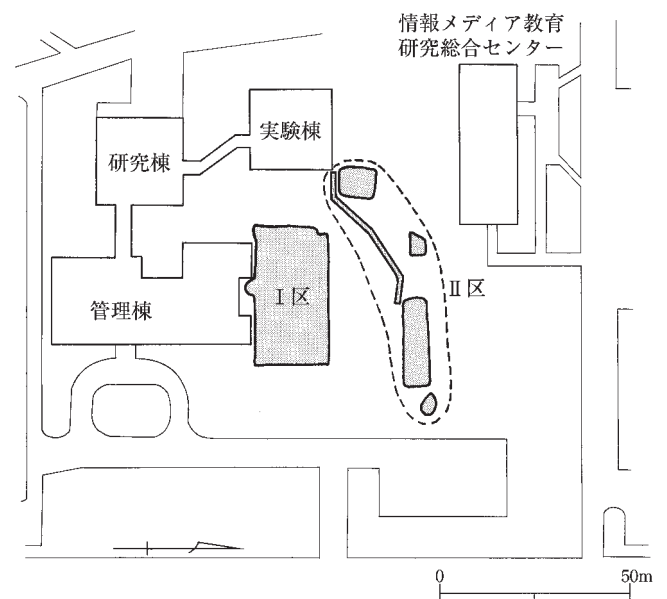


図9 地球環境科学研究科研究棟第2地点の位置

の遺構・遺物包含層の存在を想定して調査をすすめたが、さらに下位の土層においても遺構・遺物が包含していないかどうかの確認をおこなうために、I区内に4箇所、IIa区で1箇所、現地表面から約2.5～3mの深度までの深掘り区を設定し、調査を実施した。I区の深掘り区をF1～F4、II区の深掘り区をF5と呼称する(図10)。結果的に、擦文期をさかのぼる遺構・遺物を確認することはできなかった。

3. 層序

本調査区内では、堆積土層の状況に大きな変化は認め

られなかったため、I区南西隅の深掘り区(F1)で記録したセクションを本地点の基本層序として示す(図11, 表3参照)。1層は現代の客土で、以前の建物の基礎、建築工事に関連すると考えられる砂、それにガラスや茶碗等のゴミが投棄されていた。2層以下が自然堆積層である。2層は北大構内標準層序第I層に、3～6層は同第II層に、7～9層は同第IIIないしはIV層に、10層以下は同第V層以下に対比できると考えられる。

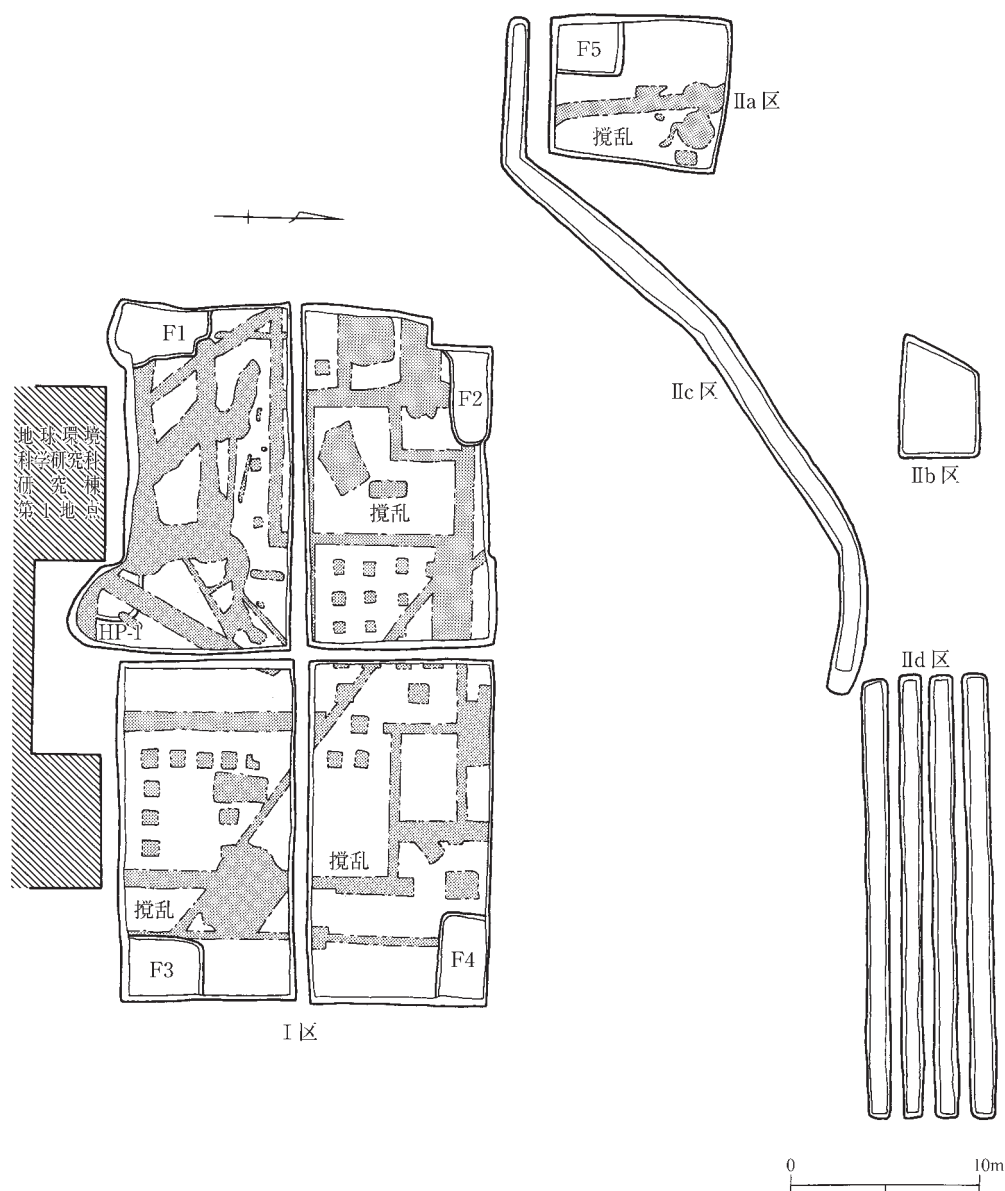


図10 地球環境科学研究科研究棟第2地点調査区の配置

4. 遺構と遺物

a. 遺構

今回の調査で検出された遺構は、擦文期の竪穴住居址 1 基である（図 12）。

第 1 号竪穴住居址は、調査区の南側中央付近で基本層序 3 層上面で黒色土が部分的に方形を呈して分布していることから確認された（図 10）。遺構は、調査区の南側にさらにのびていることが確認されたため、部分的に調査区を南側へ拡張し、遺構の調査をすすめたが、その大半はすでに削平されていた。

第 1 号竪穴住居址は、基本層序の 3 層を掘り込んで構築されている。掘り込み面の標高は約 14.4 m である。西側及び南側の壁面・床面は削平されているものの、住居址の平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。現存部の床面積は 2.89 m²、壁高は約 35 cm である。床面を精査したが、柱穴を検出することができなかった。またカマドも確認されなかった。

覆土は、壁際および床面に沿って覆土 5 層が堆積し、その後、壁際で覆土 4 層が堆積している。出土遺物はすべて破片資料で、ほとんどが覆土 2 層から検出されている。床面からの検出は認められなかった。接合関係をもつ破片資料は、個体番号 2、4 とともに住居址内から検出されているが、いずれも 2 点の破片が接合するのみである。住居址外からもわずかな破片が出土した。

b. 遺物

本地点出土の遺物は、総破片数で 37 点（遺物座標点 33 箇所）、総重量（11,631.9 g）である。重量（11,220 g）の礫 1 点を除きすべて土器（計 411.9 g）である。このうち長胴甕は 33 点（91.7%）、坏は 3 点（8.3%）である。

破片資料での長胴甕・球胴甕・坏の区分は、想定される器形、器厚、黒色処理の有無、ハケメ調整の状況などにもとづいておこなっている。ただし、器面の剥落が著

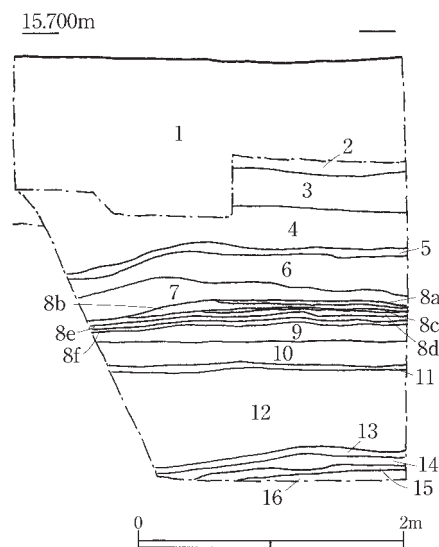


図 11 地球環境科学研究科研究棟第 2 地点 F | 西壁セクション図

表 3 地球環境科学研究科研究棟第 2 地点基本層序観察表

層名	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
1					客土
2	黒褐色	砂質シルト	やや弱	中	
3	暗褐色	砂質シルト	やや弱	やや弱	
4	黄褐色	粘土質シルト	強	やや強	
5	茶褐色	砂	やや強	やや弱	
6	黄灰褐色	粘土	強	強	
7	赤褐色	粗砂	やや強	弱	灰褐色粘土混じる。
8 a	白色	粘土質シルト	強	強	
8 b	灰色	粘土	強	強	
8 c	黄白色	粘土	強	強	
8 d	灰色	粘土	強	強	
8 e	白色	粘土	強	強	
8 f	灰色	粘土	強	強	
9	灰褐色	シルト質粘土	強	強	
10	黄褐色	粘土	やや強	弱	本層上部に灰褐色砂質シルト混じる。
11	暗灰色	粘土	強	強	炭化物やや多量に混じる。
12	黄褐色	シルトを主体とする砂との互層	中	弱	
13	灰色	粘土	強	強	
14	褐色	砂	弱	やや弱	
15	灰色	粘土	強	強	
16	黄褐色	砂	弱	弱	

肩が角張り（F類）、口唇部端面に凹線が若干認められる。口唇部外面には4条の沈線がつけられている。器面調整は内外面ともにハケメが主体となっている。口縁部の外面ではナデ（横）が施されている。2～7は長胴甕の胴部破片である。4・5の頸部付近には数条の段が認められる。器面調整は、外面はハケメ（縦）、内面はハケメ（横）が主体となっているが、内面はハケメの後にミガキが施されているものが多い。5の外面は、ハケメ（横）のうちハケメ（縦）を全面おこない、その後部分的にミガキが施されている。8は坏の口縁部破片である。体部に段

がつけられている。底部はやや丸みをおびていた可能性がある。外面は口縁部付近のみでハケメ（横）が施された後、全面的にミガキが施されている。内面はミガキが施されている。黒色処理は内面から外面体部上半にまで及んでいる。

第2地点出土土器には、全体の器形をうかがうことができるような個体は検出されなかったが、破片資料からは共通項として、①長胴甕に関しては、口唇部外面には沈線が、頸部には数条の段が認められること、②坏に関しては、体部に段が認められ、底部は丸みをもっている

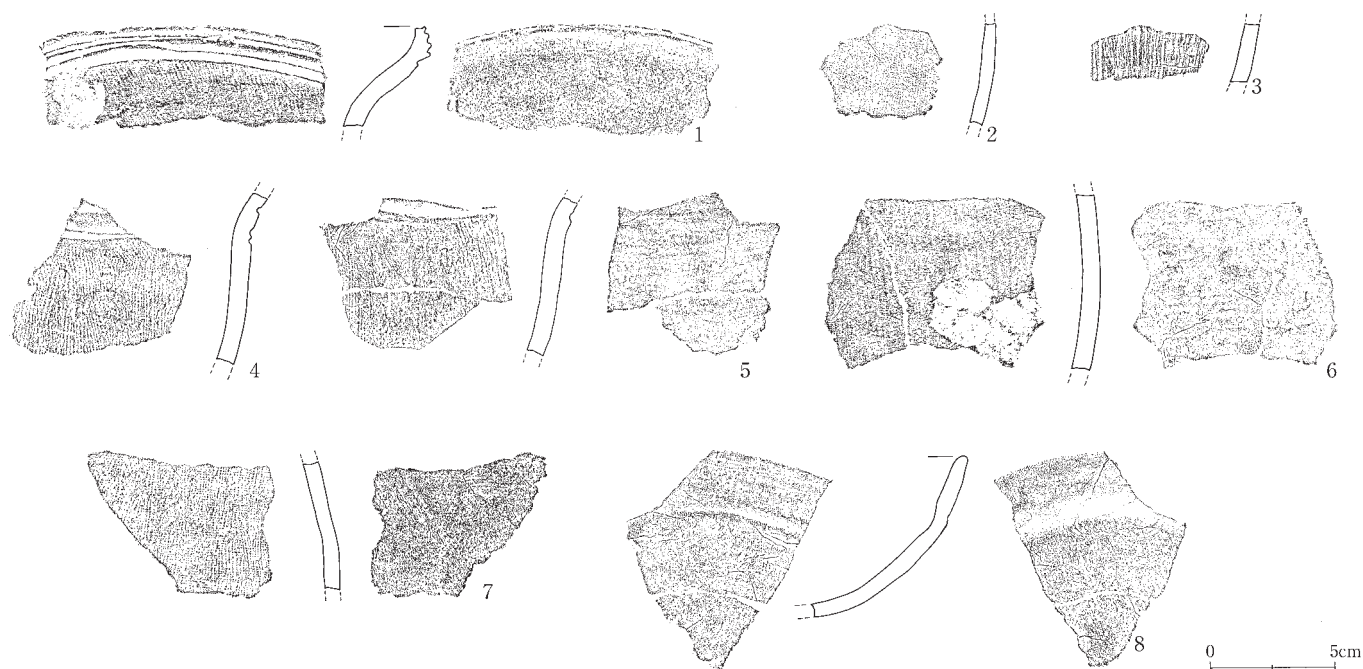


図13 地球環境科学研究科研究棟第2地点出土土器拓影図

表5 地球環境科学研究科研究棟第2地点出土土器観察表

挿図 番号	個体 番号	器 種	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	器 面 調 整		口縁部 断面形	底部 形状	層位	遺物 番号	写真 番号	備考
							外 面	内 面						
13-1	7	長胴甕				46.7	口縁部：ハケメ（縦）→ナデ（横）、胴部：ハケメ（縦）	ナデ（横）	F		覆土 2	19	1-1	
13-2	8	長胴甕				12.0	ハケメ（縦）	ハケメ（横）			覆土 2	14	1-2	
13-3	6	長胴甕				7.9	ハケメ（縦）				2	33	1-3	
13-4	1	長胴甕				34.2	ハケメ（縦）	ナデ（横）			覆土 2	2	1-4	
13-5	2	長胴甕				37.3	ハケメ（横）→ハケメ（縦）→ミガキ	ミガキ			覆土 2	18・26	1-5	
13-6	5	長胴甕				49.5	ハケメ（縦）→ミガキ	ハケメ（横）→ミガキ			覆土 2	35	1-6	
13-7	3	長胴甕				25.8	ハケメ（縦）	ハケメ（横）→ミガキ			覆土 2	15	1-7	
13-8	4	坏				40.0	口縁部：ハケメ（横）→ミガキ、体部：ミガキ、体部上半まで黒色処理	ミガキ、黒色処理			覆土 2	16・17	1-8	

であろうこと、などの特徴が指摘できる。どちらも文様は施されていない。

5. 小結

地球環境科学研究科研究棟第2地点では、攪乱による破壊をうけていながらも、擦文期の遺構・遺物包含層を確認することができた。しかし、遺構・遺物の広がりには調査区の南側にのみ限られており、なおかつ検出された遺構・遺物は、竪穴住居址1基とごくわずかな遺物に限られていた。第2地点の南側に位置する第1地点でも擦文期の遺物包含層が確認されているが、同様に散漫な遺物の広がりが確認されているにすぎない。第2地点と第1地点との間及びその周辺では、類似する遺構・遺物の

広がりが存在している可能性が想定されよう。

本地点出土の遺物は、ほとんどが竪穴住居址覆土およびその周辺から検出された。しかし、出土した遺物は、ごく少数の土器破片でしかなかったため、相互に接合関係をもつことはほとんどなかった。結果的に、本地点出土土器群の器形、器面調整に関する諸特徴を量的に検討することはできなかった。しかしながら、先に述べた土器の諸特徴は、基本的には宇田川編年（宇田川 1980）による擦文前期に属する土器群と考えられる。一括性は比較的高い資料群とみてよからう。長胴甕や坏の諸特徴は、第1地点調査出土資料（小泉・林編 2000）と一定の共通性をもっている。

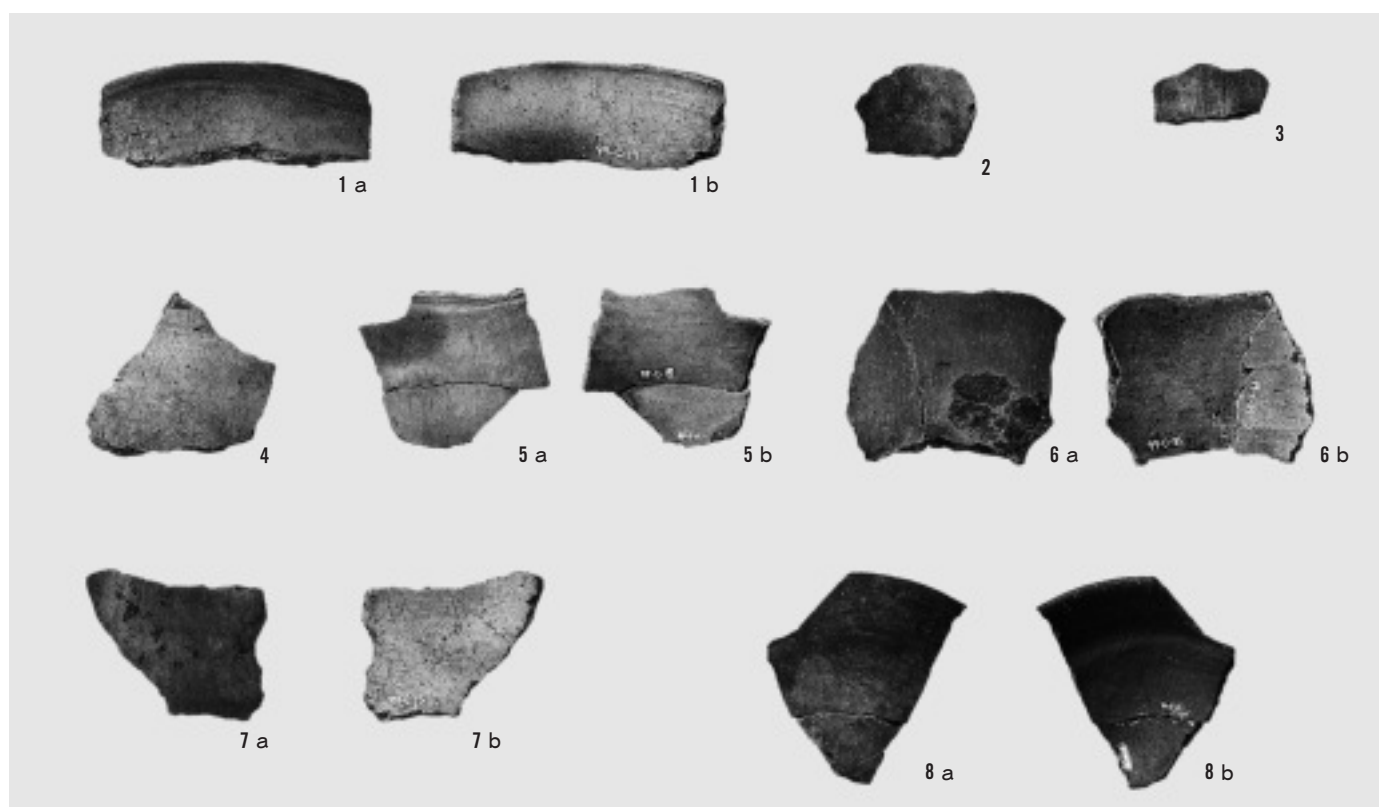
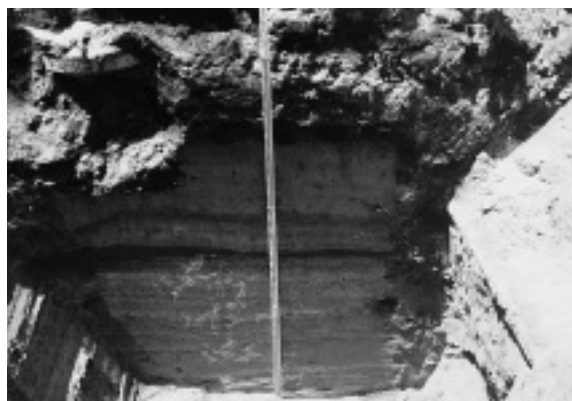


写真1 地球環境科学研究科研究棟第2地点出土土器



1. I区全景（南より）



2. I区F1西壁（セクション：東より）



3. 第1号竪穴住居址（検出状況：北より）



4. 第1号竪穴住居址（調査中：東より）



5. 第1号竪穴住居址（セクション：北より）



6. 第1号竪穴住居址（完掘：南より）

II-2 K 39 遺跡本部裏地点

1. 調査地点の位置と周辺での過去の調査

本地点は、北海道大学構内の南東部、北緯 43 度 4 分 9 秒、東経 141 度 21 分 2 秒に位置する。遺構・遺物の包含層の標高は約 14.5 m である。遺跡(本地点)は、サクシュコトニ川上流部右岸に立地する。

周辺には、先述した地球環境科学研究科研究棟第 1 地点(小泉・林編 2000)、同第 2 地点(本書第 II 章 1 で報告)、中講堂(学術交流会館)地点(吉崎・岡田編 1987)などがある(図 8 参照)。

2. 調査の概要

今回の調査は、北大本部から学生部にかけて渡り廊下を建設するために実施された。工事深度が約 1 m に達することから、擦文期の遺構・遺物包含層の調査を主要な目的として調査が計画された。本地点での縄文期の遺構・遺物包含層の存否の確認については、工事深度が及ばないことから、調査を実施していない。調査は、学生部側の北側の区画を I 区とし、南側を II 区と呼称しすめた(図 14)。

調査は、まず重機によって客土を除去したのち、北大構内標準層序 I 層や II 層に相当する自然堆積の土層が確認された段階で、人力で掘り下げ遺構・遺物の有無の確認をすすめていった。その結果、II 区は全域にわたり攪乱による破壊をうけていることが判明した。ただし、この攪乱がどの深度にまで及んでいるのかは、今回の調査では明らかにされていない。I 区においても攪乱による破壊が部分的に確認されたが、自然堆積の土層が良好に遺存することも明らかとなった。調査区の西側中央付近からは竪穴住居址 1 基が検出された。

I 区の北側の区域では、さらに下位の土層の堆積状況を確認するために、小規模な深掘り区(F 1)を設定し調査を実施した(図 15)。

3. 層序

F 1 での土層堆積に関する観察をもとに、本地点での基本層序を設定した(図 16、表 6 参照)。1 層は客土であり、コンクリート・ブロック、ガラス、工事用玉石など

が含まれている。2 層以下が自然堆積層である。北大構内標準層序 I 層に対比できる黒色土層は本地点では認められず、すでに削平されてしまったものと考えられる。2～4 層は標準層序 II 層に対比できるものと考えられ、5 層以下は標準層序 III 層以下に対比できる可能性がある。

4. 遺構と遺物

a. 遺構

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居址 1 基とそれに付随すると考えられる柱穴 2 本である(図 17)。

第 1 号竪穴住居址は、基本層序 2 層のなかに、住居址の覆土となっている黒色土が隅丸方形に分布していたことから確認された。確認面は基本層序 2 層上面である。本調査区においても最近の人為的な攪乱による破壊が著しく、住居址の北側部分は攪乱により破壊されていた。調査区外には、住居址の西側約 1/3 が残存していると考えられる。竪穴住居址の覆土の調査にあたっては、住居址の形状に沿って北西―南東方向にベルトを設定し、覆土の堆積状況の観察をおこなった。南北方向に関しては、調査区の西壁を利用して観察をおこなった。

調査によって検出された現存床面積は 3.14 m² で、現

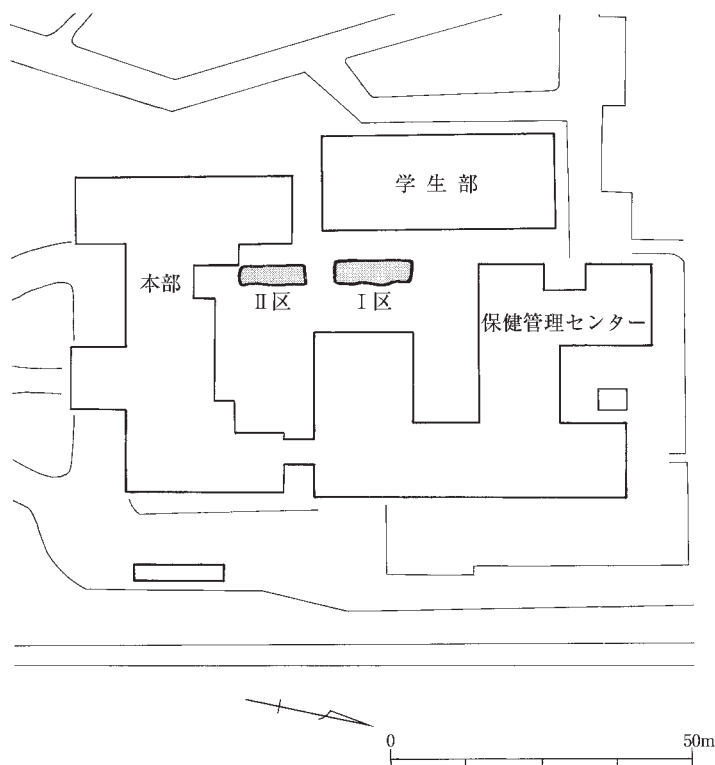


図14 本部裏地点の位置

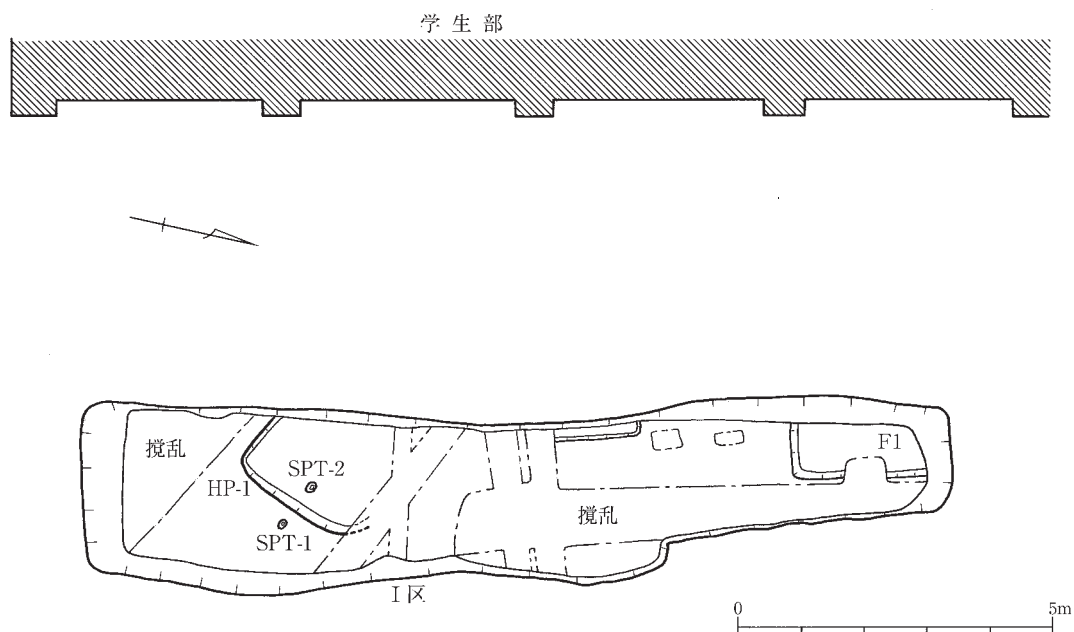


図15 本部裏地点I区調査区

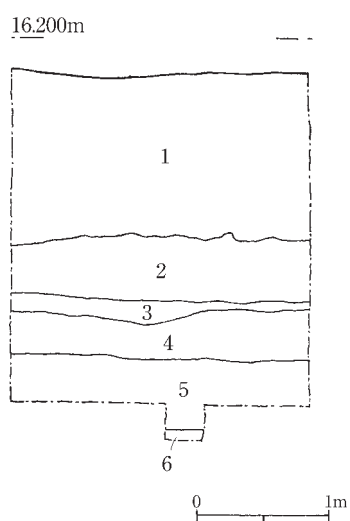


図16 本部裏地点F1西壁セクション図

存壁高は約 20 cm である。掘り込み面は、2 層上面もしくは人為的に削平されてしまったそれより上位の層中と考えられる。掘り込み面の標高は約 14.5～14.6 m と想定される。竪穴住居址の全体的な形状は、隅丸方形を呈している。覆土は、4 層が壁際に厚く堆積し、なおかつ床面に沿って薄く堆積している。その後、炭化物を含む 3 層、2 層が堆積する。

本号住居址からはカマドを確認することはできなかった。住居址の中央付近では、土器の集中的な分布を確認した際に、床面が若干被熱赤化している状態が観察されたが、焼土は確認できなかった。柱穴は、住居址内の南東側で 1 本検出された (SPT-2)。確認面からの深さは約 18 cm である。また住居址外から SPT-2 と形態的に類似する柱穴 (SPT-1) が 1 本検出されている。こちらの方は、確認面からの深さが約 10 cm である。柱穴は 2 本

表 6 本部裏地点基本層序観察表

層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
1						客土
2	7.5 YR 4/3	褐色	砂質シルト	中	やや弱	
3	10 YR 5/2	灰黄褐色	シルト	強	やや強	
4	7.5 YR 4/3	褐色	砂	弱	弱	粗砂が混じる。
5	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	粘土	やや強	強	10 YR 4/1 褐色粘土がレンズ状に入る。
6	7.5 YR 4/4	褐色	砂	弱	弱	

とも円形である。

住居址内の遺物は、覆土2層下部から4層にかけて検出されている。とくに住居址の中央部分および東側部分に、多数の遺物が分布する。両集中部分からは、個体番

号1, 13のように、多数の破片が接合し、器形もある程度は復元しうるような個体が発見された。接合関係をもつ破片のうち、個体番号1(図18-1)は住居址の中央部分から検出され、個体番号13(図18-12)は住居址東側

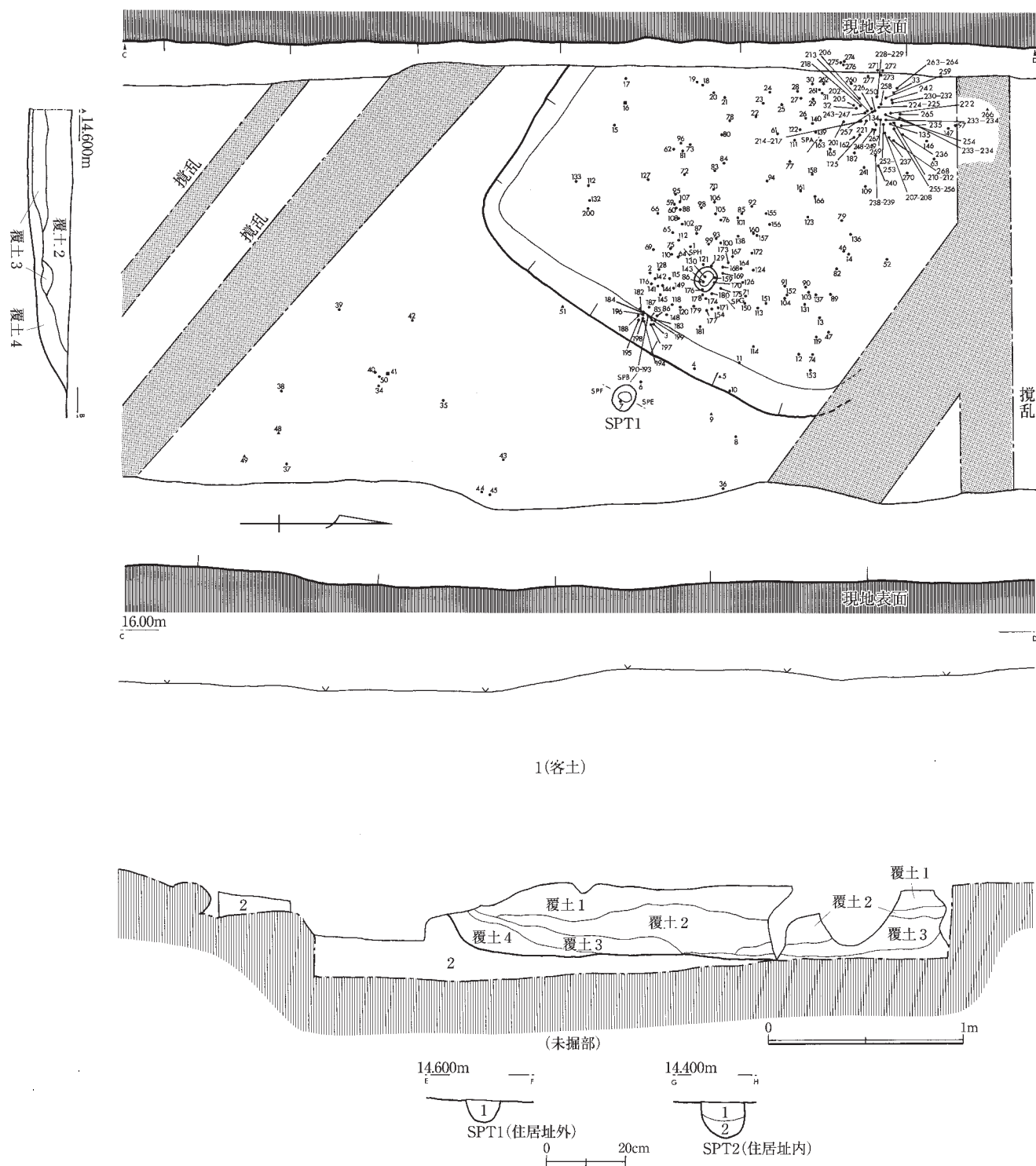


図17 本部裏地点第1号竈穴住居址及び柱穴実測図

表 7 本部裏地点出土遺構覆土観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
HP-1	覆土 1	5 YR1.7/1	黒色	砂質シルト	弱	弱	炭化物少量混じる
	覆土 2	5 YR2/1	黒褐色	シルト	弱	強	
	覆土 3	5 YR1.7/1	黒色	シルト	やや強	やや弱	
	覆土 4	10 YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	やや弱	弱	
SPT-1	1	10 YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	中	強	
SPT-2	1	7.5 YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	やや弱	弱	
	2	7.5 YR4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	

の壁際からまとまって検出された。いずれも覆土 4 層を中心として発見されているが、個体番号 1 に帰属する資料の多くが 4 層でも床面直上出土であるのに対して、個体番号 13 に帰属する資料の多くは、床面からは離れた 4 層中からの出土である。わずかに個体番号 5（図18-6）のみが、住居址の中央部分と東側部分の双方において、覆土 3 層から 4 層にかけて発見された。覆土 2 層ならびに 3 層から検出された土器片は、接合しないものがほとんどである。しかし、なかには前出の個体番号 5 をはじ

め、3、7 のように、覆土 4 層出土土器片と覆土 2・3 層出土土器片が接合関係にある個体も認められる。

b. 遺物

本地点出土の遺物は、総破片数で 363 点（遺物座標点 277 箇所）、総重量 3,338.1g である。土器は 355 点（1,753.1g）、石器は剥片が 2 点（2.7g）、礫は 6 点（1,582.3g）検出された。

土器：土器のうち長胴甕は 168 点（47.3%）、坏は 64 点

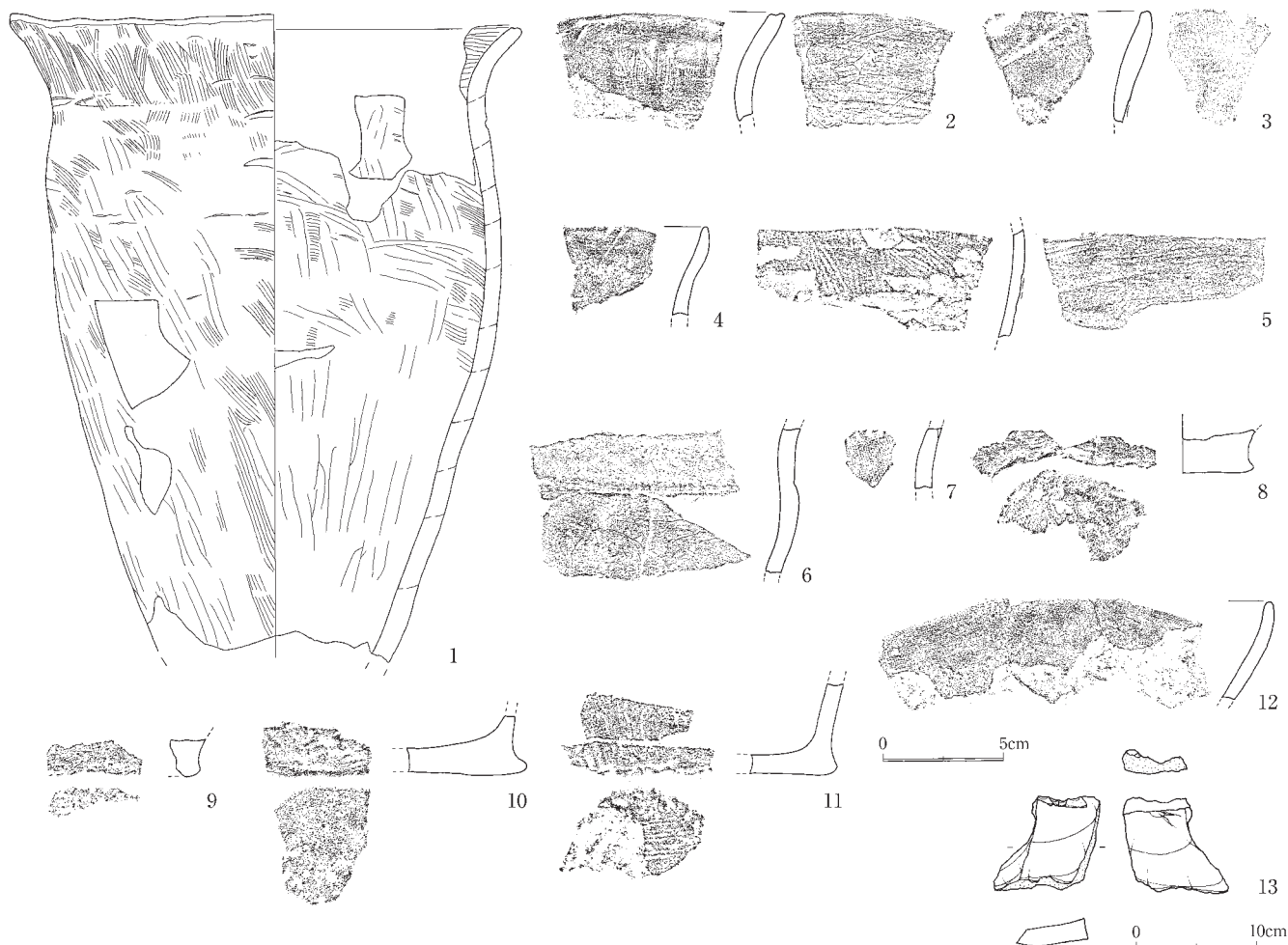


図18 本部裏地点出土土器実測図及び拓影図

(18.0%), 不明が123点(34.7%)である。長胴甕の口縁部破片は19点(重量206.1g), 胴部破片は134点(重量1,296.7g), 底部破片は15点(重量132.9g)である。坏の口縁部破片は19点(重量72.5g), 胴部破片は43点(重量37.1g), 底部破片は2点(重量7.8g)である。

本地点の出土遺物は、ほとんどが第1号竪穴住居址およびその周辺から検出されている。こうした空間的な出

土位置や先述したような層位的出土状況からみて、一括性の高い資料群と考えられる。

図18-1は長胴甕のほぼ完形品である。底部から頸部にかけて器面調整が完全ではないために、内外面ともに粘土帯の接合が部分的に観察できる。粘土帯の幅は約1.5～2cm, 接合面は内傾する。器形は、胴部上半でゆるやかに膨らみ、頸部から外反して口縁部にいたる。頸部

表8 本部裏地点出土土器観察表

挿図番号	個体番号	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	重量(g)	器面調整		口縁部断面形	底部形状	層位	遺物番号	写真番号
							外面	内面					
18-1	1	長胴甕		21.3		890.0	ハケメ(縦)→ミガキ	口縁部：ナデ(横), 頸部・胴部：ハケメ(横)→ミガキ	E 2		覆土3 覆土4	125,165 200,201,202,203, 206,207,208,210, 213,216,217,218, 219,222,223,224, 226,228,230,231, 233,234,235,236, 237,245,247,248, 249,250,251,252, 253,254,255,256, 257,259,263	3-1
18-2	1	長胴甕				33.9	ハケメ(縦)→ミガキ	ハケメ(横)→ミガキ	E 2		覆土4	229	3-2
18-3	6	長胴甕				18.2		ハケメ(横)→ミガキ	E 2		2	42	3-3
18-4	2	長胴甕				8.2		ミガキ	D		覆土2	18	3-4
18-5	4	長胴甕				21.2	ハケメ(縦)	ハケメ(横)			覆土2	17	3-5
18-6	5	長胴甕				50.1	ミガキ				覆土2 覆土4	31,33 271	3-6
18-7	10	長胴甕				4.6	ミガキ	ミガキ			覆土2	52	3-7
18-8	7	長胴甕				29.8	ヘラナデ				覆土3 覆土4	122 205	3-8
18-9	11	長胴甕				10.3	ハケメ(縦)				覆土4	273	3-9
18-10	9	長胴甕				34.6					覆土2	6	3-10
18-11	3	長胴甕				36.6	ハケメ(縦)			笠痕	覆土3 覆土4	154 260	3-11
18-12	13	坏				30.1	ミガキ	ミガキ, 黒色処理	O		覆土4	143,183,196	3-12

表9 本部裏地点出土石器観察表

挿図番号	遺物番号	層位	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	写真番号
18-13	16	覆土2	剥片	20	21.5	6	1.9	黒曜石	3-13
—	41	2	剥片	12	13	5	0.8	黒曜石	—

表10 本部裏地点出土礫観察表

遺物番号	層位	重量(g)	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	円磨度	石材	被熱	備考
5	覆土2	49.6	55	41	15	0.7	安山岩		
9	覆土2	69.6	45	42	32	0.6	安山岩		
48	2	54.5	48	42	24	0.7	安山岩		
49	2	37	38	34	23	0.8	安山岩		
51	覆土4	71.6	56	33	25	0.6	安山岩		
266	覆土4	1300	148	113	51	0.7	泥 岩		

に1条の沈線が認められるが、全周はしていない。器面調整は内外面ともにハケメの後にミガキが施されているが、それほど丁寧ではないため、ハケメ調整痕がかなりの部分で観察できる状態にある。2～4は長胴甕の口縁部破片である。口唇部は肥厚せず、その端部両肩は角張る(口唇部断面形態はD類もしくはE2類)。沈線も認められない。外面はハケメ(縦)の後にミガキ、内面はナデの後にミガキが施されている。5～7は長胴甕の胴部破片である。6は頸部の屈曲した部分に段が認められる。7には刻みが観察される。8～11は長胴甕の底部破片である。11の底面には笹葉状の圧痕が認められる。12は坏の口縁部破片である。体部から口縁部にかけてゆるやかな立ち上がりをみせる。内外面ともに最終的にミガキが施され、内面は黒色処理されている。

本部裏地点から検出された土器は、長胴甕に関しては、①口唇部は端部両肩が角張り、肥厚しないもので、②頸部から口縁部にかけて外反し、胴上半部でかるく膨らみ、③頸部と胴部の境界付近に1条程度の段が配されてい

る、④文様がほとんど施されていない、という諸特徴を認めることができる。坏に関しては、細かな破片が多く、また器面が一部剥落しているものも多いため、全体の器形、調整上の特徴について観察をおこなうことは難しかった。

石器：図18-13は剥片である。自然面は転礫面である。石質は漆黒で気泡を含んでいない。中講堂(学术交流会館)地点(吉崎・岡田編1987)から検出された石器群に利用されている黒曜石と、石質・自然面の状態などが類似している。自然面打面から剥離され、二次加工はまったく施されていない。

5. 小結

本地点の調査では、調査範囲は小規模ながらも、竪穴住居址1基と比較的多くの遺物群を検出することができた。竪穴住居址は、擦文期に通例的な形態である。竪穴住居址は完掘されておらず、調査区の西側に一部が遺存

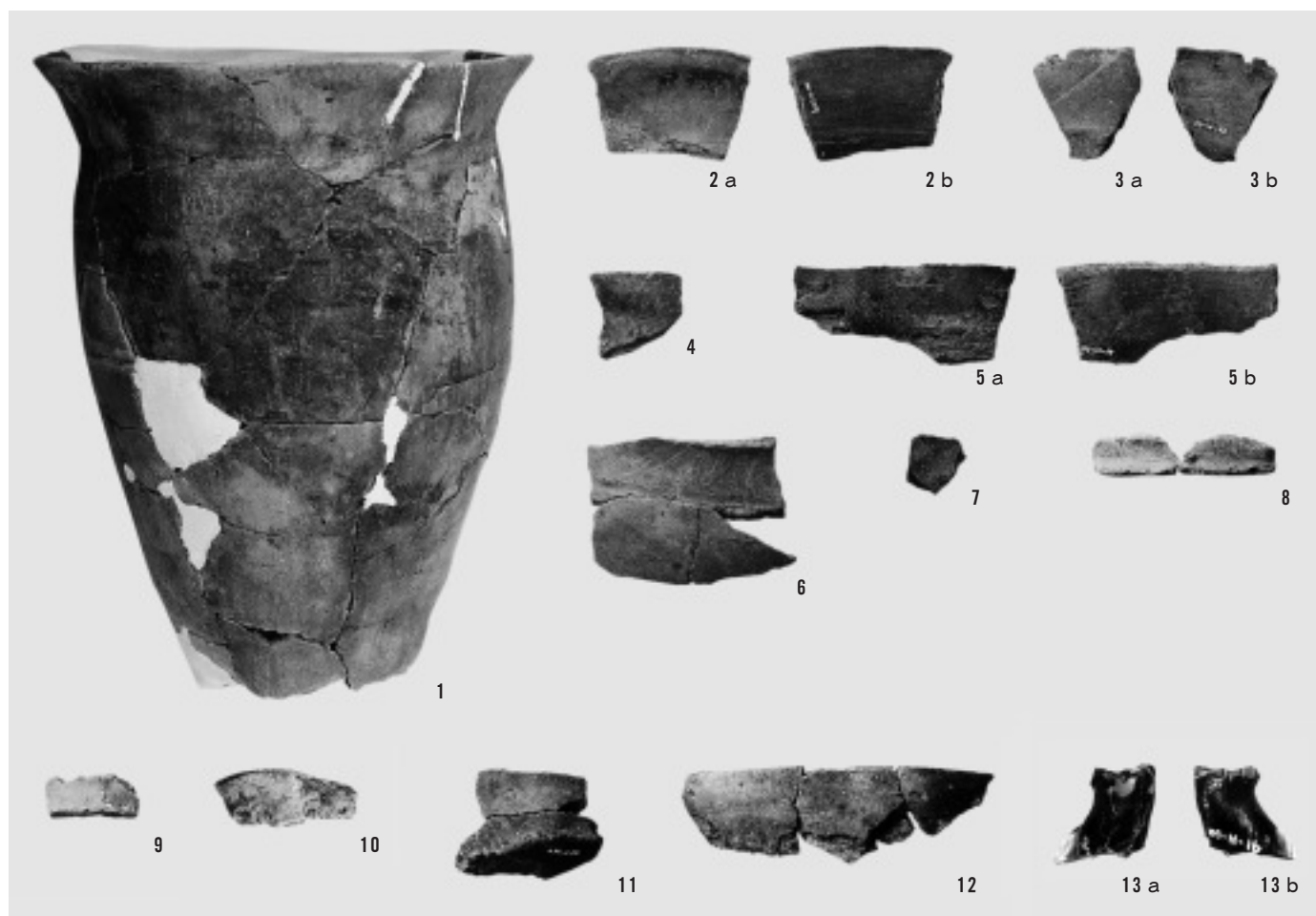


写真3 本部裏地点出土土器及び石器

している。

本地点から出土した遺物の多くは、竪穴住居址の床面直上および覆土から検出された一括性の高いものである。出土土器は、前述した諸特徴をふまえるならば、宇田川編年（宇田川 1980）による擦文前期に相当するものであり、北大構内のなかでこれまで検出されている擦文期の資料としては、もっとも古い時期に属する可能性がある。その年代は 8 世紀前葉から中葉と考えられる。



1. 第 1 号竪穴住居址（検出状況：南東より）



2. 第 1 号竪穴住居址（完掘：南東より）



3. 第 1 号竪穴住居址（セクション：北東より）



4. 第 1 号竪穴住居址（床面遺物出土状況：南より）



5. I 区調査状況（北より）

II-3 K 39 遺跡工学部J・I棟間地点

1. 調査地点の位置と周辺での過去の調査

本地点は、北海道大学構内の南西部、北緯 43 度 4 分 23 秒、東経 141 度 20 分 33 秒に位置する。遺構・遺物の包含層の標高はおおよそ 12.0～12.3 m である。遺跡(本地点)は、薬学部南側付近で流れを北西方向に変えたサクシュコトニ川中流部右岸に立地している。本地点から西側の量子界面エレクトロニクス研究センターの付近は、後述するように 2000 年度に実施した試掘調査の所見から、サクシュコトニ川本流が存在していたと考えられる。

本地点の周辺には、工学部核磁気共鳴装置研究棟地点

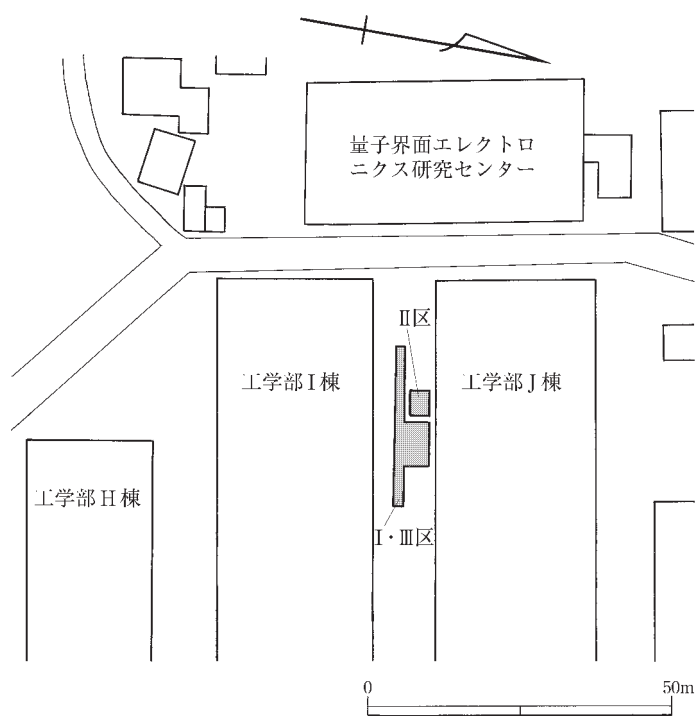


図19 工学部J・I棟間地点の位置

(吉崎・岡田編 1988) がある。擦文期の屋外炉址が 5 基とそれに伴う遺物群が確認されている。サクシュコトニ川の対岸側にはポプラ並木東地区地点(吉崎・岡田編 1987)が存在する。

2. 調査の概要

本調査は、北大工学部J・I棟間においてポンベ庫と液体燃料庫の設置、ならびに排水溝設備工事が計画されたのに伴い実施された。工事深度が約 1 m に達することから、擦文期の遺構・遺物包含層の存在の有無を確認することを主要な目的として、調査が計画された。

調査区は、ポンベ庫の区画をI区、その隣の液体燃料庫の区画をII区、排水溝設備の東西 25 m のトレンチをIII区と呼称した。調査過程でI区の南壁側で住居址が発見され、I区とIII区とを接続した調査区とした(I・III区)。調査は、重機によって客土を除去したのち、北大構内標準層序I層やII層に相当する自然堆積の土層が確認された段階で、人力で遺構・遺物の有無の確認をすすめていった。II区は、攪乱によって破壊されていたことが判明したが、I・III区からは、カマドをもった擦文期の竪穴住居址1基が検出され、あわせて多数の遺物を発見するこ

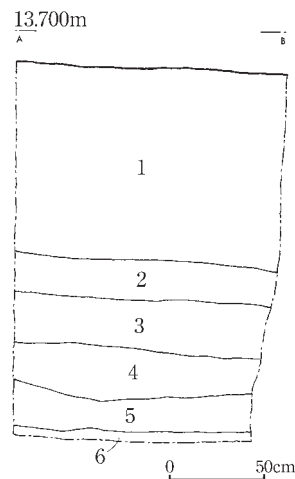


図20 工学部J・I棟間地点F I南壁セクション図

表 II 工学部J・I棟間地点基本層序観察表

層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
1						客土
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	やや弱	中	褐色砂がやや多量に混じる。
3	10YR6/1	褐灰色	シルト	中	中	
4	2.5Y4/2	暗灰色	シルト	弱	やや強	赤褐色砂が少量混じる。
5	2.5Y5/2	暗灰色	砂質シルト	やや弱	やや弱	赤褐色砂が少量混じる。
6	5Y6/2	灰オリーブ	粘土質シルト	強	強	

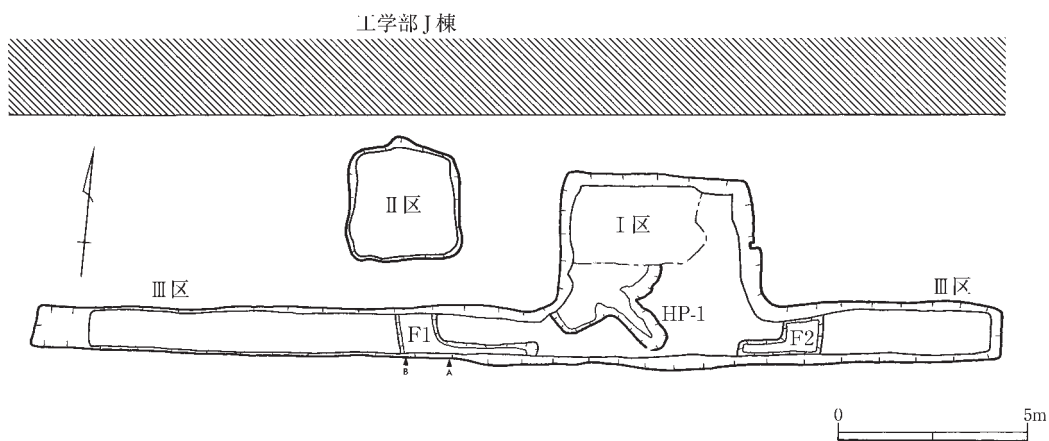


図21 工学部J・I棟間地点調査区



図22 工学部J・I棟間地点第I号竖穴住居址実測図

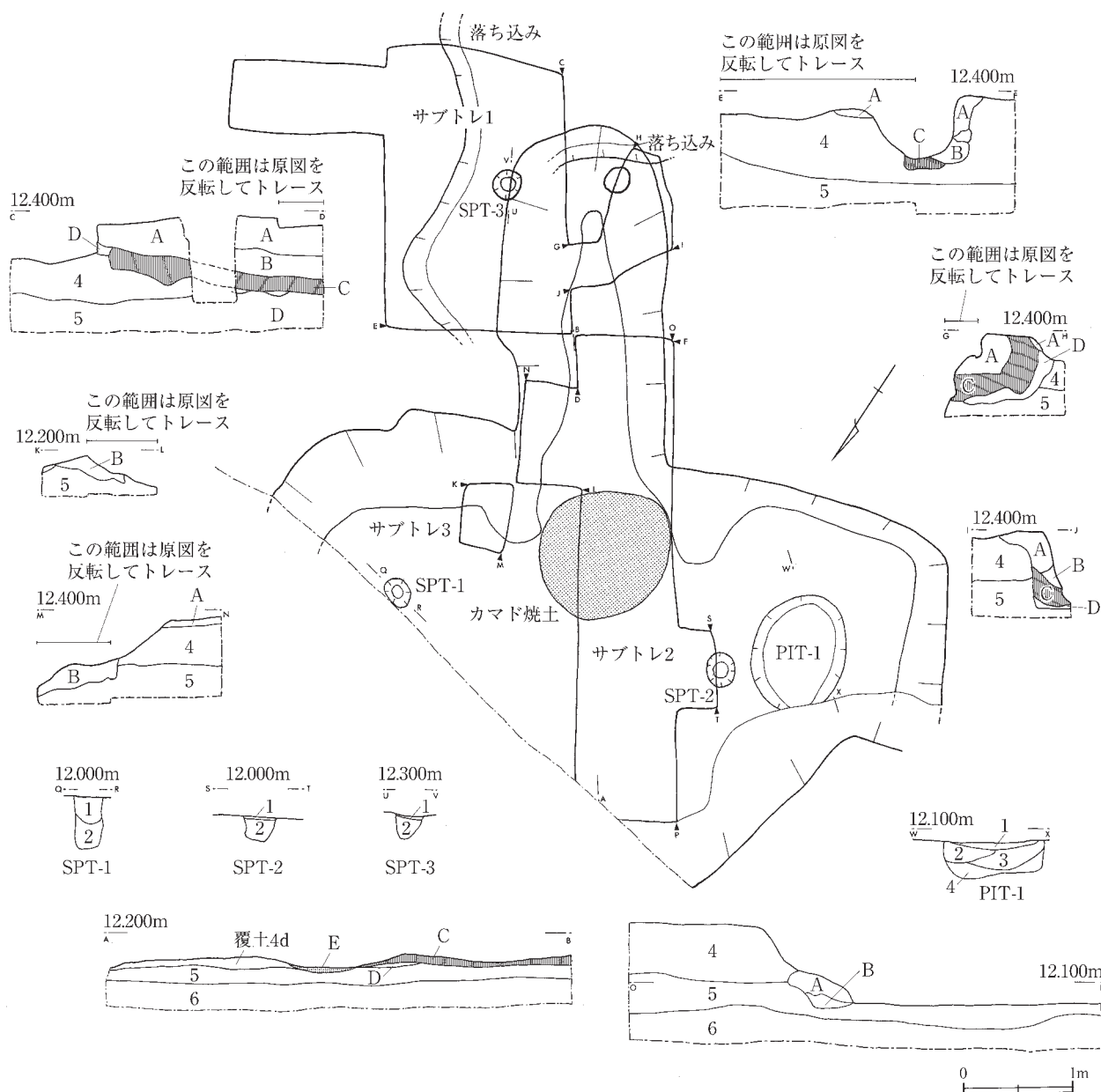


図23 工学部J・I棟間地点第I号竪穴住居址及び柱穴、土坑実測図

とができた。

3. 層序

本地点の基本層序は、F 1南壁で観察された土層堆積をもとに設定された(図20, 表11参照)。1層はコンクリート・ブロック、工事用玉石などが含まれる客土である。2層以下が自然堆積土層である。2, 4, 5層の土性はシルトもしくは粘土質シルトであるが、調査区内全域でそれらに砂が若干混じることが観察された。2層は、北大構内標準層序第I層に対比できる。3～6層は同第

II層に対比できるものと考えられる。検出された竪穴住居址の掘り込み面は、同第II層に対比される基本層序4層上面である。

4. 遺構と遺物

a. 遺構

本調査地点から検出された遺構は、竪穴住居址1基、住居址に付随する柱穴3本、土坑1基である(図23)。

第1号竪穴住居址は、先行してボンベ庫設置範囲(I区)の調査を実施した際に、その南壁において住居の床

表 12 工学部 J・I 棟間地点出土遺構覆土観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
HP-1	覆土 1	5R1.7/1	黒色	シルト	弱	弱	
	覆土 2	5Y2/1	暗褐色	シルト	弱	やや弱	
	覆土 3	10YR2/2	黒褐色	シルト	やや弱	中	基本層序 2 層に対応。
	覆土 4 a	2.5Y4/1	黄灰色	砂質シルト	中	中	炭化物が少量混じる。基本層序 3 層に対応。
	覆土 4 b	7.5YR4/1	褐灰色	砂質シルト	やや強	中	炭化物が多量に混じる。
	覆土 4 c	2.5Y6/2	灰黄色	粘土質シルト	強	強	
	覆土 4 d	10R3/3	暗赤褐色	シルト	中	やや強	床面形成土。炭化物がやや多量に混じる。
HP-1 カマド覆土	A	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	やや強	強	小礫が微量混じる。カマド煙道天井貼粘土層。
	B	10YR3/3	暗褐色	粘土	やや強	やや弱	カマド煙道天井貼粘土層。
	C	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	中	やや強	炭化物、焼土ブロックが多量に混じる。カマド煙道中及びその周辺の堆積物。
	D	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	やや弱	カマド煙道基底貼粘土層。
	E	10YR3/3	暗赤褐色	粘土質シルト	中	弱	焼土。
SPT-1	1	5Y5/2	灰オリーブ	粘土質シルト	やや強	やや強	炭化物が少量混じる。
	2	7.5YR5/4	褐色	シルト	中	やや強	
SPT-2	1	7.5YR3/4	暗褐色	砂質シルト	中	やや強	
	2	7.5YR5/4	褐色	シルト	中	やや強	炭化物が少量混じる。
SPT-3	1	7.5YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	中	やや弱	
	2	10YR3/3	暗褐色	シルト	やや弱	やや強	
PIT-1	1	10YR2/1	黒色	シルト	弱	やや強	
	2	7.5YR5/2	灰褐色	シルト	やや強	中	
	3	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂質シルト	やや弱	中	炭化物が微量混じる
	4	7.5YR4/2	灰褐色	砂質シルト	弱	やや弱	炭化物が微量混じる。

面ならびに壁面の立ち上がりが把握されたことから発見されたものである。試掘坑の北壁では、液状化現象による噴砂によって住居址の壁面の立ち上がりを確認することはできなかった。試掘坑内からも遺物は多数発見されており、出土平面・層位的な位置からみて、試掘坑北側隅から検出された遺物集中は、竪穴住居址覆土に包含されていたものと考えられる。

第 1 号竪穴住居址は、隅丸方形で、南東方向にカマドをもつ。住居址は、基本層序の 4 層上面から掘り込まれて構築されている。掘り込み面の標高は約 12.2 m、現存壁高は約 30 cm である。覆土は壁際に覆土 4 c 層、覆土 4 b 層が堆積したのち、覆土 4 a 層が住居址全域をおおっているように堆積している。覆土 4 d 層とした土層は、粗掘りした竪穴の底面に床面を形成するために埋め固めたと考えられる土層である。

カマドは、住居址の南東壁のほぼ中央に位置する。袖が確認でき、両袖間には燃焼部の焼土が認められた。焼土の広がり直径は約 1.2 m で、ほぼ円形を呈している。焼土の北端から礫（遺物番号 393）が 1 個焼土面上で検出されている。煙道の長さは約 3.5 m、幅は約 1.3 m である。カマド覆土 A・B 層は、煙道天井部となっていた貼粘土層と考えられる。同 C 層は煙道中及びその周辺の堆積物と考えられ、炭化物や焼土ブロックを多量に含んで

いる。この C 層の堆積状況から考えて、煙道主軸からやや西側にずれた位置に煙道出口があったことがわかる。

遺物は、ほとんどが基本層序 2・3 層と竪穴住居址覆土 2 層から検出された。覆土 4 b・4 c・4 d 層中からの検出は少ない。カマド煙道及びその周辺に認められる遺物の集中は、カマド煙道覆土の上部に堆積している基本層序 2・3 層から検出されている。住居址内に関しては、住居址南西隅、南東隅にそれぞれ遺物の集中を認めることができる。また、前述したように、試掘坑北隅からも遺物の集中が確認された。遺物の接合関係は、ほとんどが個別の遺物集中の範囲内にとどまっているが、個体番号 4 はカマド煙道及びその周辺、ならびに試掘坑北隅の遺物集中から検出された遺物どうしが接合している。

カマド燃焼部から約 13 l、住居址床面から計 215.7 l の土壌サンプルを採取、微細物の水洗選別をおこなった。

柱穴は住居址内から 2 本（SPT-1、SPT-2）、カマド煙道の貼粘土の下から 1 本（SPT-3）検出された。確認面からの深さは 11～23 cm ある。SPT-1 と SPT-2 は住居址の床面を検出した段階で確認された。SPT-3 は、カマド覆土 A・B 層（煙道天井貼粘土層）を除去した段階で確認されたため、このカマドが機能していた段階ですでに埋積していたものと考えられる。

住居址内から検出された土坑 1 基（PIT-1）は、円形を

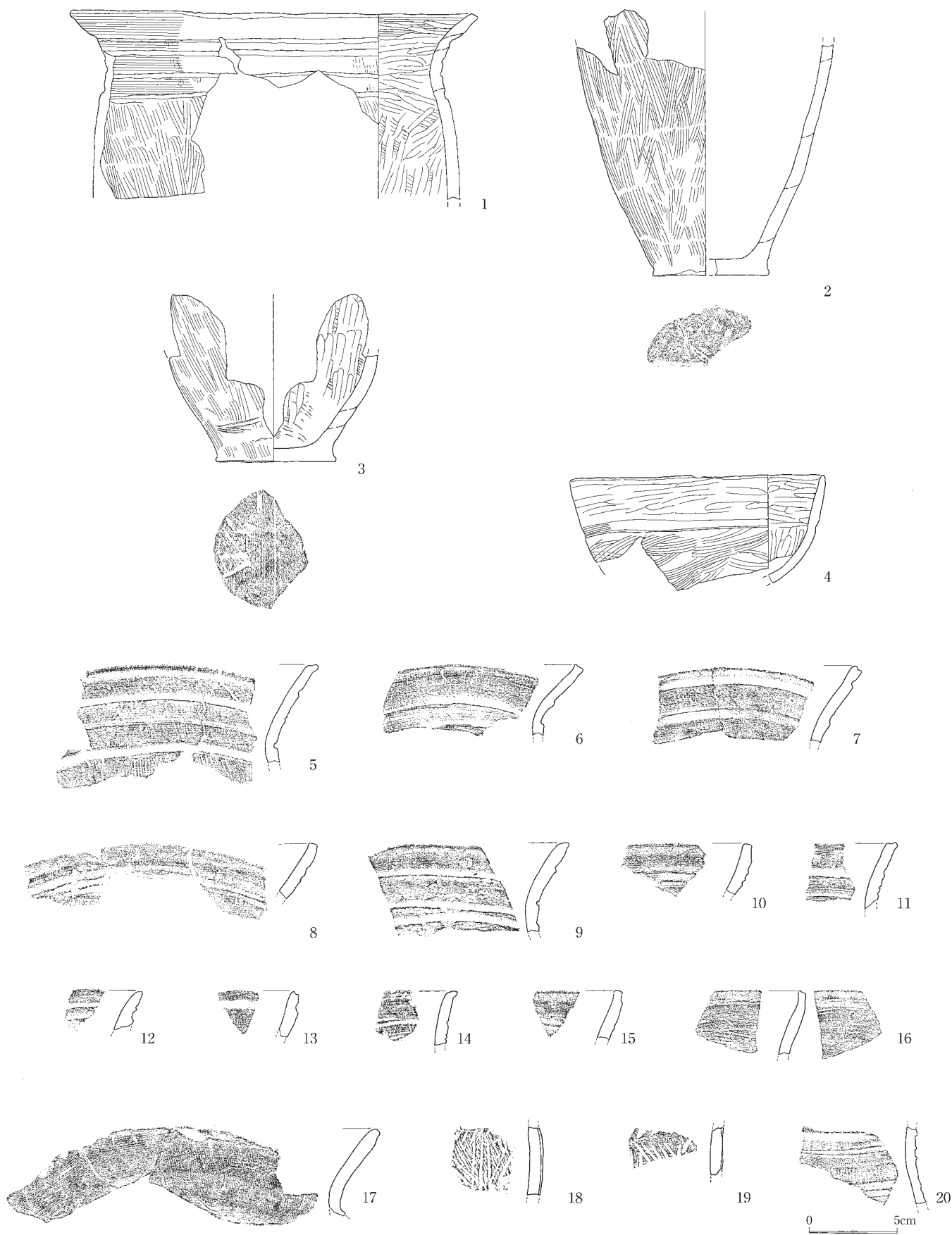


図24 工学部 J・I 棟間地点出土土器実測図及び拓影図(1)

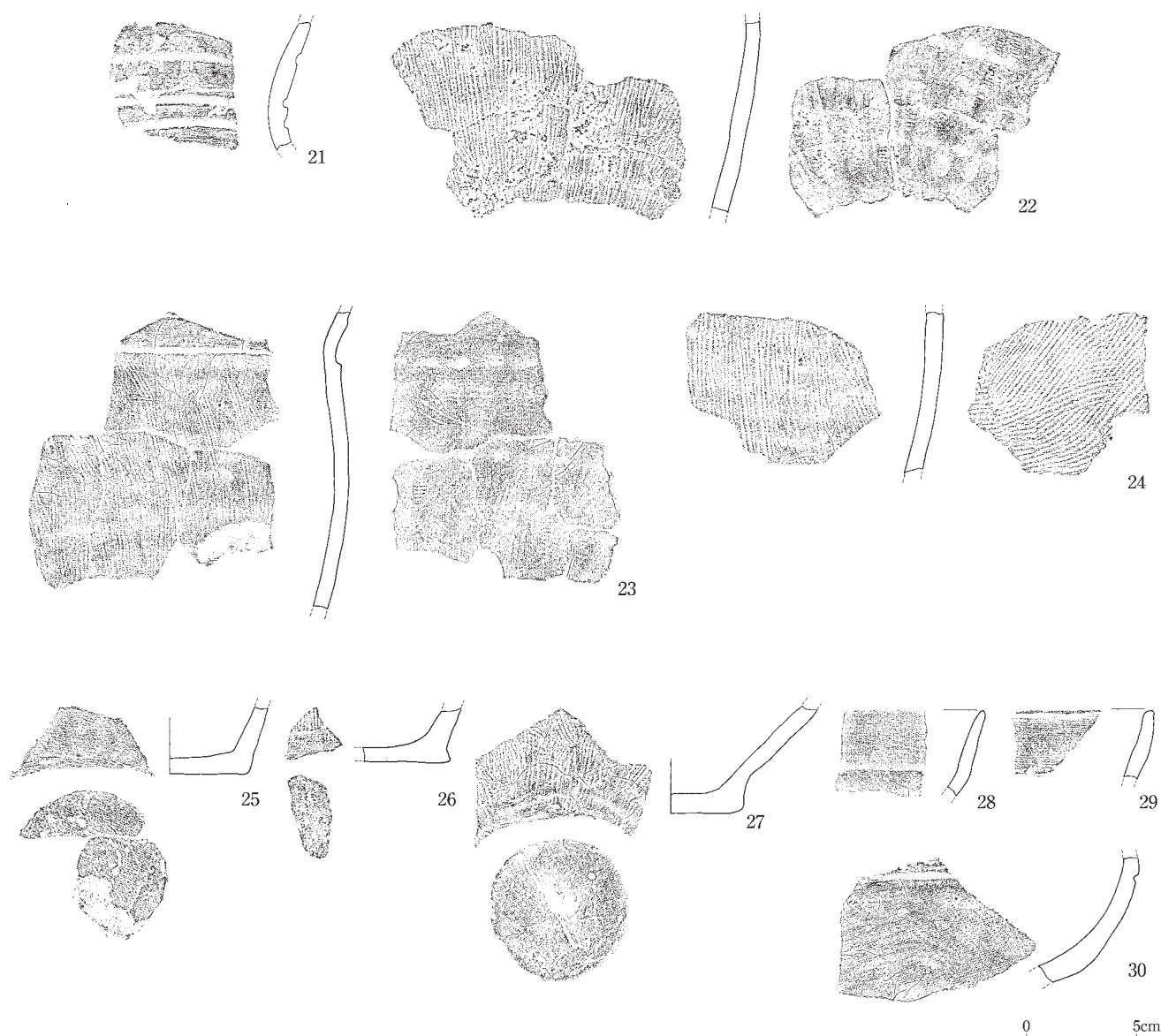


図25 工学部J・I棟間地点出土土器実測図及び拓影図(2)

呈するもので、深さは約20 cmある。床面が検出される以前の段階で覆土中の落ち込みとして確認された。床面を形成する土層（覆土4 d層）に覆われることなく掘り込まれた土坑であるが、竪穴全体が埋没し始める段階には空洞化していた可能性が考えられる。

b. 遺物

本地点出土の遺物は、総破片数で481点（遺物座標点458箇所）、総重量6,579.3 gである。土器片452点（2,131.7 g）、礫29点（4,447.6 g）が検出された。土器片のうち長胴甕は429点（94.9%）、球胴甕は3点（0.7%）、坏は20点（4.4%）である。長胴甕の口縁部破片は19点（重量187.2 g）、胴部破片は405点（重量

1,490.7 g）、底部破片は5点（重量124.9 g）である。球胴甕はいずれも口縁部破片3点（104.2 g）のみである。坏の口縁部破片は15点（重量89.5 g）、体部破片は14点（重量135.2 g）である。図24～25に実測図及び拓影図を図示した。

17は球胴甕、4、28～30は坏であり、それ以外は長胴甕に属する。これらの土器は、先述のように、住居址の覆土と住居址周辺とから発見されたものである。

長胴甕に関しては、底部破片（27）では、底部円盤から粘土紐をつけて巻き上げ、外面側に別の粘土を張り付け補強していく、という成形上の特徴が観察できる。粘土帯どうしの接合は、水平もしくはやや内側に傾いてい

表13 工学部 J・I 棟間地点出土土器観察表

挿図 番号	個体 番号	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	器 面 調 整		口縁部 断面形	底部 形状	層位	遺物番号	写真 番号
							外面	内面					
24-1	2	長胴甕		22.6		135.5	口縁部・頸部：ナ デ(横)，胴部：ハ ケメ(縦)	口 縁 部：ナ デ (横)，頸部・胴部： ハケメ(横)→ミガ キ	E 2		2	87.88.89.90.91. 92.93.94.105. 123.124	5-1
											3	203	
24-2	4	長胴甕			6.7	152.1	ハケメ(縦)			笹葉痕	2	57.68.78.79.81. 82.126.180.185. 187.188.347.411	5-2
24-3	5	長胴甕			6.8	105.3	ハケメ(縦)	ハケメ(横)→ミガ キ		ヘラナ デ，笹 葉痕	2	341.357	5-3
											3	392	
24-4	1	坏		14.6		63.1	口縁部：ミガキ， 体部：ハケメ(横)	ミガキ，黒色処理	O		3	234.235.249.389	5-4
24-5	21	長胴甕				2.7	口縁部・頸部：ハケ メ(縦)→ナデ(横)	ハケメ(横)	F		2	187.189.225.227	5-5
24-6	24	長胴甕				23.7	ハケメ(縦)→ナデ (横)	ミガキ	E 2		2	402	5-6
24-7	18	長胴甕				30.5	ハケメ(縦)→ナデ (横)	口 縁 部：ナ デ (横)，頸部：ミガ キ	A		PIT-1 覆土	436.451	5-7
24-8	8	長胴甕				24.6	ナデ(横)	ナデ(横)	E 2		3	133.134.199	5-8
24-9	6	長胴甕				36.3	ナデ(横)	ミガキ？	F		3	198	5-9
24-10	23	長胴甕				11.0	ハケメ(縦)→ナデ (横)	ナデ(横)	F		2	115	5-10
24-11	14	長胴甕				7.6	ハケメ(縦)→ナデ (横)	ナデ(横)	F		2	40	5-11
24-12	22	長胴甕				3.4	ナデ(横)	ナデ(横)	B		3	400	5-12
24-13	30	長胴甕				3.5	ナデ(横)	ナデ(横)	F		覆土 4 b	444	5-13
24-14	10	長胴甕				5.7	ナデ(横)	ナデ(横)	F		2	42	5-14
24-15	29	長胴甕				5.1	ハケメ(縦)→ナデ (横)	ナデ(横)	G		2	118	5-15
24-16	25	長胴甕				11.0	ナデ(横)	口 縁 部：ナ デ (横)，頸部：ミガ キ	G		3	386	5-16
24-17	7	球胴甕				104.2	ナデ(横)→ミガ キ		A		PIT-1 覆土	435.436.437	5-17
24-18	16	長胴甕				12.2		ミガキ			覆土 2	314	5-18
24-19	38	長胴甕				6.6		ミガキ			覆土 2	311	5-19
24-20	35	長胴甕				18.0	ハケメ(縦)→ナデ (横)	ハケメ(横)→ミガ キ			2	116	5-20
25-21	12	長胴甕				17.1	ナデ(横)				2	138	5-21
25-22	31	長胴甕				90.0	ハケメ(縦)	ハケメ(横)→ミガ キ			覆土 4 a	395.432	5-22
25-23	11	長胴甕				107.7	頸部：ハケメ(縦) →ナデ(横)，胴 部：ハケメ(縦)	ハケメ(横)→ミガ キ			2	83.217.332	5-23
											3	232.233	
25-24	27	長胴甕				53.3	ハケメ(縦)	ハケメ(横)			2	12	5-24
25-25	13	長胴甕				49.4	ハケメ(横)	ヘラナデ			2	24.401	6-25
25-26	19	長胴甕				11.8	ハケメ(縦)				3	380	6-26
25-27	20	長胴甕				46.8	ハケメ(縦)	胴部：ミガキ			2	99.404	6-27
25-28	17	坏				12.3	ミガキ	ミガキ，黒色処理			3	280	6-28
25-29	3	坏				9.3	ミガキ，口縁部： 黒色処理	ミガキ，黒色処理			2	30	6-29
25-30	9	坏				55.1	ミガキ	ミガキ			2	2	6-30

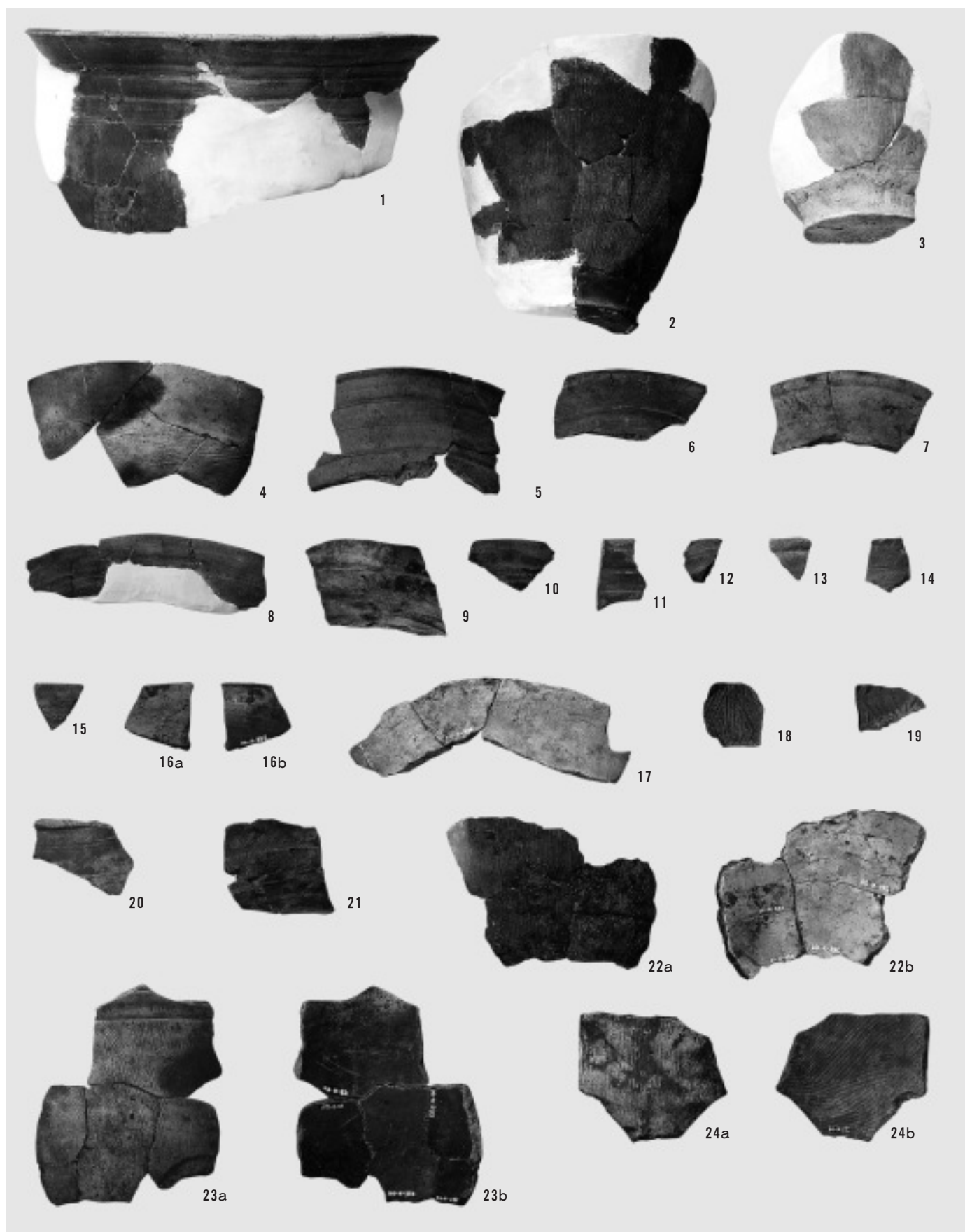


写真5 工学部J・I棟間地点出土土器(I)

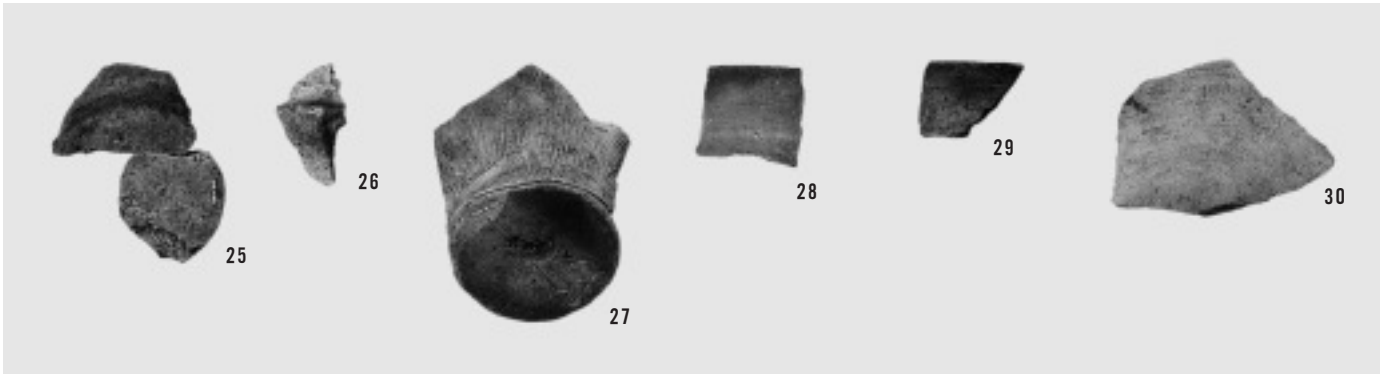


写真 6 工学部 J・I 棟間地点出土土器(2)

表 14 工学部 J・I 棟間地点出土礫観察表

遺物番号	重量 (g)	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	円磨度	石材	被熱
4	690	119	92	62	0.7	安山岩	被熱
18	376.8	90	79	40	0.7	安山岩	被熱
102	102	84	40	26	0.6	安山岩	
270	80	58	42	28	0.7	安山岩	被熱
271	72.2	70	45	33	0.7	安山岩	
273	61.6	65	34	26	0.7	泥 岩	
274	56.7	73	45	22	0.8	泥 岩	
285	(19.3)				0.6	チャート	
291	(11.9)				0.7	安山岩	
302	61	63	45	26	0.7	安山岩	
319	48.1	50	33	19	0.7	安山岩	
334	90.9	65	40	31	0.7	安山岩	被熱
350	(114.9)				0.7	安山岩	
351	(34.6)				0.7	安山岩	被熱
354	60.3	54	30	25	0.7	安山岩	
371	208.3	86	50	37	0.7	安山岩	
378	53.3	73	38	17	0.7	安山岩	
381	11.9	42	20	16	0.8	泥 岩	
388	850	163	80	77	0.8	安山岩	
393	740	115	90	60	0.8	安山岩	
394	8.5	32	18	18	0.7	泥 岩	
398	37.5	57	32	20	0.7	泥 岩	
428	18.7	36	29	24	0.7	泥 岩	
429	17.1	53	27	14	0.7	泥 岩	
434	51.8	48	39	22	0.7	安山岩	
439	140.6	105	36	29	0.8	泥 岩	
440	144.5	84	56	21	0.7	安山岩	
454	202.3	76	53	38	0.8	安山岩	
455	82.8	57	45	26	0.6	安山岩	

る。器面調整に関しては、外面は口縁部から頸部にかけてはハケメ（縦）ののちナデ（横）、胴部から底部にかけてはハケメ（縦）が施されている場合が顕著に多い。口縁部から頸部にかけてのハケメ（縦）は、ナデ（横）によってかなりの部分が消失しているが、部分的に観察できる状態にある。内面は、口縁部付近はナデ（横）が、頸部から胴部にかけては、ナデ（横）やハケメ（横）ののちヘラミガキが特徴的に施されている。器形は、底部から胴部にかけてやや直線的な立ち上がりを見せ、頸部の内湾はそれほど強くなく、かつ頸部は相対的に短く、そして頸部から口縁部までは直線的に外反するものが多い。口唇部は、E 2 類もしくは F 類という口唇両肩が角

張る形態で、口唇端面には凹線がみられ、口唇部の外面側には段がつけられているものが特徴的に認められる。頸部には数条の段をもつものが多い。

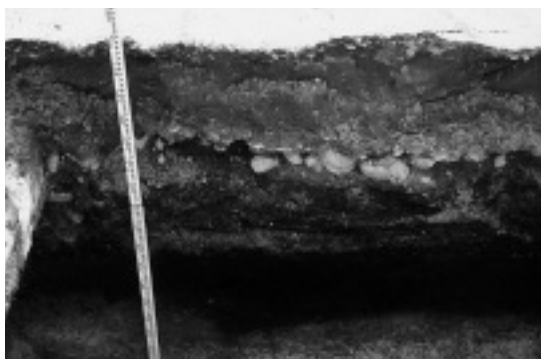
17 は、口径が胴部最大径よりも小さい球胴甕である。こうした諸特徴をもつ土器群とは、明らかに異なる特徴をもつものが、18 や 19 である。胴部に縦方向もしくは斜め方向の沈線を相互に重ねながら施文しているものである。内面はヘラミガキが施されている。

坏は、平底で、体部から口縁部にかけてはゆるやかに内湾しながら立ち上がる器形をなしている。体部には段が認められる。器面調整は内外面ともにミガキ、黒色処理が特徴的に認められる。30 は、やや厚手で体部中央に軽い段をもつ。色調、胎土が他の坏の個体とは異なっている。礫は、安山岩の転礫が主に検出された。

5. 小結

本地点では、小規模な面積の調査ながら、カマドをもつ竪穴住居址を検出することができた。住居址の掘り込み面は、北大構内標準層序第 II 層に対比される本地点基本層序の 4 層上面である。竪穴住居址内には 2 本の柱穴が認められ、南東壁の中央ではカマドが検出された。カマドは、袖が確認できるもので、両袖間には燃焼部と考えられる焼土が検出された。煙道出口は煙道主軸からやや西側にずれた位置から検出された。

本地点発掘の遺物は、竪穴住居址覆土やカマド貼粘土の上部に堆積していった土層中から多数検出された一方で、床面からは焼土面上の礫などを除きほとんど遺物が検出されていない。検出された土器群は、段をもつ長胴甕の器形や器面調整などの諸特徴が、サークル会館地点（吉崎・岡田編 1981）出土土器群との間に一定の共通性が認められる。編年的には、擦文前期に属するものと考えられる。



1. 第1号竪穴住居址(床面と壁面の立ち上り：北より)



2. 第1号竪穴住居址 カマド上面遺物出土状況(北東より)



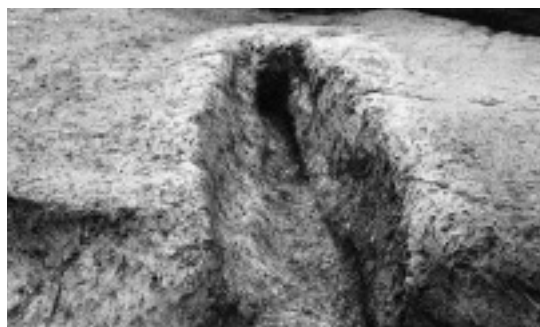
3. 第1号竪穴住居址(調査中：北より)



4. 第1号竪穴住居址 カマド(セクション：西より)



5. 第1号竪穴住居址 カマド(北西より)



6. 第1号竪穴住居址 カマド(北西より)



7. 第1号竪穴住居址 カマド煙道出口(右)及びSPT-3(北西より)



8. F-1 南壁(セクション：北から)

II-4 K 39 遺跡西門地点

1. 調査地点と周辺での過去の調査

本地点は、北海道大学構内の北西、第一農場の北端(図26参照)、北緯43度4分29秒～43度4分34秒、東経141度20分8秒～141度20分18秒に位置する。遺構・遺物包含層の標高は、約10.5～11mである。

本地点の周辺には、セロンベツ川右岸に立地するサークル会館地点(吉崎・岡田編1980)がある。サークル会館地点からは、擦文前期の竪穴住居址3基、炉址6基が検出されている。

2. 調査の概要

本調査は、大学構内への新たな出入り口として第一農場の北端に西門が設置されるのに伴い、西門から陸上競技場に面する既存道路までの進入道路、ならびにそれに伴う配管工事、街灯設置工事、ポプラ並木移植が計画されたことにより実施された。

調査は、まず進入道路が計画された範囲内に遺構・遺物が遺存していないかどうかの確認を目的とし、トレンチⅠを設定した。さらに、トレンチの西端より10m間隔でグリットを設定した(B1, B2…)。調査は重機によって耕作土を除去したのち、自然堆積の土層に関しては人力で掘削をすすめていった。

トレンチⅠでは調査の結果、東西両端の区域で遺構・遺物が確認されたため、東西両端で調査区を拡張した。セロンベツ川の左岸にあたる西側端の区域では、後述する本地点の基本層序4層から遺構・遺物が検出された。セロンベツ川の右岸にあたる東側端の区域では、基本層序13層から遺構・遺物が検出された。とくにこの区域ではB32～B33区(図27)から、竪穴住居址2基が遺存していることが確認された。両者共に良好な状態で遺存していたため、保存等の可能性も含め、工事計画全体の見直しが検討された。その結果、当初進入道路は、西門からほぼ東西方向に直進し、ホッケー場手前で既存道路に合流するものとして計画されていたが、B21～C21区付近から陸上競技場方向へ迂回し、既存道路に合流するように変更された。竪穴住居址が発見された東側の区域に関しては、工事深度が包含層にまでは到達しない遊歩道が設置されることになり、竪穴住居址は遺構確認の

みにとどめ、竪穴覆土の発掘はせずに埋め戻すことに決定された。

次に、進入道路に平行して敷設される排水管の設置工事範囲を対象としたトレンチⅡを、トレンチⅠの南側に設定した。同様に西端から10m間隔でグリットを設定した(D1, D2…)。さらにトレンチⅠとⅡの間に、街灯設置・ポプラ並木移植工事範囲を対象としたトレンチⅢを設定し、同じく西端から10m間隔でグリット(C1, C2…)を設け、調査をすすめた。トレンチⅡ・Ⅲからは、セロンベツ川左岸、調査区のほぼ中央付近において、基本層序6層からも遺構・遺物が検出された。

結果的に本調査においては、セロンベツ川両岸において計3枚の遺構・遺物包含層を確認することができた。

調査区内にはさらに何箇所か深掘り区(F1～F10)を設け(図27)、続縄文期の遺構・遺物の有無の確認をおこなった。結果的に、より下位の土層からは遺構・遺物を検出することはできなかった。

3. 地形と層序

本調査は、東西方向に長いトレンチを設定することで実施された。調査区内の地形の形成過程と堆積物の起源、それらと人間活動の痕跡がとどめられた「生活面」との



図26 西門地点の位置

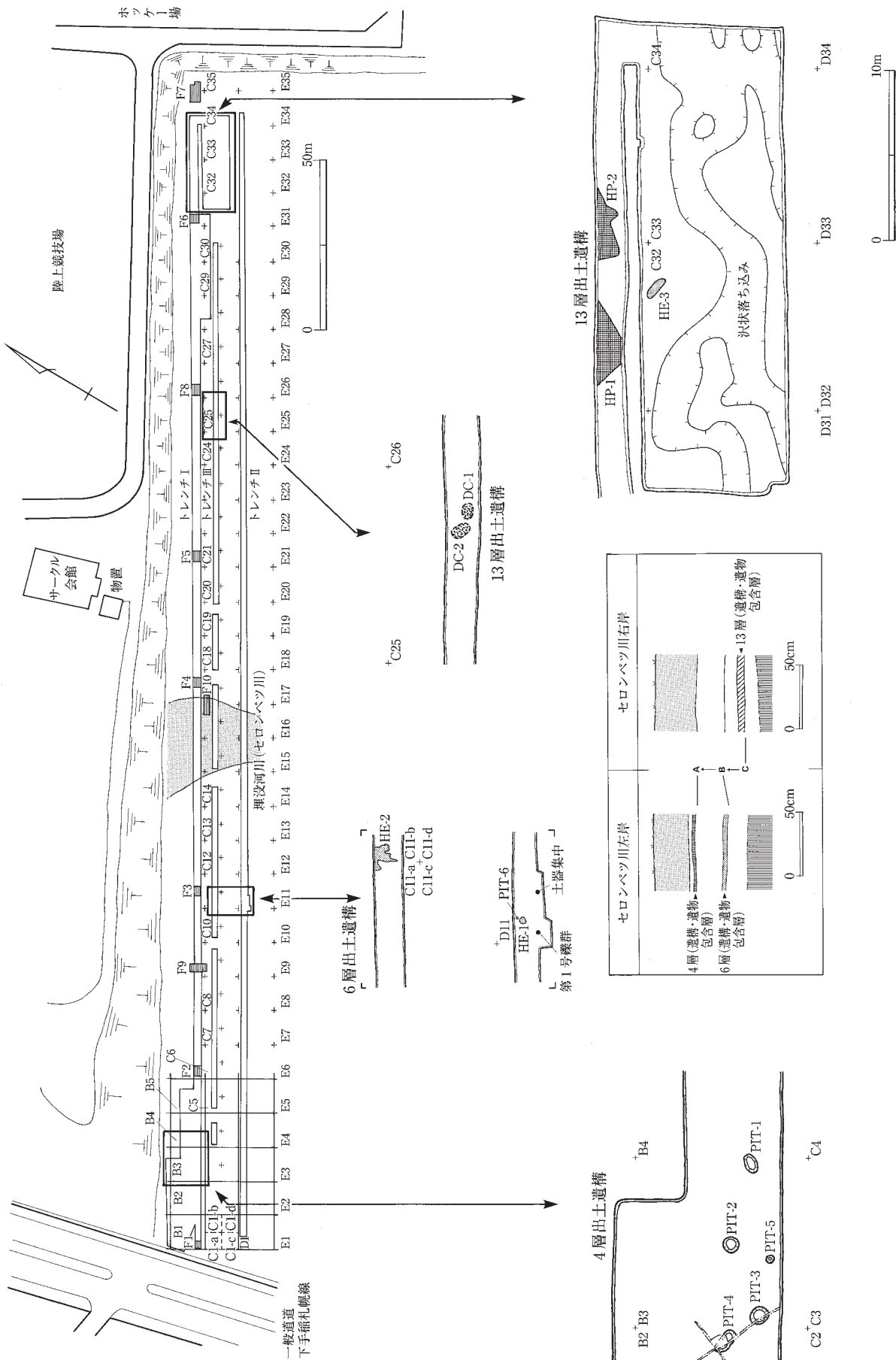


図27 西門地点の調査区と遺構の分布図

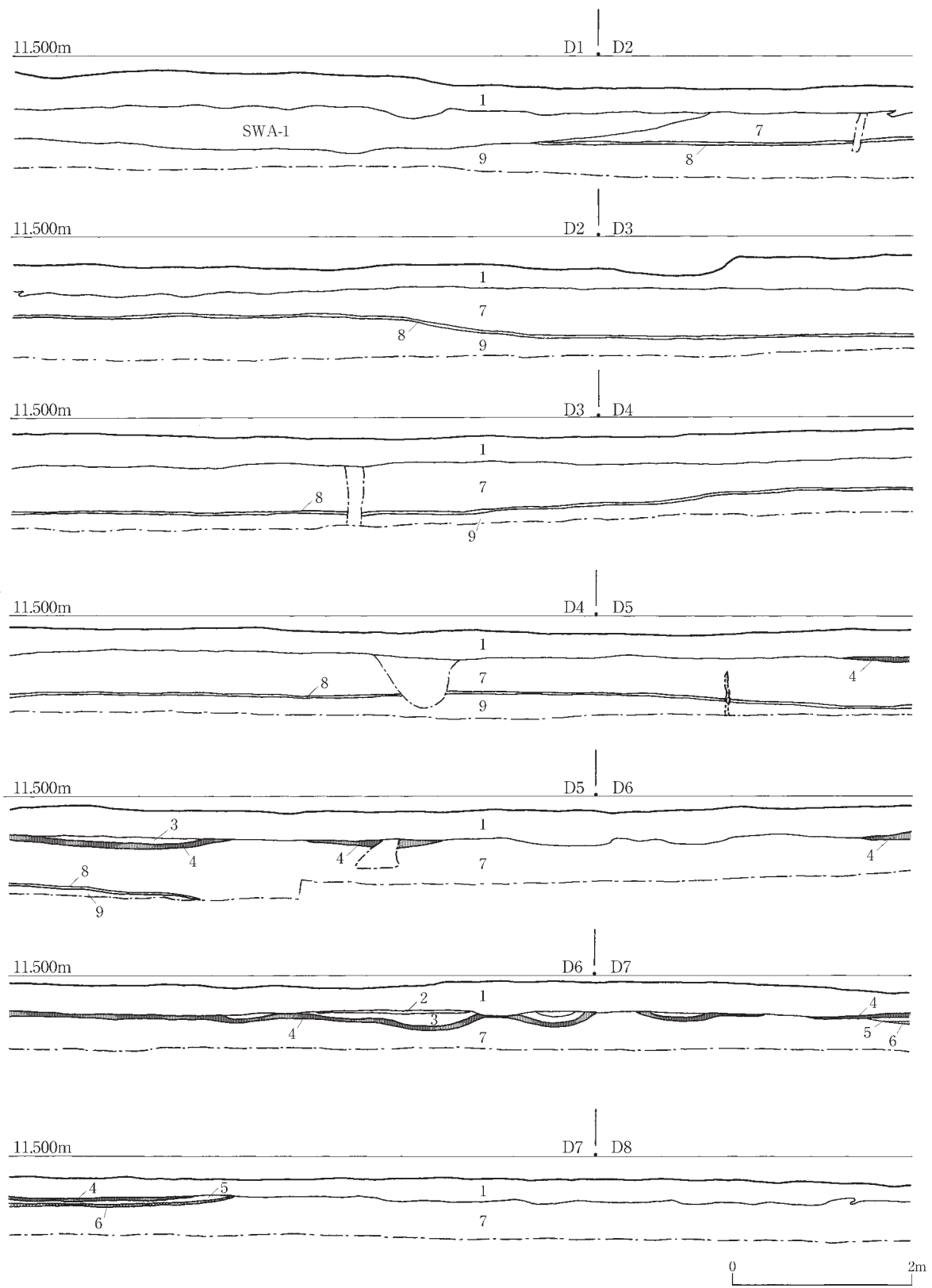


図28 西門地点トレンチⅡ北壁セクション図(I)

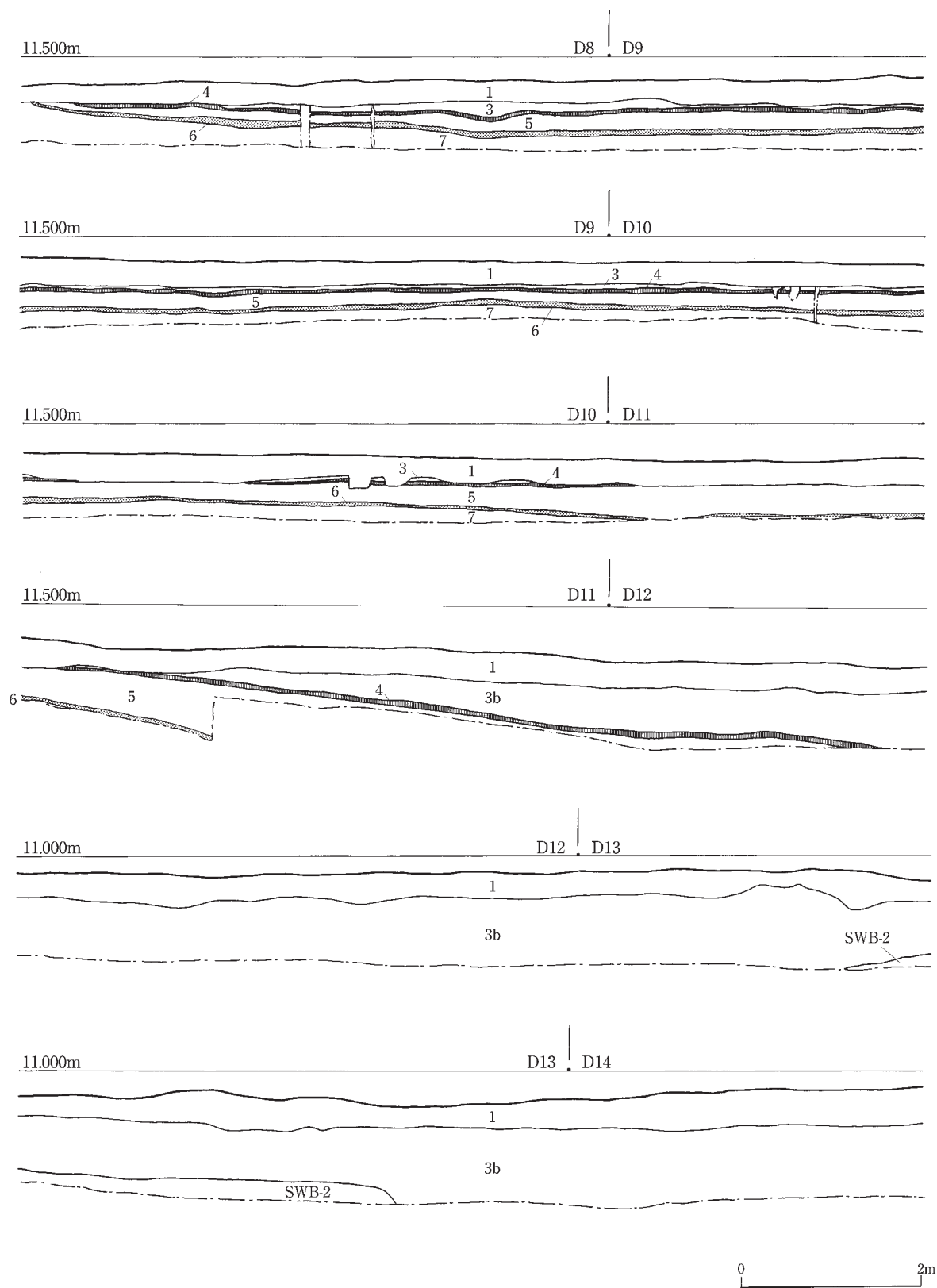


図29 西门地点トレンチII北壁セクション図(2)

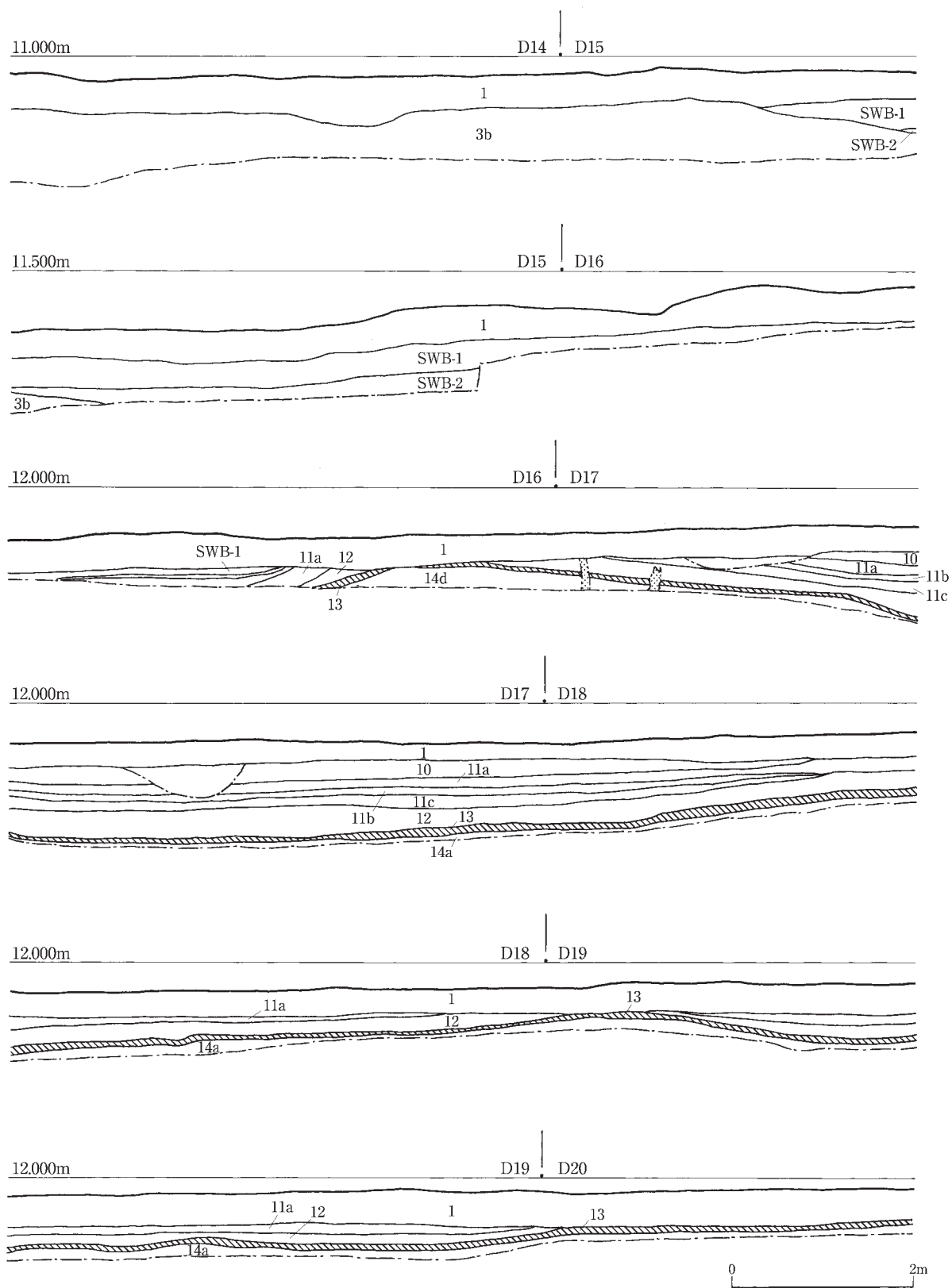


図30 西門地点トレンチⅡ北壁セクション図(3)

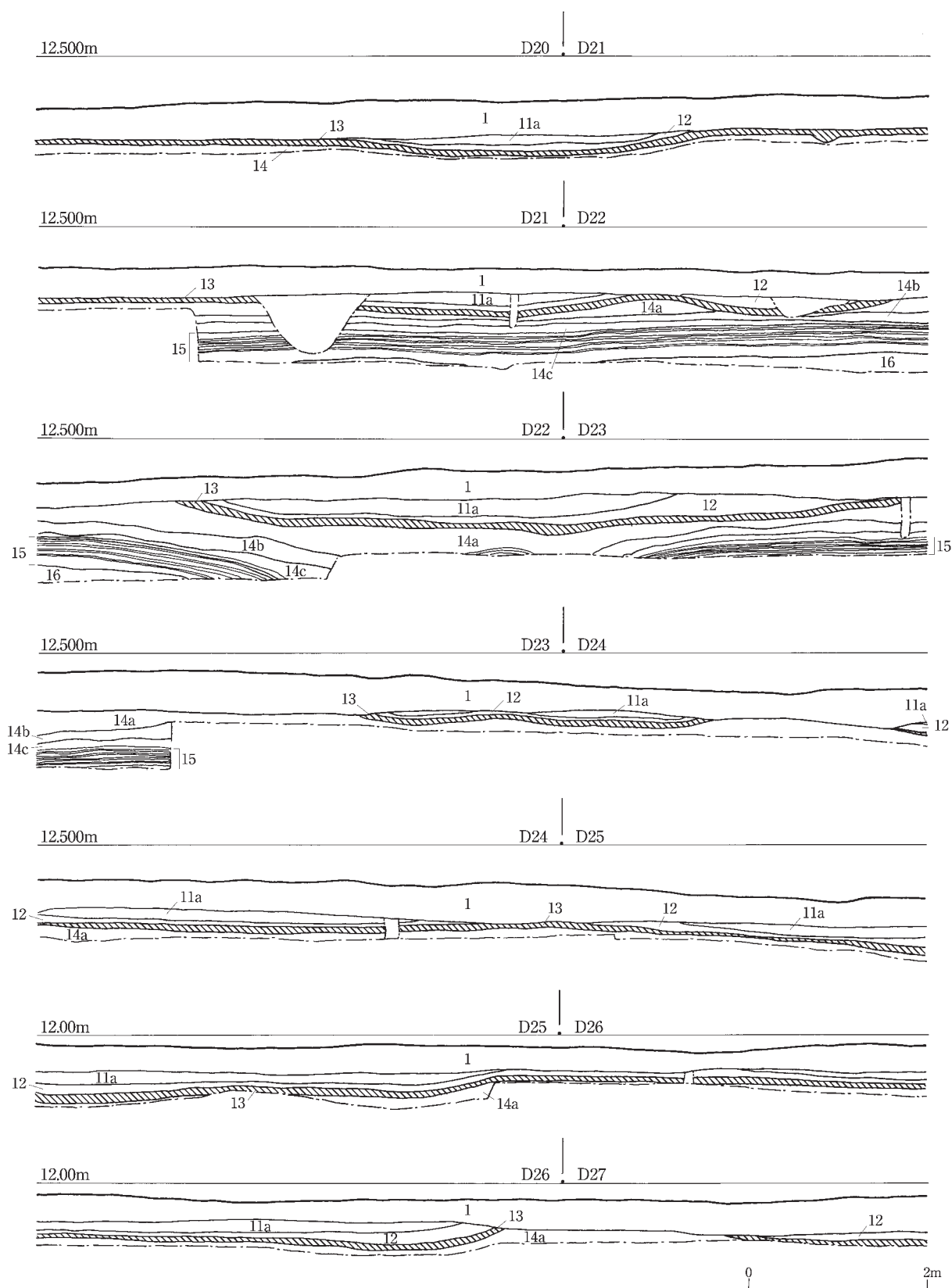


図31 西門地点トレンチⅡ北壁セクション図(4)

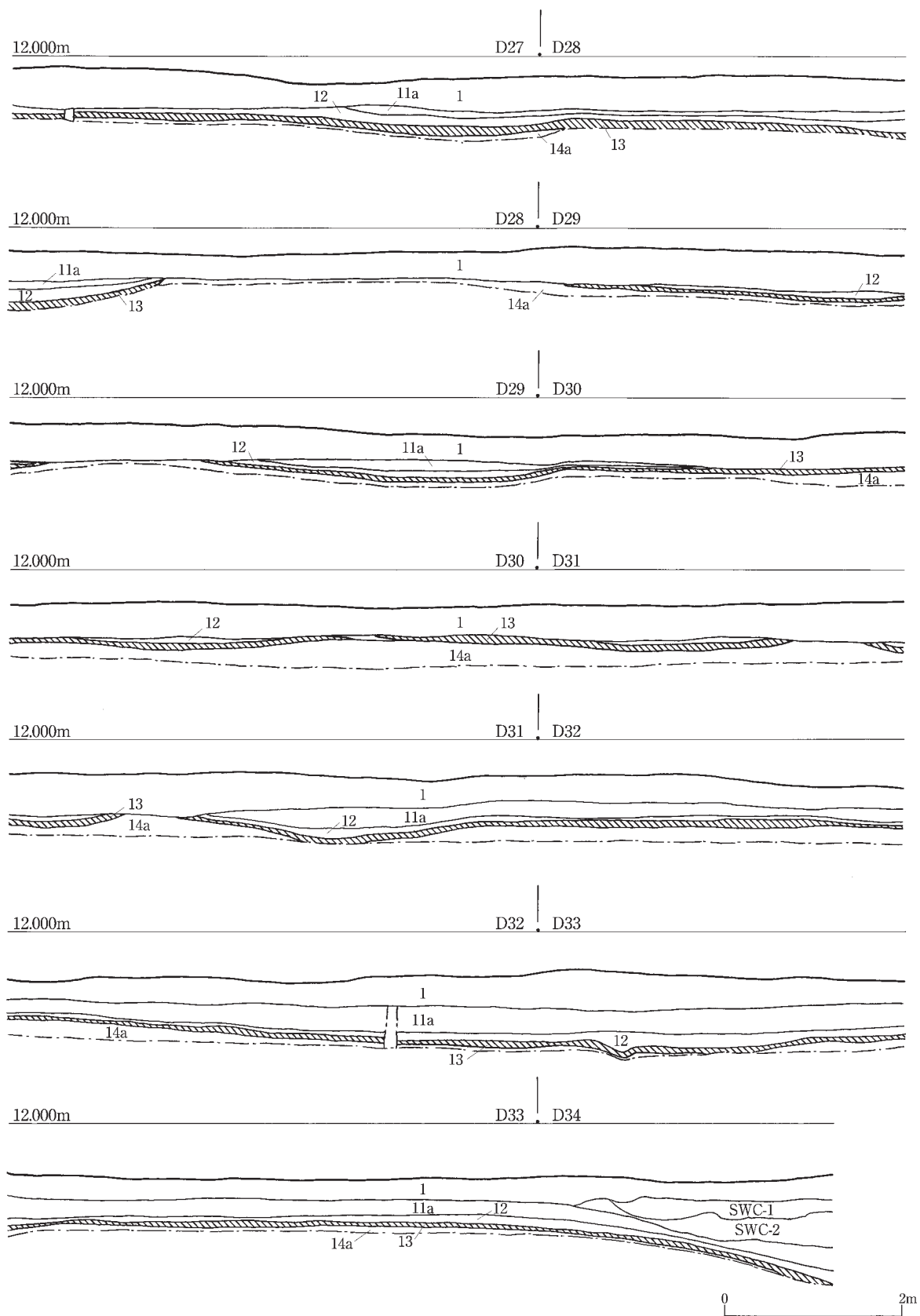


図32 西門地点トレンチⅡ北壁セクション図(5)

関係を把握できるように留意しつつ、土層区分とその記載をすすめていった。トレンチ内で観察された土層をもとに基本層序を設定した(図28～32, 表15)。深掘り区で観察された土層に関しては、基本層序と対応できるも

の以外は、層相が著しく異なるため、各深掘り区内で独自の層名をつけた(図33, 表16)。

調査区のほぼ中央付近では、埋没したセロンペツ川(SWB)が確認された(図29, 30)。遺構・遺物が確認さ

表15 西門地点基本層序土層観察表

層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
1						客土
2	10YR4/1	黒褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	Ta-a が入る。
3a	5Y7/2	灰白色	粘土質シルト	やや強	中	
3b	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルトと砂の互層	やや弱	中	未炭化の木が少量混じる。
4	N3/0	暗灰色	粘土質シルト	強	やや強	炭化物少量混じる。遺構・遺物包含層。
5	5Y6/2	灰オリーブ色	シルト	中	中	
6	N5/0	灰色	粘土質シルト	中	やや強	炭化物少量混じる。遺構・遺物包含層。
7	5Y6/2	灰オリーブ色	砂質シルト	やや弱	中	
8	7.5YR5/1	褐灰色	シルト	やや強	中	
9	7.5YR5/6	明褐色	砂	弱	やや弱	シルト混じる。
10	2.5Y6/2	灰黄色	シルト	中	やや強	
11a	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	強	やや強	炭化物少量混じる。
11b	2.5Y5/3	黄褐色	粘土質シルト	中	やや強	
11c	10YR4/2	灰黄色	粘土質シルト	中	強	炭化物少量混じる。
12	2.5Y6/2	灰黄色	シルト	やや弱	やや強	B-Tm 混じる。
13	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	中	強	炭化物少量混じる。遺構・遺物包含層。
14a	2.5Y6/2	灰黄色	砂質シルト	やや弱	中	
14b	2.5Y5/3	黄褐色	砂	弱	弱	
14c	2.5Y6/2	灰黄色	砂質シルト	やや弱	やや弱	
15	10YR4/2, 10YR3/1	灰白色と黒色の互層	粘土	強	強	木や草の泥炭混じる。
16	10YR5/1	褐灰色	粘土	強	やや強	
SWA-1		黄褐色	砂			暗灰色シルトが混じる。
SWB-1	2.5YR3/6	暗赤褐色	泥炭	弱	中	本層中部に灰色火山灰? 混じる。
SWB-2	5 YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	やや強	やや弱	泥炭混じる。未炭化の木が少量混じる。
SWC-1		灰色	粗砂			
SWC-2		黄褐色	砂			

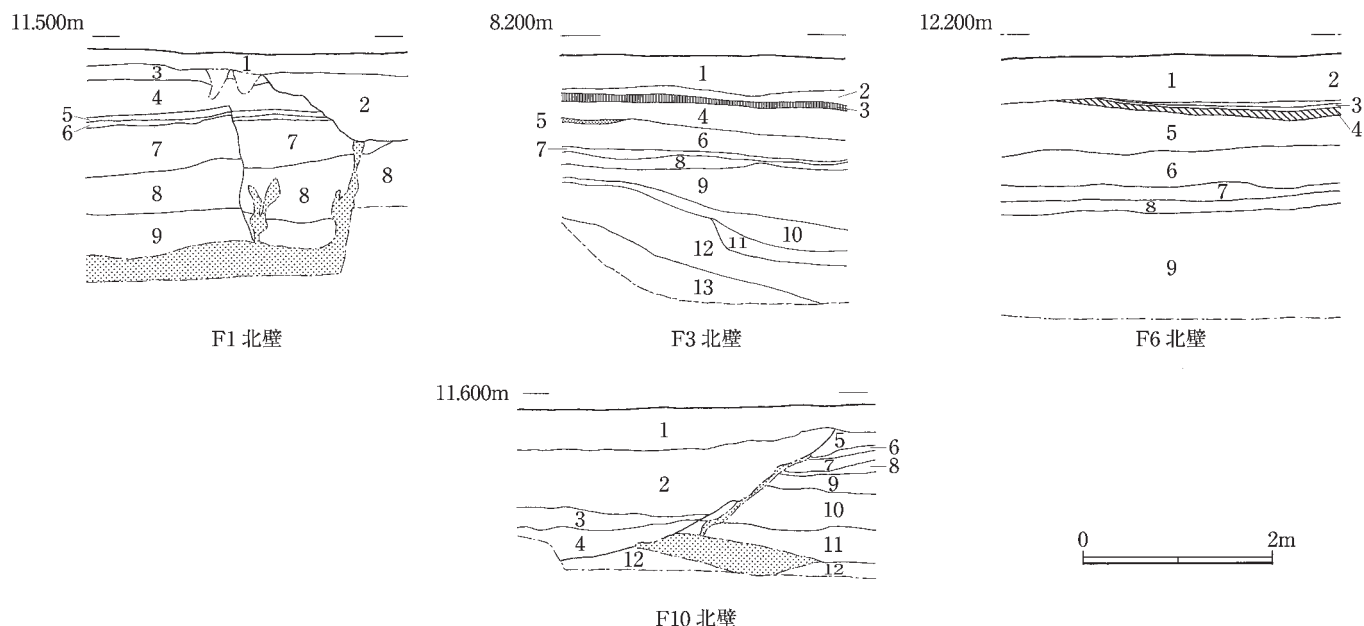


図33 西門地点深掘り区北壁セクション図

れた基本層序の4層と6層は、B・C 11～12区において層相をほとんど変えずに、セロンベツ川にむかって著しく傾斜しはじめている。これは、遺構・遺物が残された時期に、旧河道の位置が相対的に安定し、自然堤防上から一段低位の氾濫原にまで一様に4層や6層が堆積した可能性を示している。6層出土の遺構・遺物は、そうした低位の氾濫原に接した自然堤防上に分布している。

調査区内のほぼ中央付近にセロンベツ川の本流があることにより、調査区内の土層を連続的に観察することが

できず、また川の東西で層相が大きく異なっていたため、セロンベツ川を挟んだ東西での土層対比は著しく困難であった。そのため、川の東西にまたがって複数検出された遺構・遺物包含層の新旧関係を、層位から判断することはできなかった。

本調査区の東端、西端では、それぞれ埋没河川が存在を示唆する土層堆積を観察することができた（SWA, SWC）。トレンチⅡで観察されたSWCは、サクシュコトニ川本流である可能性がある（図32）。これとは別にC

表16 西門地点深掘り区土層観察表

深掘り区・壁面	層名	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
F 1・北壁	1					基本層序1層と同じ
	2					基本層序SWA-1層と同じ
	3	黒色	粘土	やや強	中	灰白色粘土が少量混じる。
	4	灰白色	シルト	やや弱	中	部分的に黒色シルトの薄層が入る。
	5	灰色	シルト	中	やや強	本層上部厚さ2mmの範囲に炭化物が多量に混じる。
	6	灰白色	シルト	中	中	
	7	灰白色	粘土	強	やや強	赤褐色砂の薄層がラミナ状に入る。
	8	赤褐色	砂	やや弱	やや弱	灰白色粘土の薄層がラミナ状に入る。
	9	赤褐色	砂	弱	弱	灰白色粘土の薄層がラミナ状に入る。
	10	暗黄褐色	粗砂	弱	弱	
F 3・北壁	1					基本層序1層と同じ
	2					基本層序3a層と同じ
	3					基本層序4層と同じ
	4					基本層序5層と同じ
	5					基本層序6層と同じ
	6					基本層序7層と同じ
	7					基本層序8層と同じ
	8					基本層序9層と同じ
	9	褐色	粗砂	弱	弱	灰色シルトの薄層がラミナ状に入る。
	10	褐色	砂	やや弱	やや弱	灰色シルトの薄層がラミナ状に入る。
	11	暗褐色	粗砂	弱	弱	灰色シルトの薄層がラミナ状に入る。
	12	褐色と灰色の互層	粗砂	弱	弱	
	13	褐色	砂	中	やや弱	灰色シルトの薄層がラミナ状に入る。
F 6・北壁	1					基本層序1層と同じ
	2					基本層序11a層と同じ
	3					基本層序12層と同じ
	4					基本層序13層と同じ
	5					基本層序14a層と同じ
	6					基本層序15層と同じ
	7					基本層序16層と同じ
	8	灰白色	シルト	やや強	中	
	9	青灰色	シルトと砂の互層	強	やや強	
F10・北壁	1					基本層序1層と同じ
	2					基本層序SWB-1層と同じ
	3					基本層序SWB-2層と同じ
	4	暗黄褐色	粗砂	弱	弱	
	5					基本層序11a層と同じ
	6					基本層序12層と同じ
	7					基本層序13層と同じ
	8					基本層序14層と同じ
	9					基本層序15層と同じ
	10					基本層序16層と同じ
	11	灰白色	シルト	中	中	
	12	暗灰白色	粘土	やや強	やや強	

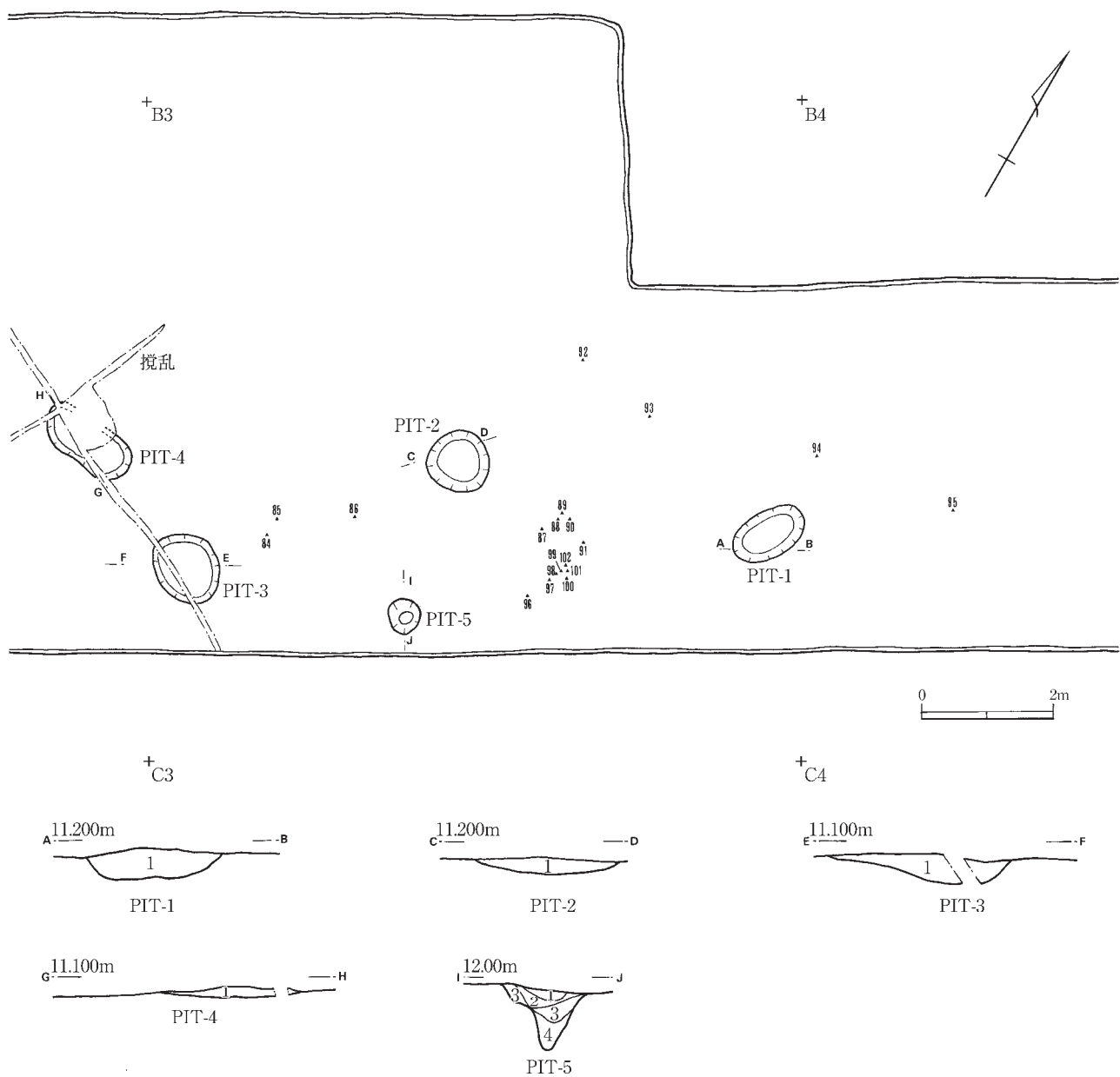


図34 西門地点 4 層出土土坑実測図

表17 西門地点 4 層出土土坑覆土観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
PIT-1	1		暗褐色	シルト	やや強	やや強	炭化物多量に混じる。
PIT-2	1		暗褐色	シルト	やや強	やや強	炭化物多量に混じる。
PIT-3	1		暗褐色	シルト	やや強	やや強	炭化物やや多量に混じる。
PIT-4	1		暗褐色	シルト	やや強	強	炭化物やや多量に混じる。
PIT-5	1	N1.5/0	黒色	砂質シルト	やや弱	中	炭化物やや多量に混じる。
	2	N3/0	暗灰色	シルト	中	中	炭化物やや多量に混じる、N2/0黒色シルトがブロック状に混じる。
	3	N4/0	灰色	シルト	中	やや弱	炭化物やや多量に混じる。
	4	N4/0	灰色	シルト	やや弱	中	炭化物やや多量に混じる、2.5Y7/3浅黄色シルトがブロック状に混じる。
	5	5Y5/1	灰色	シルト	やや弱	やや弱	炭化物多量に混じる、2.5Y7/3浅黄色シルトがブロック状に混じる。

31～C 34 区で、遺構・遺物包含層である 13 層を調査している過程で、13 層が落ち込み、そこに白色のシルト層が堆積している状況が観察された。落ち込みの平面形は樹枝状を呈しており、沢状の落ち込みであると考えられる。性格は不明な部分が多いが、短期的で小規模な流水

路があったことを示しているかもしれない。13 層から検出された竪穴住居址や炉址は、この沢状の落ち込みに面した微高地で検出された（図 27）。

遺構・遺物包含層は、基本層序の 4，6，13 層に相当する。いずれの遺構・遺物包含層も、炭化物混じりの粘土質の土層である。

表 18 西門地点 4 層出土礫観察表

遺物番号	地区	重量(g)	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	円磨度	石材	被熱
84	B 3	80.3	68	50	28	0.7	安山岩	
85	B 3	85.1	64	37	29	0.7	安山岩	
86	B 3	44.6	51	31	27	0.7	泥 岩	
87	B 3	101.3	62	37	30	0.7	安山岩	
88	B 3	111.5	56	45	33	0.7	安山岩	
89	B 3	120.9	62	42	35	0.7	安山岩	
90	B 3	31.5	46	36	22	0.7	泥 岩	
91	B 3	131.4	72	52	32	0.7	安山岩	
92	B 3	79	60	53	30	0.7	安山岩	
93	B 3	145.4	76	41	34	0.7	安山岩	
94	B 4	23.4	48	32	22	0.7	泥 岩	
95	B 4	15.2	27	25	20	0.7	安山岩	
96	B 3	141.2	64	42	35	0.7	安山岩	
97	B 3	112.7	75	40	29	0.7	安山岩	
98	B 3	125.6	65	47	28	0.7	安山岩	
99	B 3	86.8	58	41	24	0.7	安山岩	
100	B 3	116.2	61	40	36	0.7	安山岩	
101	B 3	90.4	63	45	24	0.7	安山岩	
102	B 3	101.6	59	43	31	0.7	安山岩	

4. 4 層検出の遺構と遺物

4 層からは、B 3 区を中心として、土坑 5 基とその周辺から礫が多数検出されている（図 34）。

a. 遺構

B 3 区と B 4 区の西側の区域から、土坑が 5 基検出された。掘り込み面は 4 層下面である。第 1～4 号土坑は、覆土はいずれも炭化物を多く含む暗灰褐色のシルトの単層である。人為的に埋め戻された状態ではない。平面は直径約 1 m 前後の円形ないしは楕円形で、深さは 10～20 cm の皿状を呈する。第 5 号土坑の平面は約 1 m の円形で、現段階で確認できる深さは約 35 cm である。覆土は灰色シルトと浅黄色砂質シルトが混ざった状態であり、人為的に埋め戻された可能性が高い。1～4 号と 5 号とは、土坑の形態、埋没過程が明らかに異なる。

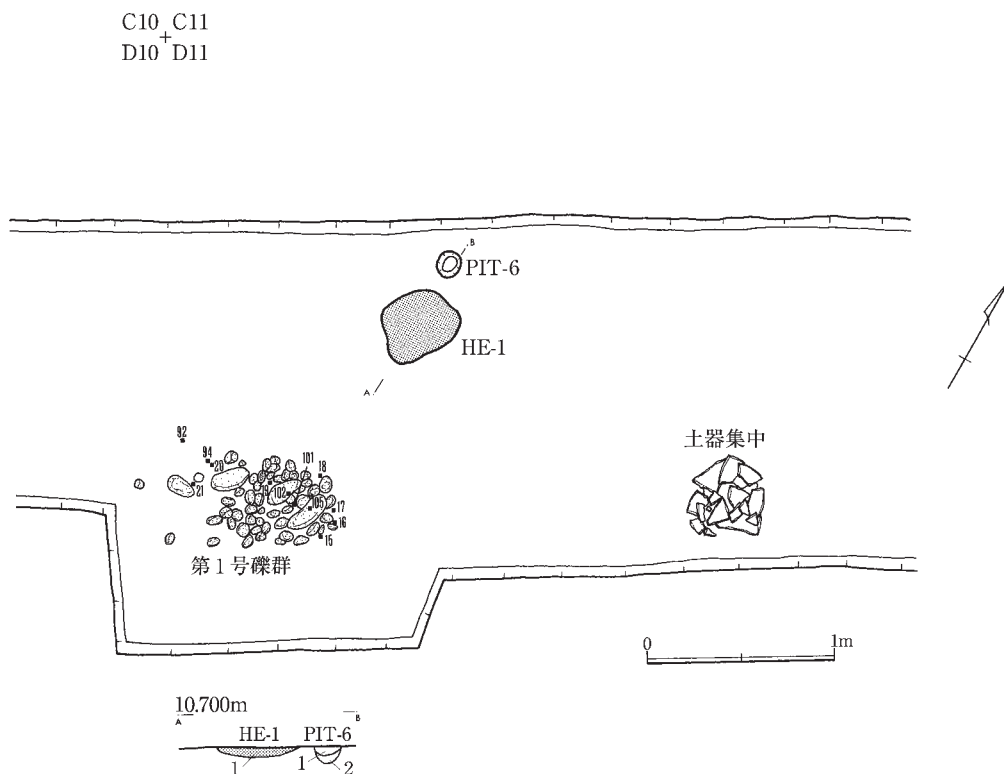


図35 西門地点 6 層出土屋外炉址（HE-I）及び第 1 号礫群実測図

遺構に伴う遺物は検出されなかった。PIT-4 の覆土約 3.5ℓ，PIT-5 の覆土約 20.5ℓ を回収し、微生物の水洗選別をおこなった。

b. 遺物

4 層出土の遺物は、19 点(遺物座標点 19 箇所、総重量

1,744.1 g)の礫である。いずれも 4 層下面から、第 1～5 号土坑の周辺に散漫に分布している状態で検出された。多くが安山岩の転礫である。いずれも被熱の痕跡は認められない。

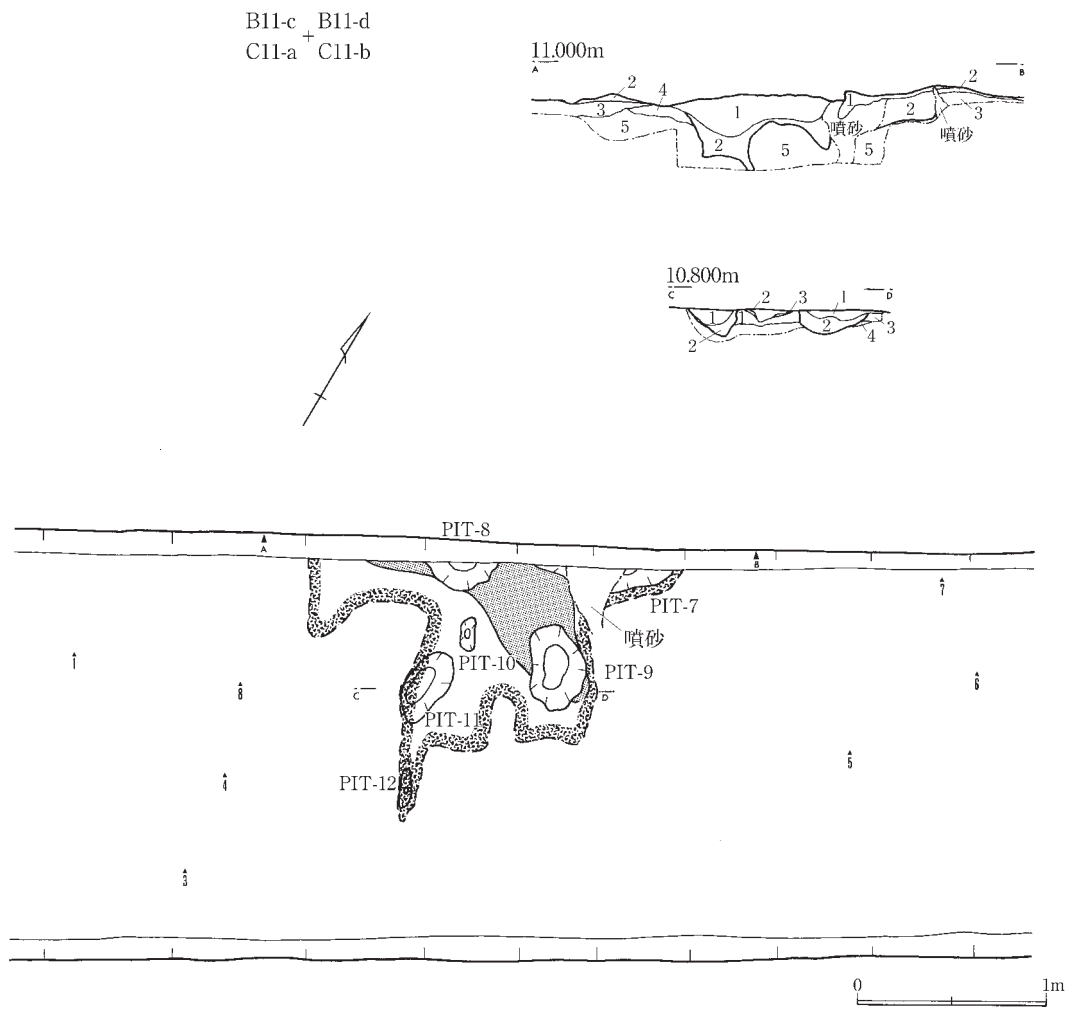


図36 西門地点 6 層出土屋外炉址 (HE-2) 実測図

表19 西門地点 6 層出土炉址土層・土坑覆土観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
HE-1	1		赤褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	炭化物多量に混じる。
HE-2	1	10YR4/1	褐灰色	シルト	強	強	炭化物やや多量に混じる。
	2	7.5YR3/3	暗褐色	シルト	強	強	炭化物、焼土ブロックが多量に混じる。基本層序 4 層に対応する。
	3	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや強	強	基本層序 5 層に対応する。
	4	2.5YR5/6	明赤褐色	シルト	やや強	やや強	焼土。
	5	2.5YR5/2	暗灰黄色	砂	弱	やや強	被熱により上位はやや赤化している。基本層序 7 層に対応する。
PIT-6	1		暗灰白色	砂質シルト	やや弱	やや強	炭化物少量混じる。
	2		灰白色	砂質シルト	弱	中	炭化物微量混じる。

5. 6層出土の遺構と遺物

6層からは、D 11 区で屋外炉址 1 基と礫群 1 箇所、土器集中 1 箇所が検出された。また C 11 区では屋外炉址 1 基が検出された。遺物は、ほぼ完形に復元された土器 1 個体と石器、礫である。

a. 遺構

6層中からは、D 11 区において屋外炉址が 1 基 (HE-1)、隣接して小規模な土坑が 1 基 (PIT-6)、礫群が 1 箇所検出された (図 35)。焼土は、約 0.5×0.4 m の規模でほぼ円形のひろがりを示す。焼土およびその周辺の炭化物混じりの土壌約 10 ℓ、PIT-6 の覆土約 7 ℓ を回収し、微細物の水洗選別をおこなった。周辺からは、黒曜石製の石器を伴う礫群が 1 箇所検出された。また、屋外炉址と礫群に近接して、ほぼ完形に復元できる 1 個体の擦文

土器が出土した。この土器は、現地に放棄され、埋没後ほとんど移動することなく遺存したものと考えられる。

C 11 区から検出された屋外炉址 (HE-2) は、その場所で形成された焼土であるが、注目されるのは、焼土を切るようにして小さな掘り込み (PIT7~12) が 4 層から形成されている点である (図 36)。それらの掘り込みの覆土及び周辺の土層には、多量の炭化物ならびに焼土ブロックが含まれており、6層中の屋外炉址の焼土及びそれに付随する炭化物混じりの土壌が、人為的に攪拌された状態を示している。屋外炉址の周辺には若干の礫が検出されたのみで、それ以外の遺物は確認されていない。焼土およびその周辺の炭化物混じりの土壌約 110.1 ℓ を回収し、微細物の水洗選別をおこなった。

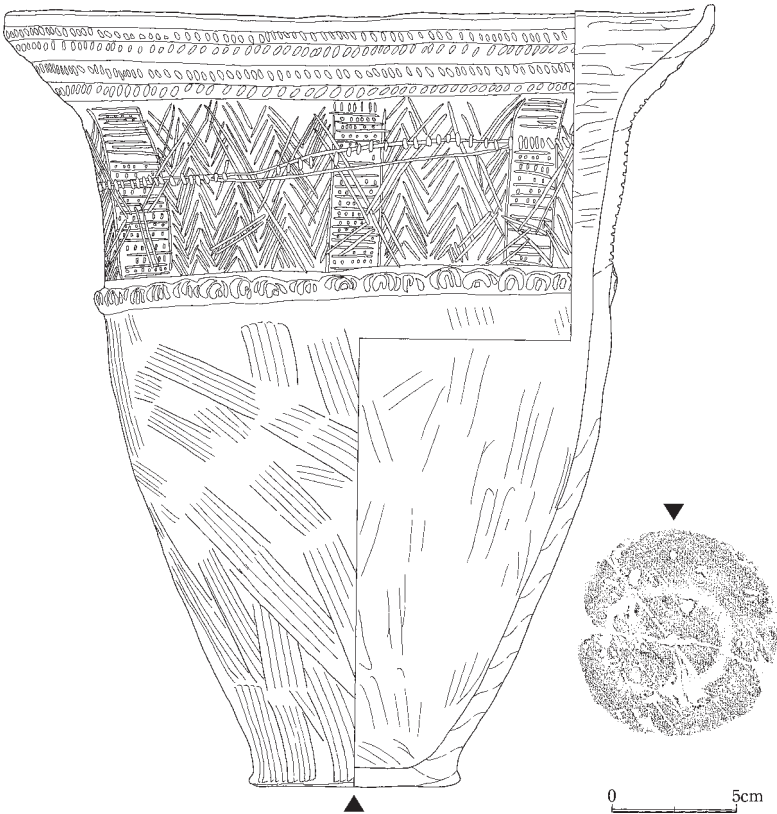


図37 西門地点 6 層出土土器実測図

表20 西門地点 6 層出土土器観察表

挿図 番号	個体 番号	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	器 面 調 整		口縁部 断面形	底部 形状	遺物番号	写真 番号
							外 面	内 面				
37-1	1	長胴甕	31.5	28.5	7.5	2060.0	胴部：ハケメ (縦)	ミガキ、黒色 処理	I	笹痕	84. 99. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134.	9-1

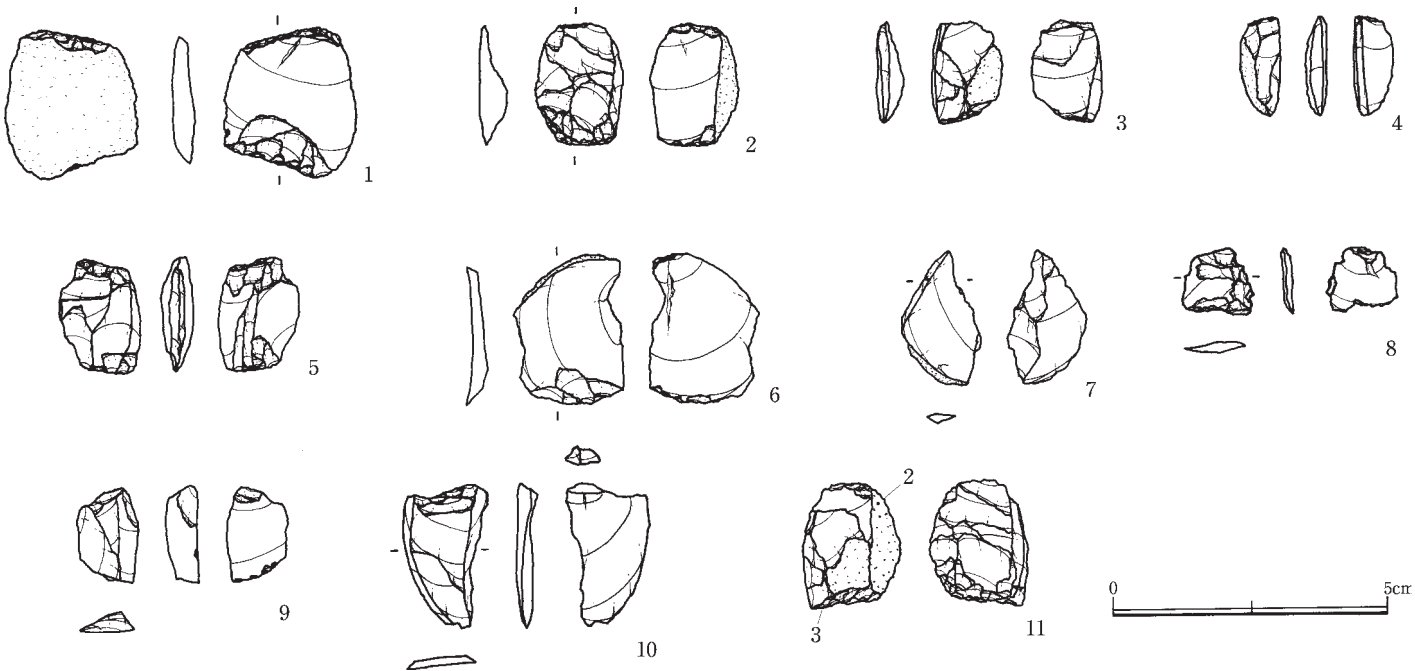


図38 西門地点 6 層出土石器実測図

表21 西門地点 6 層出土石器観察表

挿図番号	遺物番号	重量 (g)	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	石材	器種	被熱	写真番号	備考
38-1	21	3.2	27	27	5	黒曜石	楔形石器		8-1	
38-2	105	1.5	22	17	6	黒曜石	楔形石器		8-2	3 と接合
38-3	16	1.1	19	13	5	黒曜石	楔形石器		8-3	2 と接合
38-4	15	0.5	18	9	4	黒曜石	楔形石器		8-4	
38-5	102	1.6	20	14	6	黒曜石	楔形石器		8-5	
38-6	18	1.7	20	27	4	黒曜石	楔形石器		8-6	
38-7	20	1	19	21	4	黒曜石	楔形石器		8-7	
38-8	101	0.1	12	13	2	黒曜石	楔形石器		8-8	
38-9	92	0.9	17	11	6	黒曜石	楔形石器		8-9	
38-10	19	0.9	24	24	4	黒曜石	剥片		8-10	
—	17	0.1	13	10	3	黒曜石	剥片			
—	94	0.1	7	12	1	黒曜石	剥片			

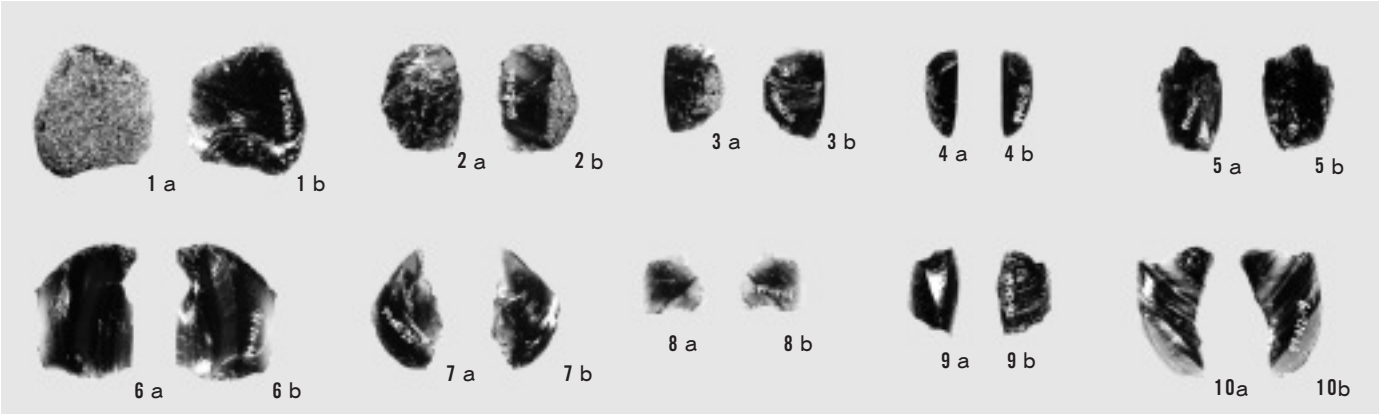


写真 8 西門地点 6 層出土石器

表 22 西門地点 6 層出土礫観察表

遺物番号	地区	重量 (g)	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	円磨度	石材	被熱
2	D 10	41.8	48	32	22	0.8	泥 岩	
3	D 10	54.1	61	27	26	0.7	安山岩	
4	D 10	38.6	57	26	21	0.5	安山岩	
5	D 10	48.3	52	29	27	0.7	安山岩	
6	D 10	7.9	34	26	12	0.7	泥 岩	
7	D 10	117.3	66	50	25	0.7	安山岩	
8	D 10	105.4	64	51	24	0.7	安山岩	
9	D 10	6.6	39	18	12	0.6	泥 岩	
10	D 10	102.1	57	42	32	0.7	安山岩	
11	D 10	227	242	109	67	0.6	安山岩	
12	D 10	100	194	90	46	0.6	安山岩	
13	D 10	222	220	116	55	0.7	安山岩	
14	D 10	107	158	85	74	0.6	安山岩	
22	D 10	96.2	71	50	25	0.7	安山岩	
23	D 10	144.7	71	54	33	0.7	安山岩	
24	D 10	97.4	65	43	32	0.7	安山岩	
25	D 10	97.9	75	43	25	0.7	安山岩	
26	D 10	136.6	65	47	35	0.6	安山岩	
27	D 10	140.7	75	56	29	0.6	安山岩	
28	D 10	129.3	76	42	32	0.7	安山岩	
29	D 10	145.8	76	39	37	0.7	安山岩	
30	D 10	119.4	59	55	28	0.8	安山岩	
31	D 10	146.8	67	45	35	0.7	安山岩	
32	D 10	101.5	64	37	30	0.7	安山岩	
33	D 10	111.2	69	49	29	0.6	安山岩	
34	D 10	168	82	48	32	0.7	安山岩	
35	D 10	122.1	64	48	35	0.6	安山岩	
36	D 10	125.6	70	46	30	0.7	安山岩	
37	D 10	155.5	61	49	37	0.7	安山岩	
38	D 10	113	65	42	32	0.7	安山岩	
39	D 10	124.7	73	48	30	0.7	安山岩	
40	D 10	105.9	66	50	26	0.7	安山岩	
41	D 10 (115.5)					0.7	安山岩	
42	D 10	112.5	69	45	32	0.7	安山岩	
43	D 10	131.1	66	71	28	0.7	安山岩	
44	D 10	99.5	66	41	28	0.7	安山岩	
45	D 10	131.9	72	46	34	0.7	安山岩	
46	D 10	161.9	75	45	33	0.6	安山岩	
47	D 10	100.4	66	38	29	0.7	安山岩	
48	D 10	104	57	48	41	0.7	安山岩	
49	D 10	61.9	54	43	21	0.7	安山岩	
50	D 10	117	71	46	31	0.7	安山岩	
51	D 10	126.3	69	42	32	0.7	安山岩	
52	D 10 (53.9)					0.7	安山岩	
53	D 10	108.3	71	43	31	0.7	安山岩	
54	D 10	108.5	68	44	39	0.7	安山岩	
55	D 10 (55.4)					0.7	安山岩	
56	D 10	127.3	78	42	32	0.7	安山岩	
57	D 10	157.9	66	52	35	0.7	安山岩	
58	D 10	110.3	65	42	28	0.7	安山岩	
59	D 10	134.4	69	55	34	0.7	安山岩	
60	D 10	72.6	65	32	26	0.7	安山岩	
61	D 10	67	66	34	25	0.7	安山岩	
62	D 10	53.3	62	29	25	0.7	安山岩	
63	D 10	51.2	57	32	22	0.7	安山岩	
64	D 10	122.2	73	53	27	0.7	安山岩	
65	D 10	122.7	68	36	38	0.7	安山岩	

66	D 10	163.4	66	50	38	0.7	安山岩
67	D 10	170.8	69	52	35	0.7	安山岩
68	D 10	134.9	62	47	37	0.7	安山岩
69	D 10	120.8	70	32	35	0.7	安山岩
70	D 10	110.9	72	40	31	0.7	安山岩
71	D 10	104.7	64	42	31	0.7	安山岩
72	D 10	80.6	70	40	22	0.7	安山岩
73	D 10	93.9	70	44	24	0.7	安山岩
74	D 10	120.4	62	45	32	0.7	安山岩
75	D 10	159.4	67	51	38	0.7	安山岩
76	D 10	101.7	71	45	32	0.6	安山岩
77	D 10	158.5	69	50	37	0.7	安山岩
78	D 10	112	77	40	28	0.7	安山岩
79	D 10	138.8	67	47	34	0.7	安山岩
80	D 10	126.7	65	49	30	0.7	安山岩
81	D 10	164.7	75	53	33	0.7	安山岩
82	D 10	159	67	53	37	0.7	安山岩
83	D 10	164.9	70	45	39	0.7	安山岩
84	D 10 (111.4)					0.7	安山岩
85	D 10	126.5	65	44	32	0.7	安山岩
86	D 10	161.8	71	54	32	0.9	泥 岩
87	D 10	130.6	77	51	25	0.7	安山岩
88	D 10	57.1	59	33	23	0.6	泥 岩
89	D 10	46.7	64	34	18	0.7	安山岩
90	D 10 (43.6)					0.7	泥 岩
95	D 10	104.9	70	51	25	0.7	安山岩
96	D 10	109.1	62	50	26	0.7	安山岩
97	D 10	133.1	72	44	30	0.7	安山岩
98	D 10	120	66	50	30	0.7	安山岩
99	D 10	119.3	69	46	30	0.7	安山岩
100	D 10	130	68	46	31	0.7	安山岩
103	D 10	128.8	65	46	39	0.7	安山岩
104	D 10	152.8	76	43	35	0.7	安山岩
106	D 10	16	46	26	15	0.6	泥 岩
107	D 10	7.9	33	20	12	0.7	泥 岩
108 A	D 10	16	45	25	16	0.7	泥 岩
108 B	D 10	11	45	22	13	0.7	泥 岩
108 C	D 10	6.5	42	20	11	0.7	泥 岩
109	D 10	13.2	30	24	17	0.7	泥 岩
110	D 10	7.2	30	16	12	0.7	安山岩
111	D 10	14.1	30	29	17	0.7	泥 岩
136 A	D 10	93.9	72	32	31	0.7	安山岩
136 B	D 10	249.8	96	75	39	0.7	安山岩
136 C	D 10	261.9	86	81	33	0.7	安山岩
136 D	D 10	52.4	56	37	26	0.7	安山岩
137	C 10	112.6	73	48	22	0.7	安山岩
138	C 10	54.6	56	38	26	0.7	泥 岩
139	C 10	133.6	63	42	34	0.7	安山岩
140	C 10	68.8	70	44	28	0.7	泥 岩
141	C 10	10.6	44	31	10	0.7	泥 岩
142	C 10	78.2	49	42	39	0.7	泥 岩
143	C 10	13.1	31	21	17	0.7	安山岩
144	C 10	6.4	29	17	10	0.7	安山岩
145	C 10	16	38	26	17	0.7	泥 岩
146	C 11	112.6	73	48	22	0.7	安山岩
148	C 11 (133.6)					0.7	泥 岩
149	C 11 (68.8)					0.7	泥 岩
150	C 11	10.6	44	31	10	0.9	泥 岩
151	C 11	78.2	49	42	39	0.7	安山岩
152	C 11	13.1	31	21	17	0.7	安山岩
153	C 11	6.4	29	17	10	0.7	泥 岩

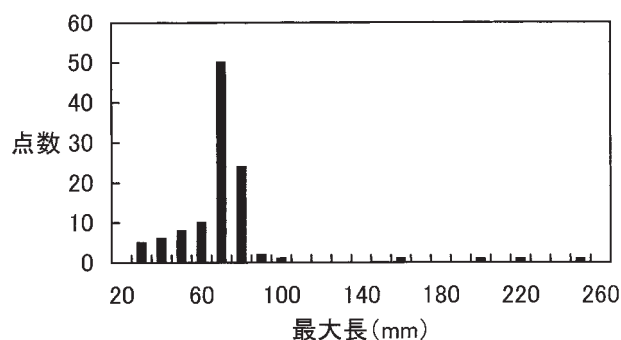
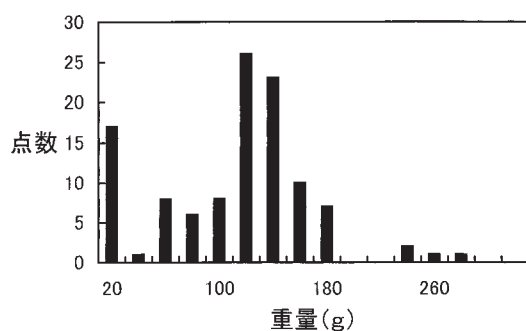


図 39 西門地点 6 層出土礫重量 (左)・最大長 (右) ヒストグラム

b. 遺物

6層から発掘された遺物は、総破片数で210点（遺物座標点178箇所）、総重量13,545.7gである。このうち土器は54点、重量2,060.0gであり、石器は12点、重量12.7gであり、礫は144点、重量11,473gであった。

土器(図37)：器形は口縁部がくの字状に屈曲する。口縁部には羽状の刻み目が施されている。胴部文様帯には縦区画で格子文と縦走綾杉文を交互に施文したのち、文様帯の全面に大形の鋸歯文を相互に重ねあわせることで、菱形の文様構成をなす施文がなされている。さらに、

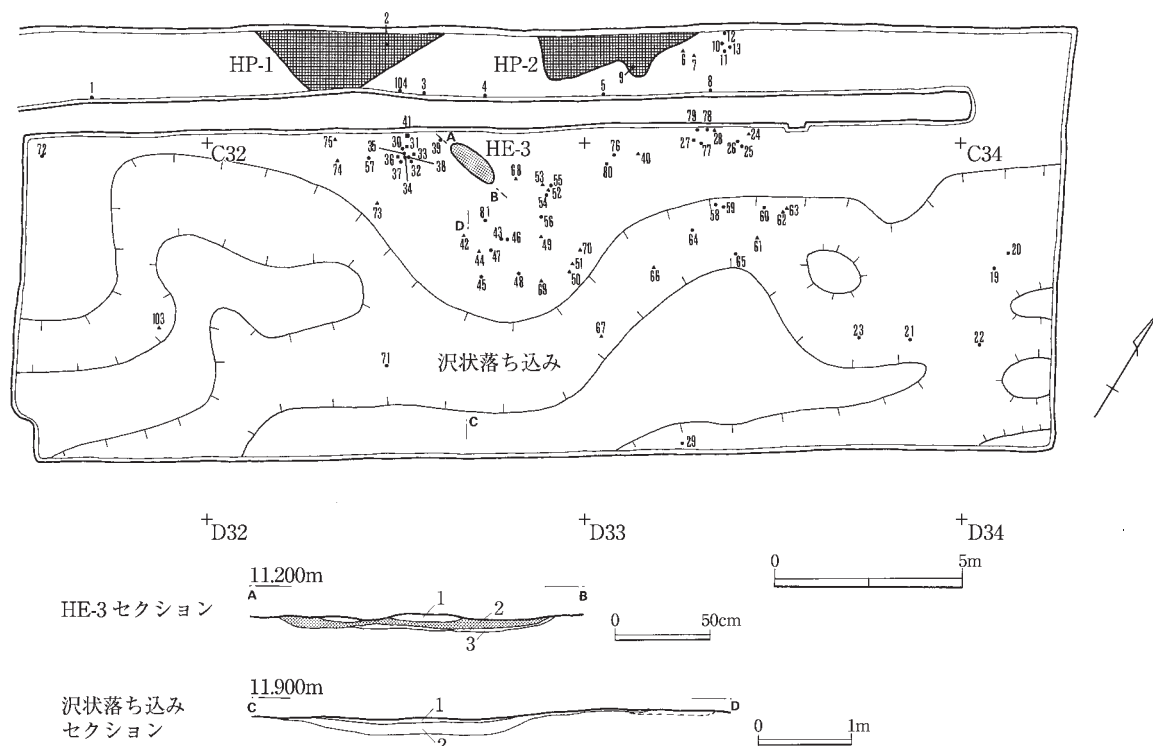


図40 西門地点13層出土竪穴住居址及び屋外炉址（HE-3）実測図

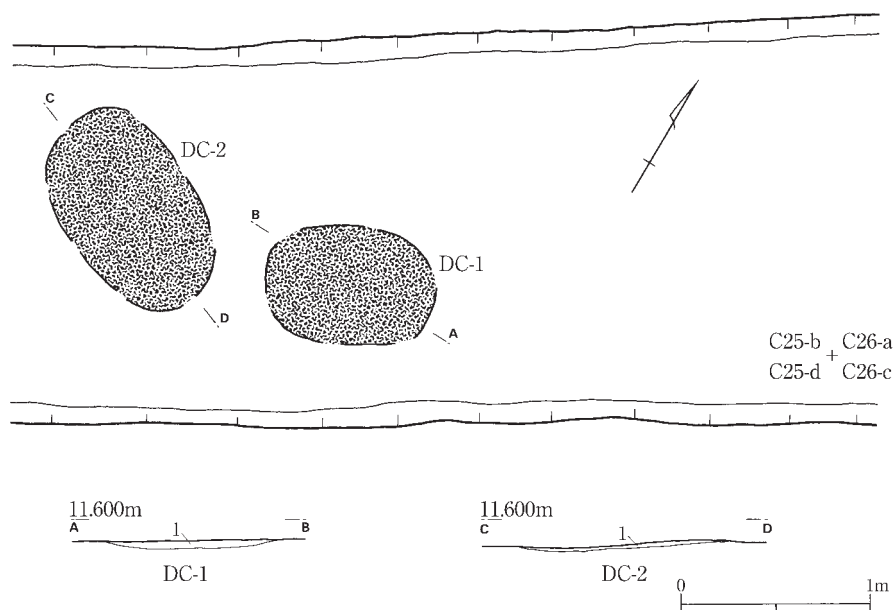


図41 西門地点13層出土炭化物集中箇所（DC-1, DC-2）実測図

表 23 西門地点 13 層出土炉址・炭化物集中箇所土層観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
HE-3	1		赤褐色	粘土質シルト	やや弱	中	焼土ブロック混じる。炭化物少量混じる。
	2		暗赤褐色	粘土質シルト	やや弱	やや強	焼土。炭化物多量に混じる。
	3		暗灰白色	砂質シルト	やや強	やや強	炭化物微量混じる。
DC-1	1	2.5 Y 4/1	黄灰色	粘土質シルト	中	強	炭化物やや多量に混じる。
DC-2	1	2.5 Y 4/1	黄灰色	粘土質シルト	中	強	炭化物やや多量に混じる。

表 24 西門地点 13 層検出沢状落ち込み土層観察表

名称	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
沢状落ち込み	1		暗灰褐色	シルト	強	やや強	炭化物が多量に混じる。
	2		白色	シルト	やや強	強	

表 25 西門地点 13 層出土石器観察表

挿図番号	遺物番号	重量(g)	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	石材	器種	被熱	備考
—	41	0.1	9	5	1	黒曜石	碎片		

表 26 西門地点 13 層出土礫観察表

遺物番号	地区	重量(g)	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	円磨度	石材	被熱
6	B 33	(69.8)				0.7	砂 岩	
7	B 33	(36.9)				0.7	砂 岩	
24	B 33	98	81	30	24	0.7	安山岩	
28	B 33	248.8	104	63	29	0.7	安山岩	
40	C 33	207.5	94	49	36	0.6	安山岩	
42	C 32	297.3	109	49	46	0.7	安山岩	
44	C 32	189	90	52	28	0.6	安山岩	
49	C 32	176.3	88	54	30	0.7	安山岩	
50	C 32	295.8	120	51	41	0.6	安山岩	
51	C 32	192.7	96	46	28	0.6	安山岩	
52	C 32	180.9	102	47	33	0.6	安山岩	
53	C 32	(157.9)				0.7	安山岩	
61	C 33	(143.4)				0.7	安山岩	
62	C 33	(44)				0.7	安山岩	
63	C 33	69.8	53	38	38	0.7	安山岩	
66	C 33	(186.3)				0.7	安山岩	
67	C 33	(46)				0.7	安山岩	
68	C 32	150.7	82	40	36	0.6	安山岩	
69	C 32	133.9	95	49	21	0.6	安山岩	
70	C 32	211.1	108	43	32	0.7	泥 岩	
73	C 32	256.1	114	60	24	0.6	安山岩	
74	C 32	247.3	102	59	32	0.6	安山岩	
75	C 32	137	91	37	29	0.7	安山岩	
103	C 31	(349.4)				0.7	安山岩	
106	C 31	112.5	65	59	22	0.7	安山岩	

文様帯中央よりもやや若干上の部位に沈線を施し、刺突が連続して加えられている。胴下部文様帯には貼付囲繞帯が認められ、その上面には馬蹄形の文様が押捺施文されている。胴部の器面調整は外面にハケメ、内面にミガキが施されている。内面には黒色処理がなされている。

石器（図 38）：いずれも第 1 号礫群に伴って検出されたものである。器種は楔形石器が中心であり、若干の剥片が検出された。石材はすべて黒曜石の転礫で、乳白色の流理構造が観察でき、比較的透明度の高い母岩が利用

されている。接合関係は 2 と 3 の相互で確認された（11 に図示した）のみではあるが、本層出土の石器はすべて同一母岩に属する可能性が高いと考えられる。被熱の痕跡は認められない。楔形石器は、両極打撃法による加撃で生じたものと考えられ、剥片もまたそれ程発達しない打瘤の状態、打面形態からみて、両極打撃法によって剥離されたものと考えられる。

出土状況、母岩の状態、剥離工程いずれの点をみても、一連の剥離過程がよく反映した資料群といえる。ただし、剥離作業自体の現地性は認めがたい。

6. 13 層出土の遺構と遺物

13 層からは、B・C 31～B・C 34 区を中心にして遺構と遺物が検出された。

a. 遺構

遺構としては、竪穴住居址が 2 基、炉址が 1 基、炭化物の集中箇所が 2 つ確認された。前述のように、竪穴住居址はプランの確認のみにとどめ、それ以下の発掘調査はおこなっていない。したがって、竪穴住居址の掘り込み面が 13 層中であるのか、あるいはそれ以下であるのかの判断は保留する。

2 基の竪穴住居址の南に接して、屋外炉址（HE-3）が C 32 区から検出された（図 40）。焼土の分布は楕円形を呈し、約 1.1×0.4 m の規模をもつ。周囲には土器片が集中して分布している。焼土およびその周辺の炭化物が混じる土壤約 30.5 l をサンプルとして回収し、微細物の水洗選別をおこなった。

C 25 区からは、炭化物の集中箇所（DC-1、DC-2）が

2つ検出された(図41)。周辺での遺物の検出は認められなかった。DC-1からは炭化物集中の箇所(土壌約5ℓ)を、DC-2からは土壌約2.5ℓをサンプルとして回収し、微細物の水洗選別をおこなった。

b. 遺物

13層出土の遺物は、おもにC 32～C 34区にから検出された。総破片数で80点(遺物座標点76箇所)、そのうち土器は54点、重量706.1g、石器は黒曜石製の破片が1点、重量0.1g、礫は25点、重量4,238.4gある。土器のうち長胴甕は34点(62.9%)、坏は20点(37.1%)である。長胴甕の口縁部破片は5点(重量65.8g)、胴部破片は23点(重量240.0g)、底部破片は6点(重量156.5g)である。坏の口縁部破片は5点(重量145.3g)、胴部破片は12点(重量89.5g)、底部破片は3点(重量9g)である。

図42-1～3は、長胴甕の口縁部破片である。1は、胴部から頸部にかけてやや内屈し、段をもつものである。2と3の口縁部には刺突(刻み)列が認められ、2には縦方向と横方向の沈線も施されている。4～6は、長胴甕の胴部破片である。4には段が認められる。長胴甕の器面調整に関しては、外面はハケメ(縦)、内面はハケメ(横)が卓越している。7～10は、長胴甕の底部破片である。底面の厚さは比較的薄く、11は、坏のほぼ完形品である。HE-3の西側でまとまって出土した。体部に段をもつ。内外面ともにミガキが施され、黒色処理されている。12～14は、坏の体部破片である。坏の内面にはいずれもミガキが施され、黒色処理されている。

7. 小結

北海道大学埋蔵文化財調査室によるこれまでの調査で、サクシュコトニ川とセロンベツ川の合流付近では、擦文期の集落址の存在が確認されている(北海道大学埋蔵文化財調査室編1986)。一方、近年、札幌市埋蔵文化財センターにより、セロンベツ川上流に属する桑園地区での発掘調査がすすめられ、擦文前期末から後期にいたる集落址が発見されている(加藤編1995、上野編1997、藤井編1997、藤井編1998)。しかし、その間に位置する北大の第一農場内に関しては、その詳細は不明なままであった。本調査では、埋没河川であるセロンベツ川的位置を確定するとともに、擦文期の複数の遺構・遺物包含

層を確認することができた。

本地点の13層からは、遺構としては屋外炉址や炭化物の集中箇所が検出され、屋外炉址の周辺からは多数の土器や礫が検出された。出土土器は、段をもつという器形上の特徴、文様が施されていないという点からみて、大半は擦文前期に位置づけられるものと考えられる。長胴甕や坏の器形や器面調整上の諸特徴は、サークル会館地点(吉崎・岡田編1981)出土資料とのあいだに一定の共通性が認められる。おおよその年代は、8世紀後半から9世紀前半と考えられる。第III章5節3で報告されているように、正確な層準を特定するにはいたっていないが、基本層序12層にはB-Tmが含まれている可能性が明らかにされた(図42～44参照)。このことは、上記の土器に関する見解と整合するものである。

本地点の6層からは、セロンベツ川に面する自然堤防上から、遺構としては炉址が2基、土坑が1基、それに礫群が検出された。出土土器は、器形や文様の諸特徴からみて、擦文後期に位置づけられる。石器は楔形石器、剥片であり、一連の剥離過程のなかで生じた資料群と考えられる。本層出土遺物の特徴は、土器が1個体、石器が1母岩にまとめられる点にあり、出土状況の単独性・一括性の高さからみて、ほとんど埋没後の移動を考慮しなくともよい、と考えられる。居住地から離れて、こうした遺物・遺構が残されているということに、一定の意義を認めることができる。もちろん、至近の距離に竪穴住居址があった可能性は否定できず、竪穴住居址を含めた集落址のなかで、このような遺構・遺物の出土状態がどのように位置づけられるのかは、今後検討を要する課題であろう。

本地点の4層からは複数の土坑群と礫が検出されたが、土器の共伴は認められなかった。層位的な関係からみて、擦文期の終末段階もしくはそれ以降の時期に属する可能性がある。北大構内ではこれまで、中・近世併行期の遺構・遺物は確認されてこなかったが、本層出土の遺構や遺物は、そうした時期に属するものである可能性が高い。遺物は礫しか検出されなかったため、これ以上の詳細な評価をおこなうことはできないが、北大構内のほとんどの区域で、削平、攪乱されてしまったと考えられる中・近世併行期の遺構・遺物包含層が、このように部分的にでも残っている可能性が把握できたことは注目すべきことである。

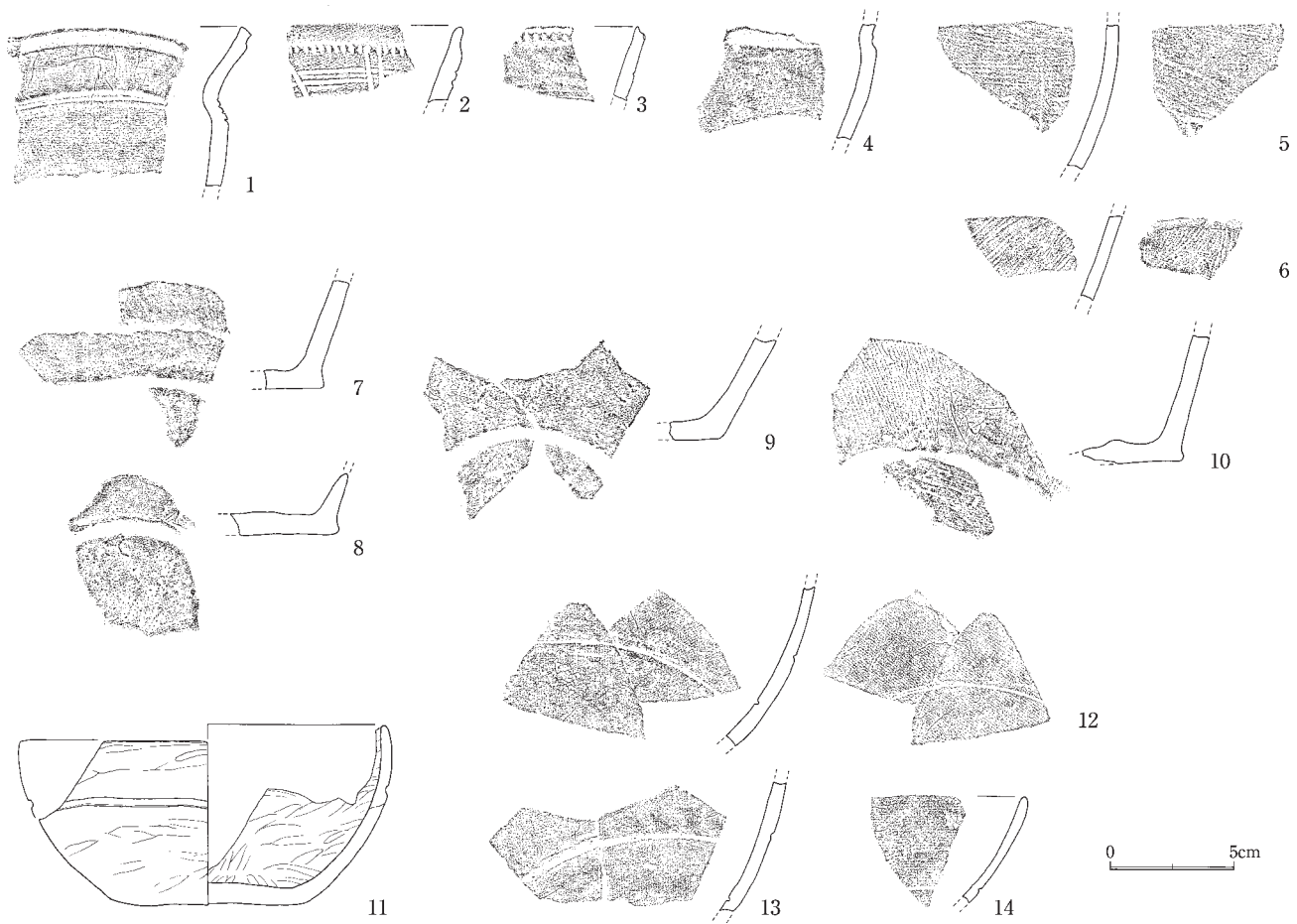


図42 西門地点 13 層出土土器実測図及び拓影図

表27 西門地点 13 層出土土器観察表

挿図 番号	個体 番号	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	器 面 調 整		口縁部 断面形	底部 形状	層位	遺物番号	写真 番号
							外 面	内 面					
42-1	4	長胴甕				39.6	口縁部：ナデ（横）， 胴部：ハケメ（縦）	ミガキ	F		13	48	9-2
42-2	8	長胴甕				13.0		ミガキ	B		13	19	9-3
42-3	6	長胴甕						ナデ（横）	G		13	25	9-4
42-4	15	長胴甕				14.9					13	18	9-5
42-5	3	長胴甕				17.2	ハケメ（横）	ハケメ（横）			13	56	9-6
42-6	1	長胴甕				8.3	ハケメ（縦）	ハケメ（横）			13	76	9-7
42-7	9	長胴甕				33.7	ハケメ（縦）	ハケメ（横）			13	15.16	9-8
42-8	10	長胴甕				26.6					13	14	9-9
42-9	13	長胴甕				39.8		ハケメ（横）			13	22.71	9-10
42-10	17	長胴甕				56.4	ハケメ（縦）	ヘラナデ			13	43	9-11
42-11	11	坏	7.3	15.1	6.8	213.5	ミガキ	ミガキ，黑色 処理			13	30.31.32. 33.34.35. 36.37.38. 54.57	9-12
42-12	5	坏				26.7		ミガキ，黑色 処理			13	21.27	9-13
42-13	2	坏				28.8		黑色処理			13	1.105	9-14
42-14	11	坏				7.0		黑色処理	O		13	60	9-15

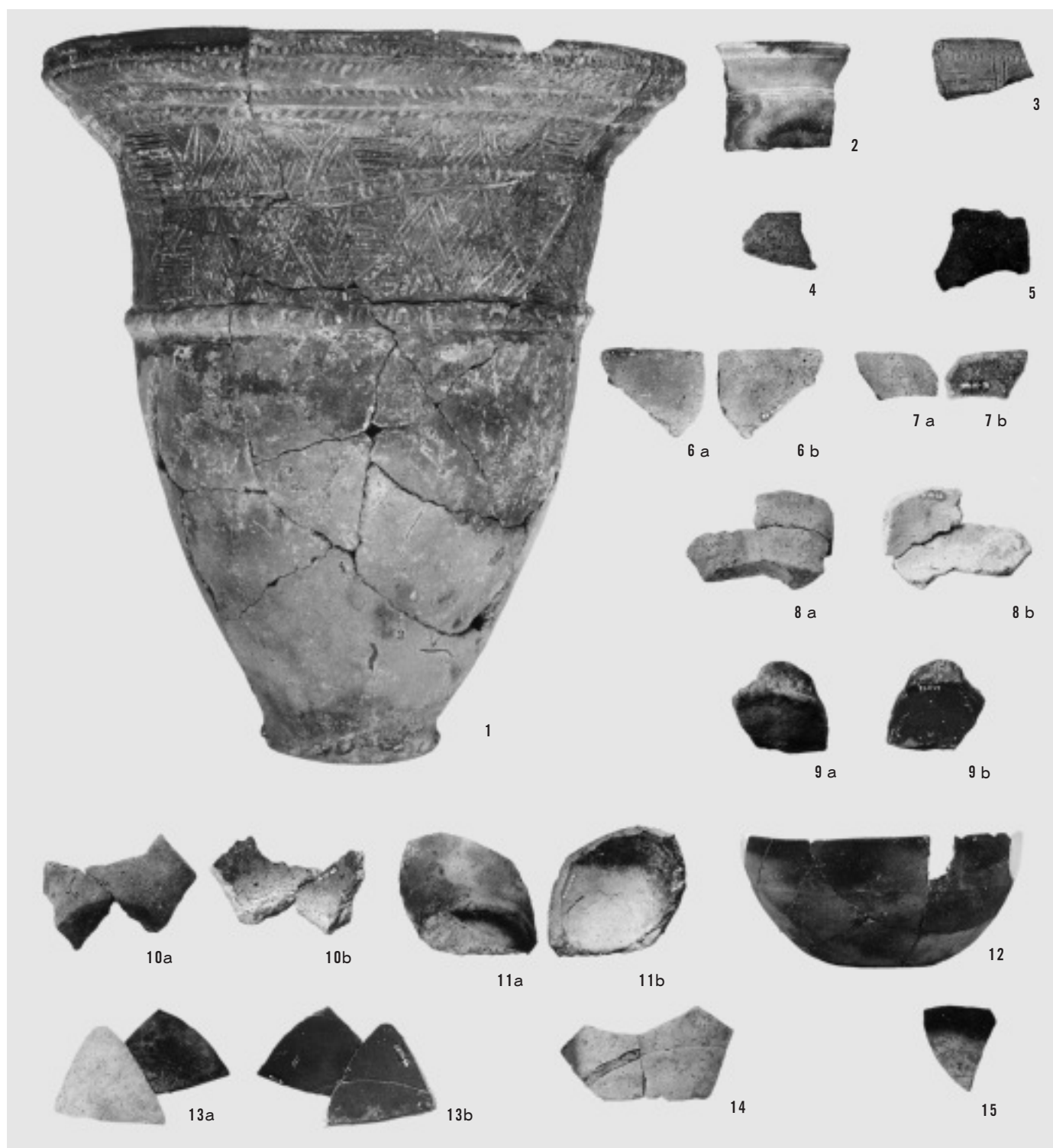


写真9 西門地点出土土器（1：6層出土，2～15：13層出土）



1. トレンチⅠ（調査状況：北東より）



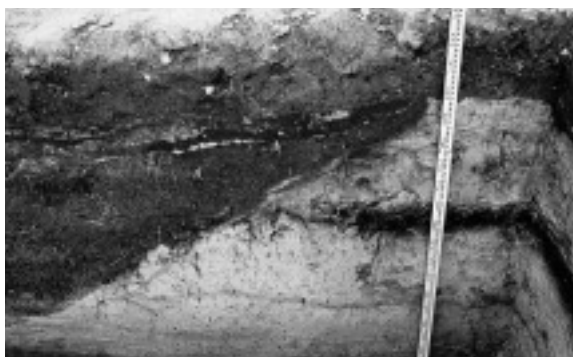
2. トレンチⅢ（調査状況：南西より）



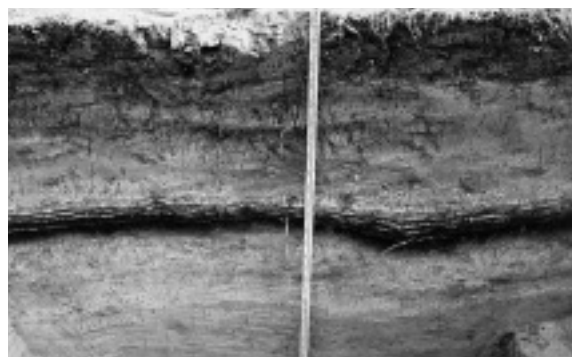
3. F-3 北壁（南より）



4. トレンチⅠで確認されたセロンベツ川（東より）



5. F-10 北壁（南より）



6. F-6 北壁（南より）



7. 4層出土 PIT-1～4（検出状況：南西より）



8. 4層出土 PIT-2（検出状況：西より）



1. 6層出土 HE-1 及び第1号礫群 (北東より)



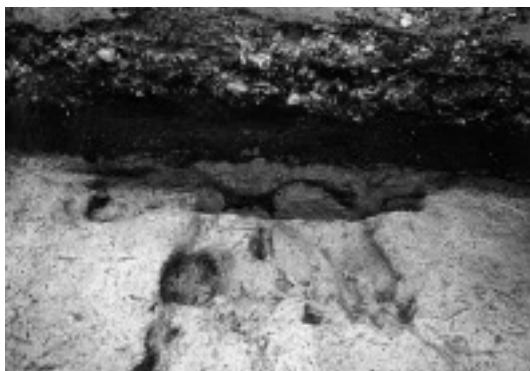
2. 6層出土 HE-1 (セクション：東より)



3. 6層出土土器集中 (北東より)



4. 6層出土 HE-2 (焼土検出状況：南より)



5. 6層出土 HE-2 (完掘：南より)



6. 13層で検出した沢状の落ち込み (西より)



7. 13層出土第2号竖穴住居址(検出状況：南東より)



8. 13層出土 HE-3 (セクション：南より)

写真II 西門地点の調査(2)

II-5 動植物遺存体及び自然科学分析

1. 工学部 J・I 棟間地点及び西門地点の動物遺存体

高橋 理

a. はじめに

工学部 J・I 棟間地点は、北海道大学構内の南西部、旧サクシュコトニ川中流域の右岸段丘上に立地する。標高はおおよそ 12 m である。工学部の J 棟と I 棟の間に設備設置工事が計画されたため、その事前調査が行われた。その結果、擦文前期に属すると考えられる竪穴住居が 1 軒検出された。その床面（生活面）およびカマド燃焼部における焼土の土壌サンプリングが行われ、フローテーションプロセスを経て動物遺存体が回収された。

西門地点は、北海道大学北西地区、第一農場北端に位置する。旧セロンベツ川の左右両岸段丘上に立地する。標高はおおよそ 11 m である。このうち、旧セロンベツ川右岸にあたる C 32 区の 13 層より検出された屋外炉址 HE-3 より少量の動物遺存体が検出された。

b. 工学部 J・I 棟間地点の動物遺存体

出土動物遺存体：表 28 を参照されたい。動物遺存体が検出されたのは、サンプル番号 97・122 の竪穴覆土 5 層床面および 98・99 のカマド燃焼部である。

硬骨魚綱 Osteichthyes

サケ目 Salmoniformes

サケ科 Salmonidae

サケ属 *Oncorhynchus*

コイ目 Cypriniformes

コイ科 Cyprinidae

ウグイ属 *Leuciscus* (*Tribolodon*)?

すべて強く被熱し、白色化がすすんでいる。カマド燃焼部の焼土では、サケ属の椎骨破片がやや多くみられた。シロサケ *Oncorhynchus keta*、サクラマス *Oncorhynchus masou masou*、カラフトマス *Oncorhynchus gorbuscha* のいずれかであるが、やや高い残存率の 1 点に注目するとかなり大型であり、小型のサクラマス（むろんヤマメは除外される）よりは他の 2 種

の可能性が高い。さらには、サケ科とした骨片についてもこれら 2 種あるいはそのいずれかに帰属するのかもしれない。

一方、床面サンプル出土のサケ目とした椎骨破片は非常に小型であり、また網目状構造が見られないことから、キュリウオ科 *Osmeridae* (キュウリウオ属 *Osmerus*、シシャモ属 *Spirinchus*、ワカザギ属 *Hypomesus*) あるいはアユ科 *Plecoglossidae* (アユ属 *Plecoglossus*) の 1 種ではないかと考えられる。

また、床面サンプルではウグイ属 *Leuciscus* (*Tribolodon*) かと考えられる咽頭骨中央部破片が 1 点出土している。咽頭歯は脱落しており、詳細は不明である。

コメント：9 世紀中葉～後半の擦文中・後期において、サクシュコトニ川において遡上するサケを積極的に捕獲していたことは明らかにされている（北海道大学・吉崎ほか 1986）。河道の変動は想定されるが、サクシュコトニ川におけるサケ資源は小さくなかったであろう。擦文前期においてサケ捕獲を目的とした積極的な河川生業戦略が完成しつつあったことを想定したい。

c. 西門地点の出土動物遺存体

出土した動物遺存体は、非常に細かい骨片が 14 点であった（表 28）。熱を受けている他には特徴を見出すことができず、種の同定にはいたらなかった。本論（34～55 頁）によれば、13 層の炉址や炭化物集中にともなって土器や石器が出土している。土器の特徴から、これらが 8 世紀後半から 9 世紀前半の擦文前期に位置づけられるらしい。

所属時期と、旧セロンベツ川の段丘上にあるという位置的ありかたから、これらの小骨片が、屋外炉址 HE-3 において処理された魚類なかんづくサケ科あるいはサケ属に帰属する可能性をあげることができるだろう。

引用文献

北海道大学(1986)『サクシュコトニ川遺跡 北海道大学構内で発掘された西暦 9 世紀代の原初的農耕集落』

2. 工学部J・I棟間地点及び西門地点で 検出された炭化植物種子

椿坂 恭代

a. 扱った資料

分析資料として扱った炭化植物は、西門地点で発掘された擦文文化の焼土と土坑並びに擦文文化の工学部J・I棟間地点の竪穴住居址カマド周辺の床面などから土壌が採取され、フローテーション法で処理された後、種子の第一次選別を経て送付されてきた。これらの資料について実体顕微鏡を使用して観察と撮影を行った。検出された植物種子の出土表は表29に示した。

なお、各遺跡の詳細については24～55頁を参照されたい。

b. 工学部J・I棟間遺跡から検出された種子

西暦8世紀後半～9世紀前半と思われる竪穴住居址のカマド周辺の床面からタデ科POLYGONACEAE種子1粒とニワトコ属*Sambucus* L. 種子が18粒検出された。

c. 西門遺跡から検出された種子

タデ科POLYGONACEAE(写真12-1, 6層: 焼土HE-1から出土, 計測値は長さ2.2mm, 幅1.3mm)

13層(擦文前期)の焼土(HE-3)から3粒, 6層(擦文後期)の焼土(HE-1)から1粒, 4層(擦文晩期以降)の土坑(PIT-5)から1粒ずつ検出されている。瘦果は三角状紡錘形。タデ科種子には形態の類似した種類が多いため、詳細な分類は困難である。

ニワトコ属*Sambucus* L. (写真12-2a, b, 4層: 土坑PIT-5から出土, 計測値は長さ1.95mm, 幅1.1mm, 厚さ0.6mm)

4層(擦文晩期以降)の土坑PIT-4から12粒, PIT-5から51粒, 6層(擦文後期)の焼土HE-1から1粒, 土坑PIT-6から1粒, 13層(擦文前期)の焼土(HE-3)から3粒が出土している。種子は狭楕円形。背面は円みがあり、腹面は鈍稜をなす。種皮は皺状に隆起した模様があり粗面である。これらの特徴からニワトコ*Sambucus racemosa* L. と判断された。

ブドウ科VITIDACEAE(写真12-3a, b, 4層: 土坑PIT-5から出土, 計測値は長さ4.4mm, 幅3.7mm, 厚さ2.4mm)

4層(擦文晩期以降)の土坑PIT-5から1粒検出され

ている。堅果は広倒卵形、背面は円みがあり、倒へら形の凹みがある。腹面の中央に稜をなす。稜の両側に針形の凹みがある。北海道南部には同種のものとしてエビツル*Vitis ficifolia* Bunge var. があるが、分布域がこの地域まで及んでいないという。したがって、形態の特徴からヤマブドウ*Vitis coignetiae* Pulliat でないか。

冬芽(写真12-4, 13層: 焼土HE-3から出土)

13層(擦文前期)の焼土1(HE-3)から冬芽が1個出土しているが分類は困難である。

その他、資料の保存状態が悪いため分類できなかったものを不明として扱った。

d. コメント

検出された炭化種子はタデ科、ニワトコ属、ブドウ科種子であった。すべて野生植物の種子である。通常、擦文時代他遺跡例からみて予想される栽培植物は全く検出されなかった。これは土壌のサンプリングの位置や層準に起因するのか、土壌のフローテーション処理の過程に問題があったのかわからない。両地点とも保存状況は良くなかったことも考えられる。これまで各地で扱ったデーターでも状況の明確でない土壌採取をしても良好な結果は得られていないことが多い。

今回、検出された種子の中でニワトコの出土量が最も多かった。ニワトコ種子は、遺跡によっては大量に検出されることがあり、栽培植物であった可能性がしばしば問題になる¹⁾。しかし、ニワトコの果実単体ではアルコール発酵はしないと言う。これが酒造の目的で利用されたかは、今後の出土例で検討する必要がある。

註

- 1) 2002年3月1日に北海道大学学術交流会館で開催された日ロ共同シンポジウム「サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅」において辻誠一郎氏が指摘された。

表28 工学部 J・I 棟間地点及び西門地点出土の動物遺存体

地点名	サンプル 番号	採取層位	採取地区	出土動物遺存体	出土部位	数量	備考
西門	8	13 層	C 32区 HE-3	不明 non det.	部位不明	14	被熱
工学部 J・I I 棟間	97	覆土 4 d 層	床面サンプル	サケ属 <i>Oncorhynchus</i> sp.	椎骨 fr.	1	被熱
				ウグイ属 <i>Leuciscus(Tribolodon)?</i> sp.	咽頭骨 中央部 fr.	1	被熱
				硬骨魚綱 <i>Osteichthyes</i> non det.	部位不明	19	被熱
工学部 J・I I 棟間	98	焼土	カマド焼土	サケ属 <i>Oncorhynchus</i> non det.	椎骨 fr.	5	被熱
				サケ科 <i>Salmonidae</i> sp.	歯 fr.	1	被熱
				サケ科 <i>Salmonidae</i> non det.	鰭軟条・棘 fr.	3	被熱
				硬骨魚綱 <i>Osteichthyes</i> non det.	部位不明	25	被熱
工学部 J・I 棟間	99	焼土	カマド焼土	サケ属 <i>Oncorhynchus</i> non det.	椎骨 fr.	10	被熱
				硬骨魚綱 <i>Osteichthyes</i> non det.	部位不明	4	被熱
工学部 J・I 棟間	122	覆土 4 d 層	床面サンプル (d-2)	サケ属 <i>Oncorhynchus</i> non det.	椎骨 fr.	7	被熱
				サケ目 <i>Salmoniformes</i> sp.	椎骨 fr.	1	小型・被熱
				不明 non det.	部位不明	7	被熱

第29 工学部 J・I 棟間地点及び西門地点出土の炭化種子

地点名	サンプル No.	サンプル採取 遺構名	採取土 量(ℓ)	層位	時期	タデ科 (粒)	ニフトコ 属(粒)	ブドウ科 (粒)	冬芽 (粒)	不明粒
工学部 J・I 棟間	27, 90, 124	竪穴住居址床面	10		擦文前期	2	18			
西門	11	PIT-4	3.5	4	擦文晩期以降		12			
西門	123, 129, 135	PIT-5	11.5	4	擦文晩期以降	1	51	1		
西門	9	HE-1	10	6	擦文後期		1			
西門	118	HE-2	9	6	擦文後期	1				1
西門	10	PIT-6	7	6	擦文後期		1			
西門	6, 20	HE-3	8	13	擦文前期	3	3		1	1

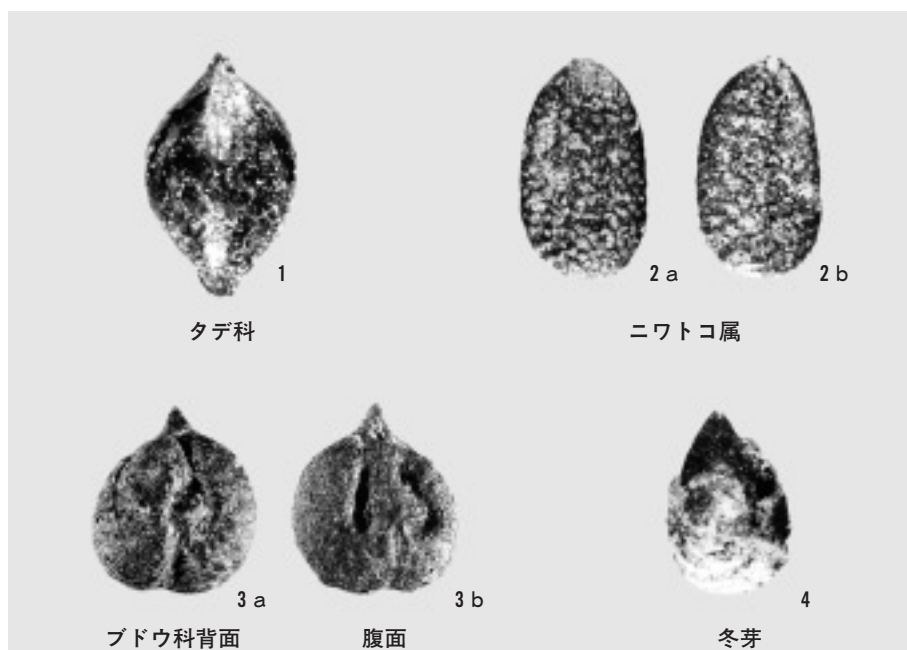


写真12 西門地点出土の炭化種子

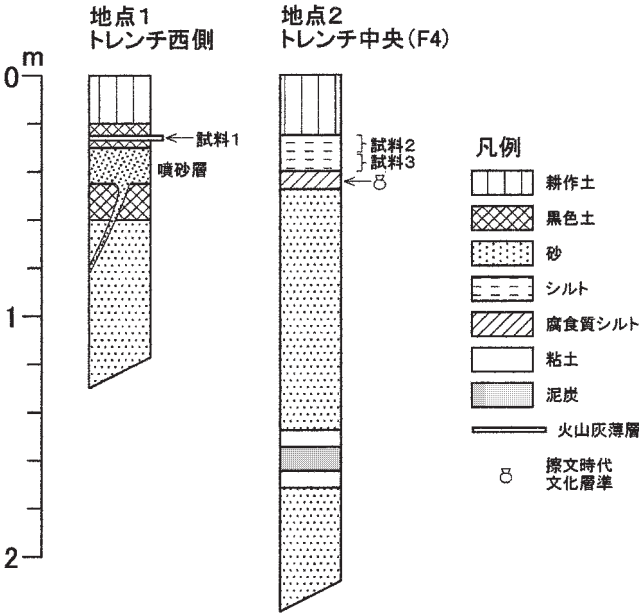


図43 西門地点試料採取地区地質柱状図

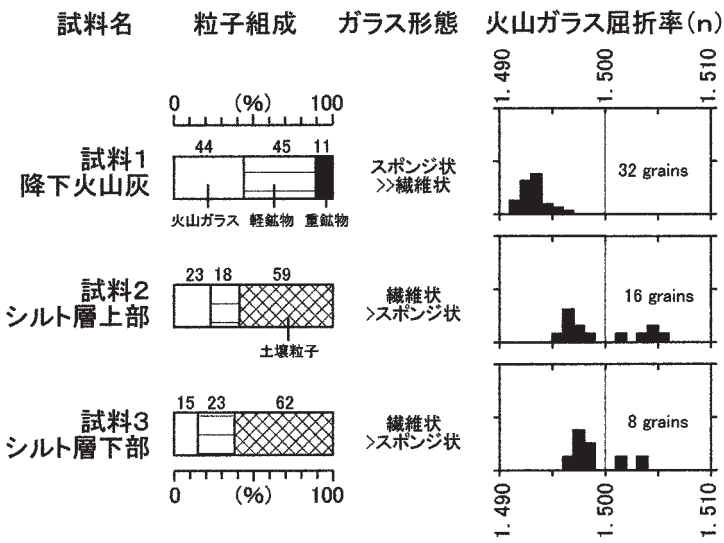


図44 西門地点テフラ分析結果

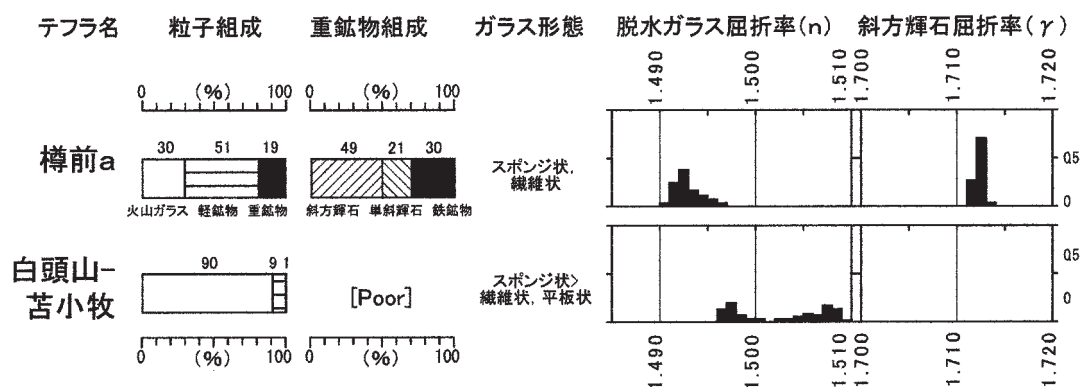


図45 樽前 a テフラ及び白頭山苦小牧テフラの岩石学的特徴 中村 (2002) による

3. 西門地点におけるテフラ分析結果

中村 有吾

a. はじめに

北海道大学第1農場北縁付近の西門地点において、図43に示す3試料のテフラおよび堆積物を採取した。これら3試料を含む堆積物の層序を図43に記載した。また、室内分析にもとづいて岩石学的特徴を明らかにした(図44)。

採取試料は、実験室内において洗浄・篩別・検鏡をおこなった。火山ガラス・軽鉱物・重鉱物の含有比率を計測するために、1/8～1/16 mm サイズの試料を偏光顕微鏡で観察し100粒子以上をカウントした。火山ガラスの屈折率は、1/8～1/16 mm サイズ試料を400°C12時間熱処理法(中村ほか, 2002)で脱水した後、温度変化型屈折率測定装置(RIMS86, 京都フィッシュン・トラック製)を用いて檀原(1993)の方法で測定した。火山ガラスの形態は、町田・新井(1992)の分類にもとづいて記載した。

b. 試料の岩石学的特徴と広域対比

北海道の主要完新世テフラの岩石学的特徴は中村ほか(2002)によってすでに公表されている。ここでは、発掘現場で採取した試料と中村ほか(2002)の記載を比較することで広域対比をおこなう。

試料1

試料1は、耕作土に覆われる黒色土壌(本報告で基本層序2層とされているもの)に挟在する降下火山灰の薄層である。A-3区の北壁で採取した。試料1は、スポンジ状火山ガラスのほか、斜長石、斜方輝石、単斜輝石などの鉱物を含む。

試料1に含まれる火山ガラスの形態(スポンジ状)お

よび脱水ガラス屈折率の値($n=1.491\sim1.494$)は、樽前aテフラ(Ta-a:西暦1739年噴火。山田, 1958)の特徴(図45)と一致している。よって、試料1はTa-aに同定される。

試料2

図43地点2では、擦文期の遺物を含む黒色土壌(本報告で基本層序13層とされているもの)の上位にあるシルト層(本報告で基本層序12層とされているもの)を上下に二分し、それぞれ堆積物を採取した(上位から試料2, 試料3とする)。深掘り区F4の北壁で採取した。試料2には、円磨した岩片や粘土鉱物など土壌粒子を多量に含むほか、繊維状火山ガラスや斜長石を少量含む。この火山ガラスの脱水ガラス屈折率は $n=1.495\sim1.506$ で、バイモーダルな特徴を持つ。

これら試料2の特徴は、白頭山苦小牧テフラ(B-Tm:西暦947年噴火。町田ほか, 1981;早川・小山, 1998)の特徴(図45)とよく類似する。よって、試料2に含まれる火山ガラスは、B-Tmに由来すると考えられる。

そのほか、試料2にはすでに水和が完了したスポンジ状火山ガラスが少量含まれる。この火山ガラスについては屈折率を測定しなかったため断定は出来ないが、支笏1テフラ(Spfa-1:40 ka BP. 勝井, 1959;柳田, 1994)に由来する火山ガラスの可能性はある。

試料3

試料3は、試料2の下位から採取した堆積物である。試料3は、試料2と同様に、土壌粒子を多量に含みごく少量の繊維状火山ガラスを含む。この試料については、屈折率測定が可能な粒子が十分に得られなかったため、火山ガラスの起源等についての詳しい議論は不可能と考える。

c. まとめ

上記のように、本発掘現場において、Ta-aの降下層準

を特定することができた。また、シルト層中に、B-Tm に由来する火山ガラスの存在を確認したが、この層には B-Tm よりも古い火山ガラスが含まれており、B-Tm の正確な層準を特定するには至らなかった。

引用文献

勝井義雄 (1959) 支笏降下軽石堆積物について—特に支笏カルデラ形成直前の活動について。火山第2集, 4, 33-48.
檀原 徹 (1993) 温度変化型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2, 研究対象別分析法」: 149-158, 東京大学出版会。

中村有吾・片山美紀・平川一臣 (2002) 水和の影響を除去した北海道の完新世テフラガラスの屈折率。第四紀研究, 41, 11-22.
早川由紀夫・小山真人 (1998) 日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日—十和田湖と白頭山—。火山, 43, 403-407.
町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス—日本列島とその周辺。276 p, 東京大学出版会。
柳田 誠 (1994) 支笏降下軽石1 (Spfa-1) の年代資料。第四紀研究, 33, 205-207.
山田 忍 (1958) 火山噴出物の堆積状態から見た沖積世における北海道火山の火山活動に関する研究。地団研 専報, 8, 40 p.

第III章 試掘・立会調査の成果

1. 試掘・立会調査で確認された土層堆積

1999・2000年度は、図47～48に調査位置を示したように、北大構内各地で試掘・立会調査が実施された。それに伴い、北大構内各所で土層観察をおこない、いくつかの特徴的な土層堆積の状況を把握することができた。ゲスト・ハウス地点（吉崎編1995）の調査をもとにして提示された北大構内標準層序と比較しながら、各地での土層堆積の状況について概観しておきたい。

図46-1は、北大構内標準層序が設定されたゲスト・ハウス地点（吉崎編1995）と同様の土層堆積が確認できた理学部総合研究棟新営に伴う薬品庫設置予定地(0006-1, 図47-⑤)の土層セクション図である。2～7層は標準層序第Ⅱ層、8・9層は同第Ⅲ層、10～13層は同第Ⅳ層、14層以下は同第Ⅴ層以下に対比できると考えられる。Ⅲ層、Ⅳ層に対比される土層の層厚が比較的厚く、黒色部相互の間隔が約10～30cmある。理学部からはより北に位置する工学部南側（図47-⑧）では、その間隔が10cm

以下に狭まっている状況が確認された。

図46-2に示した工学部研究実験棟新営に伴う防火水槽設置予定地(9910-2, 図47-⑪)では、2～8層が褐色の砂や砂質シルトであり、標準層序第Ⅱ層に対比できる可能性があるが、それより下位の土層に関しては標準層序との対比ができない。9層以下の粘土、粘土質シルト層中に泥炭層や粗砂層が挟在する。

標準層序第Ⅰ層に対比できる黒色土層（2層）の下位に厚い黄褐色の粗砂、白色や青灰色の粘土、泥炭層が認められたのが、高等教育機能開発総合センター・ボイラーユニット設置予定地(9905-4, 図47-⑳)である（図46-3）。

砂、砂質シルトである2～4層の下位に、黒色と青灰色粘土の互層が厚く堆積しているのが、低温科学研究所研究棟新営予定地（9912-3, 図48-⑤）である（図46-4）。

以上、試掘調査によって確認された特徴的な土層堆積の状況について概観してきた。次に年度ごとの試掘調査の成果について報告する。

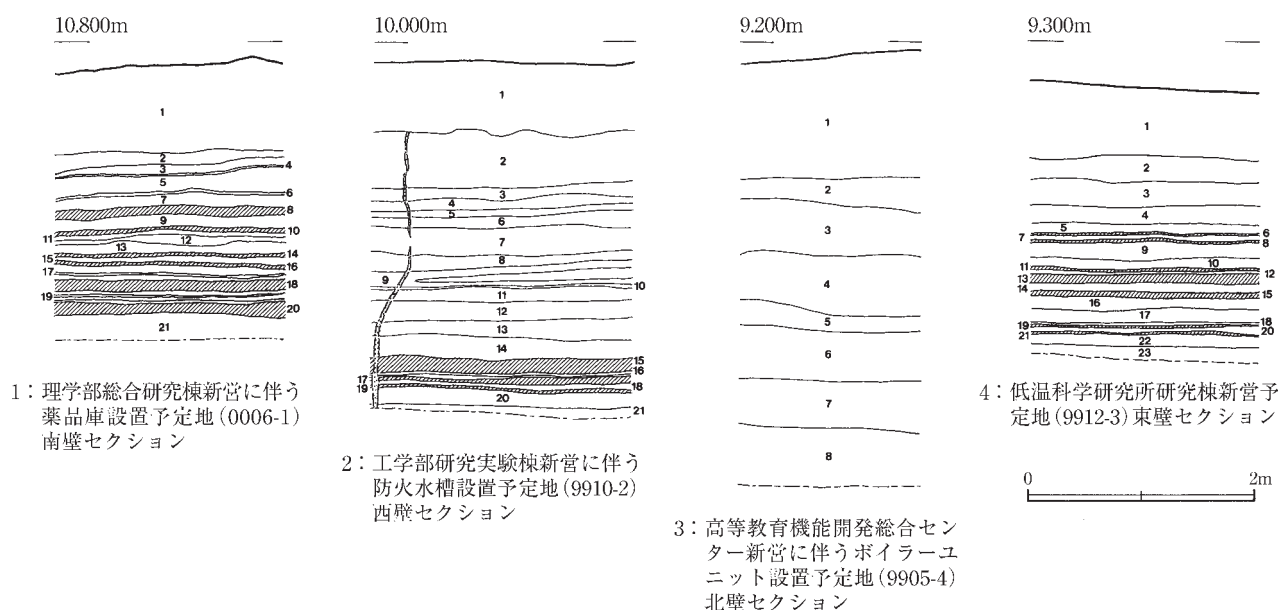


図46 構内試掘調査土層セクション図

表30 北大構内試掘調査土層観察表

調査区名	層名	土色	土性	混入物など
理学部総合 研究棟新営 に伴う薬品 庫設置予定 地(0006-1)	1			客土
	2	暗灰色	シルト	
	3	褐色	砂質シルト	
	4	黒褐色	シルト	炭化物少量混じる。
	5	褐色	砂質シルト	
	6	黄褐色	粘土	
	7	黄褐色	粘土質シルト	
	8	黒色	粘土質シルト	
	9	灰色	砂質シルト	
	10	黒色	粘土	炭化物微量混じる。
	11	茶褐色	シルト	
	12	褐色	砂質シルト	
	13	緑灰色	粘土	
	14	黒色	粘土	
	15	緑灰色	シルト	
	16	黒色	粘土	炭化物少量混じる。
	17	暗緑灰色	砂質シルト	5 GY2/1 オ リープ 黒色粘土が混じる。
	18	黒色	粘土	
	19	緑灰色	粘土	
	20	黒色	粘土	
	21	青灰色	粘土	
工学部研究 実験棟新営 に伴う防火 水槽設置予 定 地 (9910-2)	1			客土
	2	褐色	砂	
	3	淡褐色	砂	
	4	褐色	砂	
	5	淡褐色	砂質シルト	
	6	褐色	砂	
	7	淡褐色	砂質シルト	
	8	褐色	砂	
	9 a	白色	粘土質シルト	
	9 b	褐色	砂質シルト	
	10	明灰白色	粘土質シルト	
	11	白色	粘土質シルト	
	12	暗灰白色	粘土質シルト	炭化物少量混じる。
	13	褐色	砂	
	14	暗灰白色	粘土質シルト	
	15	黒色	泥炭	
	16	白色	粘土質シルト	
	17	黒色	粘土	
	18	白色	粘土	
	19	黒色	粘土	
	20	白色	粘土	
	21	黒色	粘土	
高等教育機 能開発総合 センター新 営に伴うボ イラーユニ ット設置予 定 地 (9905-4)	1			客土
	2	黒色	シルト	
	3	黄褐色	粗砂	
	4	白色	粘土	
	5	灰褐色	粘土	
	6	青灰色	粘土	
	7	青灰色	粗砂	炭化物少量混じる。
	8	青灰色	泥炭	

低温科学研 究所研究棟 新営予定地 (9912-3)	1			客土
	2	灰白色	砂質シルト	
	3	褐色	砂	
	4	灰白色	粘土	
	5	青灰色	粘土	
	6	黒色	粘土	
	7	青灰色	粘土	
	8	黒色	粘土	
	9	明褐色	粘土	
	10	青灰色	粘土	
	11	黒色	粘土	
	12	青灰色	粘土	
	13	黒色	粘土	炭化物がやや多量に 混じる。
	14	青灰色	粘土	
	15	黒色	粘土	
	16	青灰色	粘土	
	17	黒色	粘土	
	18	青灰色	粘土	
	19	黒色	粘土	
	20	青灰色	粘土	
	21	黒色	粘土	
	22	青灰色	粘土	
	23	黒色	粘土	

2. 1999 年度試掘調査の成果

1999 年度に実施された試掘・立会調査の一覧に関して
は、表 1 に示した。また、調査位置については図 47～48
に示した。試掘調査については、以下で概要および結果
を提示する。立会および試掘調査において、現地表下 1
～2 m の深度までの調査で終了している地点について
は、今後、各同地点で新たな新営工事等が発生した際に
は、事前に遺構・遺物の存否を確認するための立会・試
掘調査等が必要である。

a. 高等教育機能開発総合センターボイラーユニット 設置・樹木移植予定地（9905）

3 箇所（1～3）の調査区が設定され（図 47-⑱），重
機を用いた掘削が約 3 m 実施された。いずれの試掘坑に
おいても、約 60 cm の層厚の客土の下に北大構内標準層
序第 I 層に相当する層厚約 0.3 m の黒色土層が削平さ
れずに遺存していた。遺構・遺物は確認されなかった。

b. 総合メディア交流棟防火水槽設置予定地（9906）

3 箇所（1～3）の調査区が設定され（図 47-⑪，⑲，

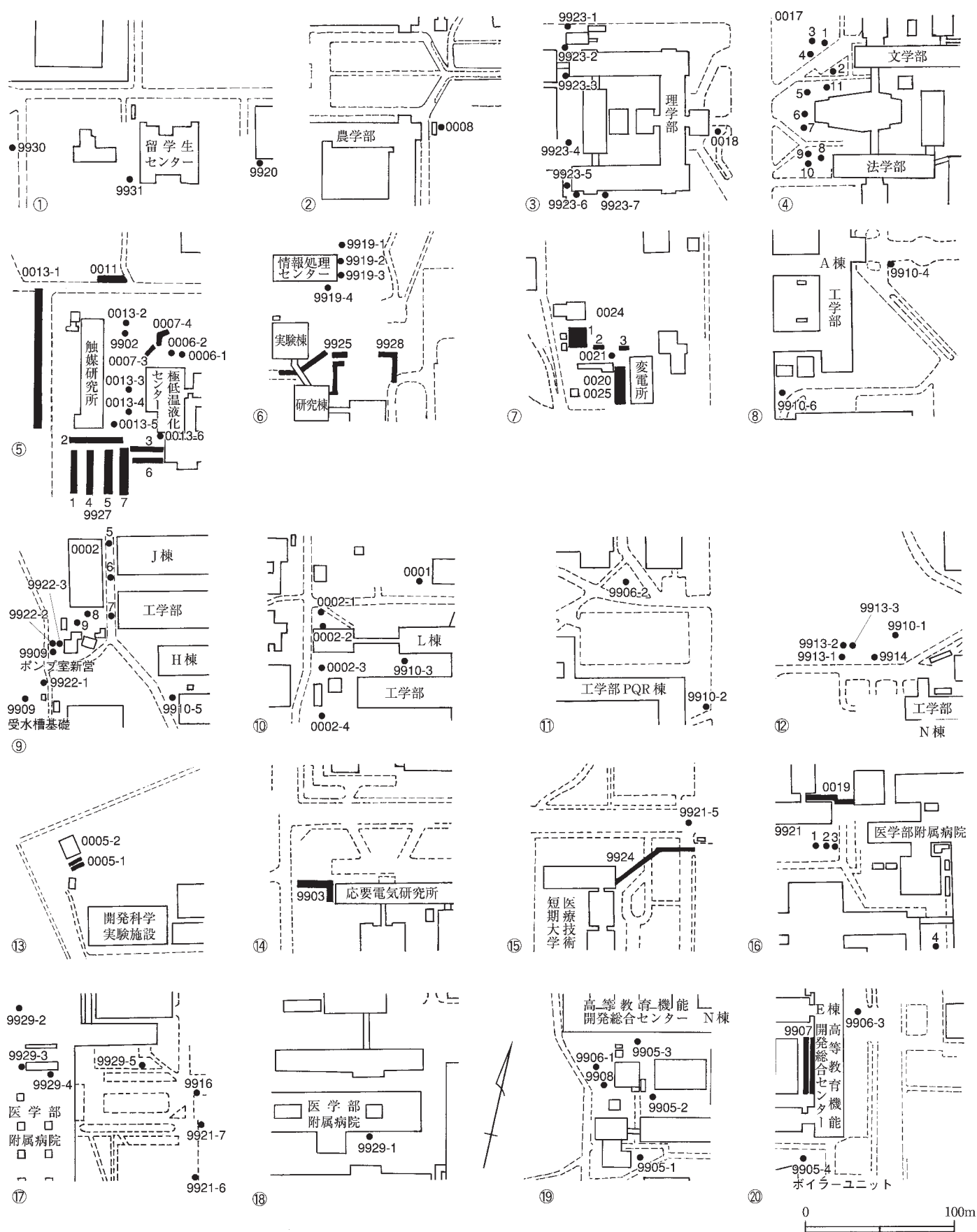


図47 構内試掘・立会調査位置図(I)

⑳), 重機によって掘削が約 3 m 実施された。いずれも約 0.6~0.7 m の層厚の客土がある。9906-2 では標準層序第 I 層に相当すると考えられる黒色土が残っていたが、それ以外の試掘坑では確認されなかった。土層堆積の状況は 9905 の各試掘坑と類似する。遺構・遺物は確認されなかった。

c. 高等教育機能開発総合センター E 棟改修工事予定地 (9907)

約 4 × 1 m のトレンチを工事予定地内に設定し (図 47-⑳), 重機によって掘削が約 1.3 m の深度まで実施された。客土が約 1.1 m ほどあり、その下位からは黄褐色

のシルト層が検出されている。そのため、標準層序第 I 層に対比できる黒色土層は削平されてしまったものと考えられる。遺構・遺物は確認されなかった。

d. 総合メディア交流棟ゴミ置き場新設予定地 (9908)

約 2 × 2 m の範囲を (図 47-㉑), 深さ約 1.3 m まで重機により掘削をおこなった。客土は約 1.1 m ある。標準層序第 I 層に対比される黒色土層は、削平されてしまったものと考えられる。遺構・遺物は確認されなかった。

e. 第一農場ポンプ室新営工事予定地 (9909)

約 2 × 2 m の範囲を (図 47-㉒), 深さ約 1.0 m まで重

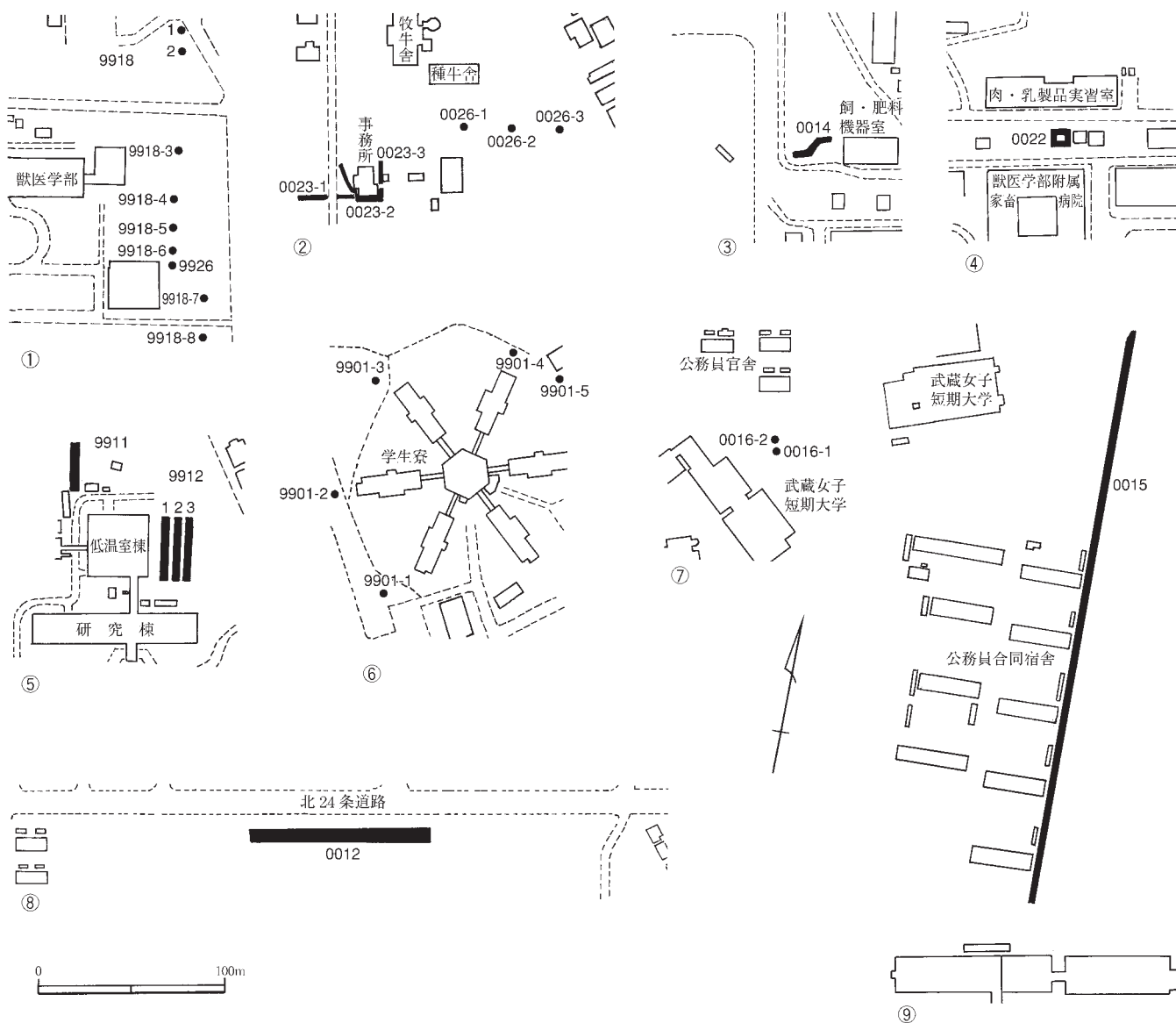


図48 構内試掘・立会調査位置図(2)

機により掘削をおこなった。客土があるのみで自然堆積土層を確認することはできなかった。

f. 工学部研究実験棟新営防火水槽設置予定地 (9910)

工学部の周辺に予定された計6箇所の防火水槽設置に伴い、それぞれ約 2×2 mの範囲で、深さ約2.5~3.0 mの深度まで重機により試掘調査を実施した(図47-⑧~⑫)。各試掘坑での現地表面からの客土の層厚は、9910-1では約0.5 m, 9910-2では約0.6 m, 9910-3では約1.7 m, 9910-4では約0.6 m, 9910-5, 9910-6ではともに約2.5 mの深度までであった。9910-3と9910-4は理学部薬品庫設置予定地(0006-1)と同様の土層堆積の状況を示す。いずれの試掘坑からも遺構・遺物は検出されていない。

g. 低温科学研究棟新営工事予定地 (9912)

工事予定地内に長さ約35 m, 幅約2 mのトレンチを3本設定し、約1.3 mの深度まで重機による掘削を実施した(図48-⑤)。また各トレンチに1箇所、約2.7 mの深度までの深掘り区を設定し、調査した。現地表から層厚約0.5 mの客土が認められた。トレンチ長軸のほぼ中央部分で南東から北西方向にむかう沢状の落ち込みを確認することができた。遺構・遺物は確認されなかった。

h. 工学部研究実験棟危険物倉庫建設予定地 (9914)

約 5×2 mの工事対象範囲を、深さ約0.9 mまで重機によって掘削し調査した(図47-⑫)。客土は約0.8 mあり、その下には茶褐色のシルト層が観察された。標準層序第I層に対比される黒色土層は、削平されてしまったものと考えられる。遺構・遺物は確認されなかった。

i. 低温科学研究所研究棟ガス管理設予定地 (9918)

約 4×1 m規模の試掘坑を、8箇所深さ約1.4 mまで重機により掘削し、調査を実施した(図48-①)。いずれの試掘坑でも客土は約0.4 mあり、その下には約0.1 mの黒色土(標準層序第I層に対比可能、層中にはTa-aと考えられる火山灰が含まれていた)、約0.9 mの灰白色シルトと赤褐色粗砂の互層(上面から約0.5 m, 0.6 mの深度に層厚2 cm程度の黒色粘土層が入っていた)が堆積していた。遺構・遺物は確認されなかった。

j. 医学部付属病院熱源設備・ガス管理設・渡り廊下設置予定地 (9921)

約 2×2 mの範囲を、深さ約1.3 mまで重機により掘削をおこなった(図47-⑩・⑪)。客土は約1.1 mあり、

その下には茶褐色の砂層が観察された。標準層序第I層に対比される黒色土層は、削平されてしまったものと考えられる。遺構・遺物は確認されなかった。

k. 地球環境科学研究科研究実験棟中圧ガス埋設予定地 (9925)

工事対象範囲内を深さ約1.4 mまで重機により掘削をし、調査を実施した(図47-⑥)。客土は約1.1 mあり、その下には黒色土層(標準層序第I層に対比可能)が約0.5 mの層厚で堆積していた。土層堆積の状況は、地球環境科学研究科研究棟第2地点と類似する。遺構・遺物は確認されなかった。

l. 理学部総合研究棟新営工事予定地 (9927)

工事対象範囲内に約 $25 \sim 35 \times 2$ mの規模のトレンチを7箇所設定し(図47-⑤)、いずれも深さ約2.4~2.8 mまで重機により掘削し、調査をおこなった。客土は約0.4 mある。標準層序第I層に対比される黒色土層は、削平されていた。土層堆積の状況は、理学部薬品庫設置予定地(0006-1)と類似する。遺構・遺物は検出されなかった。

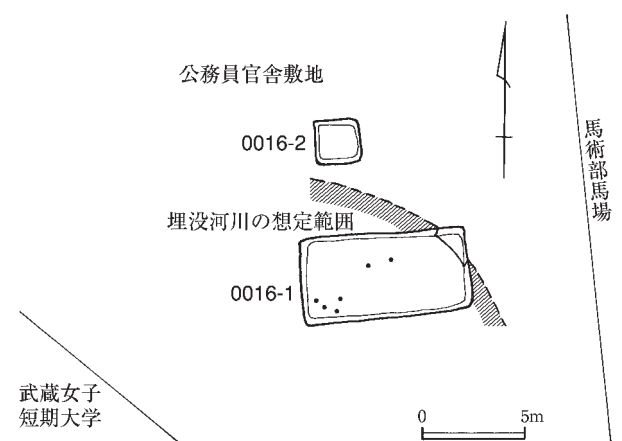


図49 (理)地震計設置予定地試掘調査区と遺物の出土状況

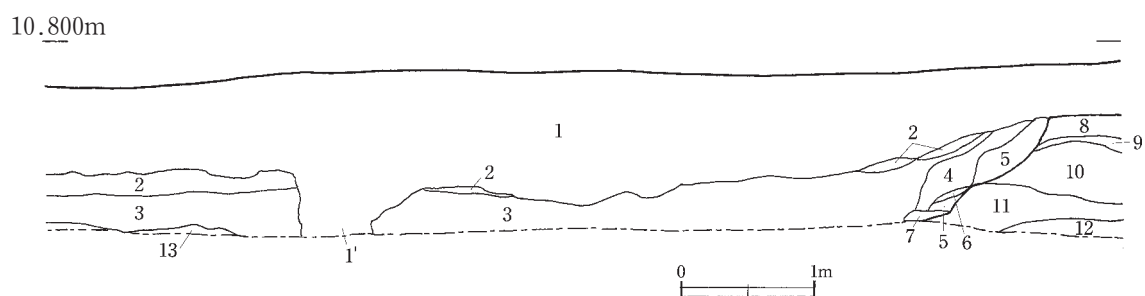


図50 (理) 地震計設置予定地試掘調査区北壁セクション図

表 31 (理) 地震計設置予定地土層観察表

層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
1						客土
2	2.5 YR 3/3	暗赤褐色	砂質シルト	中	中	
3	10 YR 4/1	褐色	シルト	やや強	中	
4	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土質シルト	やや強	中	
5	10 YR 4/1	暗黄灰色	粘土質シルト	やや強	強	
6	2.5 YR 4/6	赤褐色	砂	弱	やや弱	
7	10 YR 3/1	黒褐色	粘土	強	中	
8	10 YR 3/1	黒褐色	粘土質シルト	やや強	中	
9	2.5 Y 5/2	暗黄灰色	シルト	中	中	
10	5 YR 4/6	赤褐色	砂	弱	やや弱	
11	2.5 Y 5/2	暗灰黄色	粘土	強	やや強	
12	7.5 GY 4/1	暗緑灰色	砂質シルト	中	中	
13	2.5 Y 5/2	暗灰黄色	粘土	強	やや強	

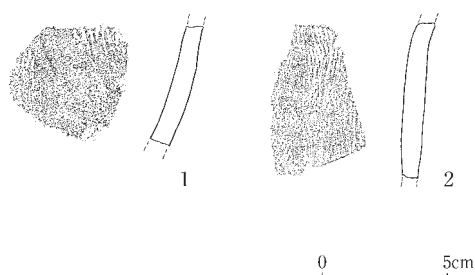


図51 (理) 地震計設置予定地試掘調査区出土土器拓影図

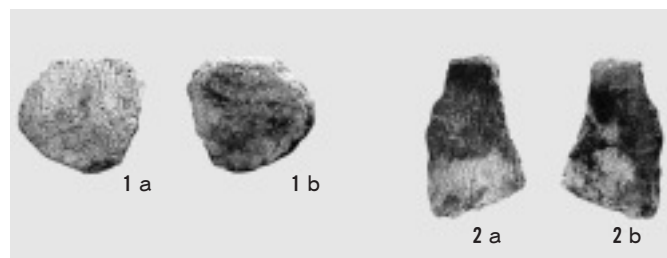


写真13 (理) 地震計設置予定地試掘調査区出土土器

表32 (理) 地震計設置予定地出土土器観察表

挿図 番号	個体 番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	器 面 調 整		口縁部 断面形	底部 形状	層位	遺物 番号	写真 番号	備考
						外 面	内 面						
51-1	1				24.4	ハケメ(縦)				3	5	13-1	
51-2	2				26.1	ハケメ(縦)				3	1	13-2	

3. 2000 年度試掘調査の成果

a. 工学部系総合研究棟新営に伴う樹木移植予定地 (0001)

約 2×2 m の範囲を、深さ約 1.7 m まで重機により掘削をおこなった (図 47-⑩)。客土は約 1.5 m あり、その下には泥炭質の暗茶褐色シルト層が観察された。遺構・遺物は確認されなかった。

b. 工学部系総合研究棟新営に伴う共同溝予定地 (0002)

工事対象となる 9 箇所を約 2×2 m の範囲で、深さ約 2.0~2.5 m まで重機により掘削をおこなった (図 47-⑨・⑩)。0002-1 では攪乱により破壊されていた。0002-1 以外の試掘坑では、客土の層厚は約 0.7~0.9 m あり、その下位には自然堆積土層があった。いずれの試掘坑においても標準層序第 I 層に対比される黒色土層は確認されていない。0010-2 と 0010-3、0010-4 の土層堆積は、工学部研究実験棟新営に伴う防火水槽設置予定地 (9910-2) の土層堆積と類似する。0010-5 から 0010-9 では、赤褐色の粗砂層や青灰色の砂層の厚い堆積が確認された。埋没河川 (サクシュコトニ川) の氾濫原堆積物であると考えられる。遺構・遺物は確認されていない。

c. 工学部地中熱交換器設置予定地 (0005)

工事対象範囲に約 8×2 m のトレンチを 2 箇所設定し (図 47-⑬)、深さ約 2.7 m まで重機により掘削をおこなった。客土は約 1.1 m あり、その下には泥炭化した小枝、草本類を多量に含む暗茶褐色砂質シルト層が堆積していた。埋没河川 (サクシュコトニ川) の堆積物であると考えられる。遺構・遺物は確認されなかった。

d. 理学部総合研究棟新営に伴う薬品庫設置予定地 (0006)

約 2×2 m の範囲を 2 箇所 (図 47-⑤)、深さ約 2.7 m まで重機により掘削し、調査をおこなった。客土は層厚約 0.8 m ある。遺構・遺物は確認されなかった。

e. 理学部総合研究棟新営工事に伴う現場事務所排水溝設置予定地 (0007)

工事対象範囲を深さ約 0.6 m の深度まで重機により掘削し、調査をおこなった (図 47-⑤)。調査深度は客土の範囲にとどまっていた。

f. 理学部総合研究棟工事に伴う樹木移植予定地 (0011)

工事予定範囲内に約 18×2 m のトレンチを設定し (図 47-⑤)、深さ約 1.1 m まで重機により掘削をおこない、調査を実施した。客土は層厚約 0.6 m ある。土層堆積の状況は 0006-1 と類似しているが、標準層序第 I 層に対比できる黒色土層は削平されていた。遺構・遺物は確認されなかった。

g. 第二農場南ケーブル線埋設予定地 (0014)

工事対象範囲内を深さ約 1.5 m のまで重機により掘削し、調査をおこなった (図 48-③)。客土は約 0.7 m あり、その下位には標準層序第 I 層に対比可能な層厚約 0.2 m の黒色土 (炭化物含む) が堆積していた。遺構・遺物は確認されなかった。

h. (理) 地震計設置予定地 (0016)

0016-1 では工事対象範囲内を工事深度である約 1.2 m の深さまで重機を用いて調査した。調査過程で土器片が出土した。調査位置 (図 49) および北壁セクション図を示す (図 50)。土器は 3 層中から検出されている。2~7 層は、8 層以下を切るようにして堆積した埋没河川の氾濫原堆積物と考えられる。遺物は、土器の破片が 8 点 (遺物座標点 6 箇所、重量合計 86.2 g) 出土した。拓影図 (図 51) を示したが、器面調整にハケメが施されている擦文期の土器片が出土している。0016-2 では、約 1.7 m の深度まで掘削し、調査をおこなった。約 0.8 m の層厚の客土がある。その下位には暗褐色シルト層や褐色砂層、黄褐色粘土層、灰色砂質シルト層が堆積していた。

i. 総合博物館門柱設置予定地 (0018)

約 1×2 m の範囲を、深さ約 0.7 m まで重機により掘削し、調査をおこなった (図 47-③)。客土は約 0.6 m あり、その下位には黄褐色の砂質シルト層が観察された。標準層序第 I 層に対比される黒色土層は、削平されてしまったものと考えられる。遺構・遺物は確認されなかった。

j. 中央変電所新営予定地 (0025)

約 2×2 m の規模の試掘坑を工事範囲内に 3 箇所設定し (図 47-⑦)、深さ約 2.3 m まで重機により掘削をおこなった。客土は約 1.1 m あり、その下には褐色のシルト層や砂層が堆積していた。0025-3 では西方向にむけて土層が著しく傾斜していた状況が観察されたため、工事予定地の大半は埋没河川 (サクシュコトニ川) の低位氾濫原にあたると思われる。遺構・遺物は確認されなかつ

た。

k. 遠友学舎新営予定地 (0026)

工事対象予定地内に約 3×3 m の規模の試掘坑を 3 箇所設定し (図 48-②), 深さ約 2 m まで重機により掘削をおこない, 調査を実施した。いずれの試掘坑でも客土は約 1.0~1.1 m ある。その下位には, 0026-1 では上から層厚約 0.4 m の暗赤褐色粘土層, 層厚約 0.5 m の黒褐色粗砂層が順に堆積していた。0026-2 では, 層厚約 0.4 m の黒褐色粗砂層, 層厚約 0.6 m の灰色粘土層が順に堆積していた。0026-3 には, 層厚約 0.5 m の褐灰色砂層, 層厚約 0.6 m の褐灰色粘土層, 茶褐色の砂層が順に堆積していた。遺構・遺物は確認されなかった。

引用文献

(動植物遺存体および自然科学分析の項で引用された文献を除く)
宇田川洋 1980 「擦文文化」 野村 崇編『北海道考古学講座』みやま書房

小泉 格・林 謙作編 2000 『北大構内の遺跡 11』北海道大学
仙庭伸久編 1995 『H 317 遺跡』札幌市教育委員会

吉崎昌一編 1985 『北大構内の遺跡 4』北海道大学

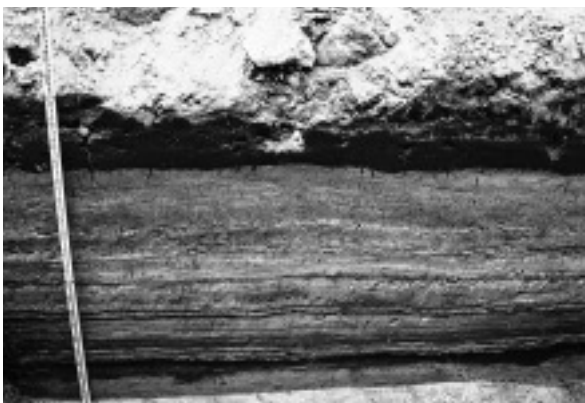
吉崎昌一編 1995 『北大構内の遺跡 10』北海道大学

吉崎昌一・岡田淳子編 1981 『北大構内の遺跡 1』北海道大学

吉崎昌一・岡田淳子編 1987 『北大構内の遺跡 5』北海道大学

吉崎昌一・岡田淳子編 1988 『北大構内の遺跡 6』北海道大学

Krumbein, W.C. 1941. Measurement and geologic significance of shape and roundness of sedimentary particles. *Journal of Sedimentary Petrology*, 11.



1. 理学部総合研究棟新営に伴う薬品庫設置予定地 (0006-1) 西壁セクション



2. 工学部研究実験棟新営に伴う防火水槽予定地 (9910-2) 西壁セクション



3. 高等教育機能開発総合センター新営に伴うボイラーユニット設置予定地 (9905-4) 北壁セクション



4. (理) 地震計設置予定地 (0016) 北壁及び東壁セクション

第IV章 まとめと展望

欧米型人類史的ストーリーを超えるために

遺跡群と広域調査

北大構地はほぼ全域がK 39 遺跡とK 435 遺跡とに該当する。だからといって、その全域において土器や住居址などの埋蔵文化財が連綿と包蔵されているわけではない。むしろそのような包蔵地点が島状に散在しながらひろがっている状態が予測されよう。構内で予定される現地表面下の掘削を伴う工事に先立って実施される考古学の試掘調査や本調査においては、調査場所ごとにK ナンバーの遺跡名に続いて地点名を付して、その場所の表示をおこなっている（例えば、「K 39 遺跡西門地点」）。だが実際には、そこで遺物や遺構が発見されてはじめて、そこが今日的な用語法での「遺跡」に相当するものとなる。すなわちK 39 遺跡やK 435 遺跡とは、本来「遺跡群」に対応する内容のものであると理解してよい。

遺跡群とは一定の地理的なひろがりの中に群集する複数の遺跡のまとまりに対しての呼称である。その地理的な広がりとは自然地理的な単元を指標とする場合や、単なる行政上の区分を便宜的に用いる場合などがある。例えば、「北大構内遺跡群」などという呼称がなされるならば、それは後者の一例である。しかし、いずれの場合でも、分布調査等の地表面上からの観察結果を基本とした遺跡群の把握は、その場所で展開した各年代の遺跡の通時的な累積の状態を捉えているのにすぎない。これを「通時的遺跡群」と呼ぶならば、その累積を年代ごとに剥がし取ってゆき、限られた一定の時間幅の中に存在した複数の遺跡の有意なまとまりを認定することが、次なる調査・研究のステップである。今それを「共時的遺跡群」と呼ぶが、その「一定の時間幅」をどれくらいに設定するかで「共時」の意味は幾分かの幅をもったものになる。それは単に共存や同時存在のみを表すものではなく、継起や断続などの多少の時間幅を内包する場合もあり、調査・研究の対象や目的、また研究の進展などによっても異なり、そのいずれの場合においても、いかに適切な時間幅で共時的遺跡群を把握するかが重要である。そしてそのような時間幅の内においても、共時的遺跡群の空間的なひろがりには変化しうるのであり、便宜的に設定した通時的遺跡群のひろがりに拘泥する必要はない。現在、北大構内の遺跡調査に求められていることの1つは、時間的・空間的に有意な単位となりうる共時的遺跡群とその

地理的なひろがりを把握することである。

遺跡はそれぞれに内容が異なるものではあるが、人間活動の所産である限り、それが遺された当時においてその場所のみで完結した内容のものであるわけにはいかない。有意なまとまりを呈する遺跡群の中に個々の遺跡を位置付けることによって、その内容や機能の正しい理解に近づくことが可能になる。そのための研究方法が遺跡群を対象とした広域調査である。現在、北大構内で実施している埋蔵文化財包蔵地の調査はまさにその意味での広域調査なのである。

文化層と標準層序

北大埋蔵文化財調査室を中心としたこれまでの構内の遺跡調査の成果として、構内の各所において現地表面下約1mの深さに擦文文化の文化層が存在し、さらにその1m下、すなわち現地表面下約2mには続縄文文化の文化層が存在している状態が明らかになってきた〔小杉2001a〕。近・現代の開発工事によって北大構内はいたるところで地表面が削平されたり、盛り土されたりしている。地表下1mとか2mとかいった値は、そのような状態を考慮しての概略的な表現であり、旧表土が遺存しているところでは、地表下50cmで擦文文化の文化層に到達する場所もある。また、先の表現では両文化層の間に1m程の無遺物層があるような印象を受けるかもしれないが、実はこの間こそが続縄文文化から擦文文化への変化過程が遺された土層の堆積である。さらに続縄文文化の文化層の厚さがどのくらいであるかは地点によっても異なり、現在、試掘調査では現地表面下から約3mの深さまでを、続縄文文化の文化層を確認するための掘り下げの目安としている。

北大埋文調査室では平成6年度までの調査成果をふまえて、特にK 39 遺跡ゲストハウス地点の堆積層位を基準とした9つの層に及ぶ「標準層序」を提示している〔吉崎編 1995〕。0層が客土や盛り土、I層が旧表土層にあたる。このI層の下半部以下から上記の擦文文化の文化層がはじまる。その下位のII層は全体がシルト質の土層であるが、その間に2～3枚ほどの層厚の薄い黒色帯が挟まれる。この黒色帯はごく薄いものであるが、ある程度広域にわたって認められる。一方、局所的な様相とし

て何枚かの砂層が挟まるが、埋没河川との距離によってその層厚はまちまちである。II層中からは擦文土器の他に北大式土器も出土しており、今後II層を分層できる地点が発見できるかが1つの課題である。

シルト質のII層以下は、徐々に粘土質が強まってゆきIII層、IV層へと続く。III層の上部とIV層の上部はともに黒色帯であり、その上面において土壌化が進行する程度に堆積速度が遅滞化・離水化した状況が想定される。年代を特定できる遺物は未だ出土していないが、今後の調査で北大式土器が出土するか、あるいはそれ以前の続縄文土器が出土するかが探求のポイントである。

以下に続くV層は3枚程の黒色帯となる粘土層と灰色系の粘土層との互層である。その最下位の黒色帯は縄文晩期終末段階までさかのぼる可能性が高い。現在、この深度までが北大構内において文化層の存在する限界であると理解している。以下には粘土層であるVI層・VII層が続く、基盤となる砂礫層であるVIII層に達する。

堆積層位の地点的変異

さて、以上のような標準層序はK 39 遺跡の南半部にあたるゲストハウス地点の堆積層位を基準としたものであり、それが北大構内の各地点に対してどの程度の汎用性を有するかは問題である。その全体が沖積平野表層の堆積物であるために、各土層における水平方向の変異の大きさはかなりのものであると予測される。現在、毎回実施される試掘調査においては、その標準層序を念頭におきながらも、各地点の堆積層位がそれとどの程度異なるのかを確認しながら、各地点の文化層としての共時性を把握し、地域的な変異を考慮した堆積層位の体系的な理解を試みている。K 39 遺跡の範囲についてその概略を示すと以下ようになる。

K 39 遺跡ゲストハウス地点の標準層序がほぼ確認できる地域はサクシュコトニ川の上流部左岸（南北は工学部南半から農学部北半まで、東西は理学部から文系学部までの区画）である。ただし、K 39 遺跡ゲストハウス地点を離れると、特に西寄りの理学部側では、III層とIV層との層厚が薄くなり、以下に続く黒色帯の互層からなるV層とそれら各層との判別が難しくなる。なお、1995年報告の古地形判読からその存在が予測された理学部校舎裏の古湿地は確認されていない。

サクシュコトニ川の上流部右岸（地球環境科学研究科研究棟から学術交流会会館までの区画）もK 39 遺跡ゲストハウス地点標準層序に類似しているが、その地域においてII層とV層との間に挟在する何枚かの黒色帯を正確

にIII層あるいはIV層に対比することは難しい状態である。

サクシュコトニ川の中流部右岸（工学部北半から北18条道路まで、あるいは低温科学研究棟までの区画）では、標準層序II層にほぼ対比できる全体がシルト質を呈する土層は認められるが、それ以下の粘土質の強い土層においては厚さ数cmほどの黒色帯が何枚もの互層をなして全体で1～2mの層厚に達しており、標準層序III層以下との対比は不可能である。さらにその下位には2～3枚ほどの未分解有機物の土層が存在しており、より北側の地域へとひろがる様相を呈している。またこの地域にはサクシュコトニ川とは別の支流になる埋没河川や古湿地の存在が予測でき、さらに複雑な様相を呈している。

K 39 遺跡西門地点はサクシュコトニ川の下流部左岸とセロンベツ川下流部の左右両岸とにかかるとなる北大第一農場北部の地域である。その東側であるサクシュコトニ川左岸では標準層序II層以下に粘土質の強い3～4枚ほどの黒色帯があらわれる。それらの黒色帯が標準層序III・IV・V層に相当するならば、サクシュコトニ川上流部左岸の標準層序と比較的類似した堆積層位であることになる。しかしその場合、III層・IV層の層厚はかなり薄く、またV層には黒色帯の互層堆積が認められず、かなり地域的な変異があらわれていることになる。あるいはそれらの黒色帯が全て標準層序III・IV層に対比され、V層はさらに下位に位置する可能性もある。

立地環境の変遷

以上のようにK 39 遺跡の範囲においては、水平方向での層相の変化が著しいものではあるが、概ね地表の黒色土の下位に厚さ1～1.5m程のシルト層が堆積し、さらにその下位に何枚かの黒色帯が互層をなして挟在する粘土層が続く堆積構成であることがわかってきた〔小泉・林編 2000〕。それは湿地的な堆積環境から、河川の氾濫によって砂やシルトが繰り返し堆積するようなより高燥な堆積環境への変化過程を反映したものであると考えられる。

K 39 遺跡とK 435 遺跡に相当する北大構地の位置は、ちょうど豊平川扇状地の末端付近からその下流側にかけての地点にあたる。完新世も2000年前頃までになると、豊平川の堆積作用はこの地点にはほとんど及ばなくなり、扇状地上にのる表層堆積物の形成が盛んになってくる。そこでは、沼沢地での粘土の堆積とその間を縫って流れる小河川の氾濫による砂やシルトの堆積を繰り返しながら、石狩湾側に向かって徐々に陸化してゆく過程が

進行したと予測される。沼沢地とそこを網の目状に流れる小河川、湿地帯に島状の高まりとして現れた小河川脇の自然堤防、そのような地理的な環境が縄文文化のこの北大構地周辺に出現したのであろう。春には雪解けの大水で湿地帯の大半は冠水し、やがてまた新たな流路ができ、自然堤防が更新されてゆく。このような繰り返しの中で、縄文文化の人たちは、自然堤防上での季節的な活動を展開していったのではないだろうか。上流部では既にこの段階に、通年的な定住生活が営まれた集落も出現しはじめてきたようだ(小杉 2001 b)。標準層序Ⅴ層からⅣ層、Ⅲ層までの土層堆積の過程はこのようなものだったと考えられる。

洪水による土砂の供給の累積によって離水化が進み、やがて小河川の流路も何筋かに固定されるようになり、サクシュコトニ川やセロンベツ川の前身と大規模で固定的な自然堤防が現れてくる。高燥化し始めた陸地では1年を通しての本格的な定住が可能になり、琴似川の流域全体に擦文文化の遺跡群が出現してくる。標準土層Ⅱ層からⅠ層下半部までの土層堆積の過程が、これに相当してくるのだろう。

フィールドの課題

以上のような自然環境の変化を背景として、北大構地という地域においては、縄文文化晩期の終末段階から縄文文化、そして擦文文化へと人びとの生活の営みが展開していった。この間、本州以南においては、縄文晩期から弥生文化へ、そして古墳文化から律令国家へと歴史的な展開が遂げられる。同じ内容のことがこのような日本史的ストーリーとは別に、食料獲得経済から食料生産経済へ、さらに階級社会の形成から古代国家の成立へと、人類史的ストーリーとしても説明される場合がある。

研究の進展にともなって、現在では擦文文化におけるアワやキビなどの雑穀栽培あるいは農耕の存在が目されてきた。その結果、北海道域で展開した歴史的な過程として、縄文文化の狩猟漁労採集経済がそのまま継承されて縄文文化の段階に至り、やがて本州の古墳文化や律令体制下の土師式土器文化との接触・交流を経て、畑作農耕といった食料生産も生業体系の一端に組み込んだ擦文文化へと展開してゆく、と説明される場合がある。あるいは特に擦文文化の成立に関しては、縄文人集団と本州集団との接触・融合の過程を想定し、考古学的な現象を直截的に擬人化したような説明がなされる場合もある。しかし、いずれの説明であっても、人類史的ストーリー

リーとして読み替え可能な、日本史的文脈における「縄文から弥生へ」という交代劇が、多少場所と時間をかけて再演されているのにすぎない印象が強い。はたして、そうなのだろうか。

現在、私たちが語る人類史的ストーリーとは、アフリカに起源した人類が、やがて生誕の地をはなれ、長い狩猟採集と遊動生活の後に、農耕・牧畜といった食料生産と定住生活をはじめ、そして階級社会や古代国家、あるいは文明社会を築き上げてゆく、というようなものである。しかし忘れてならないのは、さらにその後、産業革命をへて欧米的な近現代社会が達成されるという小ストーリーが顕示的ではないものの付随している点である。人類史とはいふものの、その実は欧米型人類史的ストーリーなのである。

今日の縄文文化や弥生文化の研究の多くは、このような欧米型人類史的ストーリーに深く組み込まれてしまった感が強い。その轍を縄文文化や擦文文化研究が踏む必要はない。むしろ、人類史の必然として語られるような食料獲得から食料生産へとといった変化過程が、実は多様な生業活動の実践とその変容過程の1つに過ぎないこと、そしてその結果が確かに食料生産をとまなうものであったとしても、それを歴史的な一回性の出来事として捉え直すこと、これらの課題に取り組むことによって欧米型人類史的ストーリーを相対化することこそが、今後の縄文文化や擦文文化研究に課せられた大きな役割なのではないかと考える。そしてそれが日本史的ストーリーを再確認するためのものでないことについては、もはや言をまたないであろう。

縄文文化の最終段階から擦文文化へと及ぶ通時的遺跡群を擁する北大構地の地理的な位置とその内容は、まさに上記のような課題を定点観察的に探求するのに絶好のフィールドであり、そしてそこで日々実践される北大埋文調査室による埋蔵文化財包蔵地の調査はそのような意義を有する活動なのである。

(小杉 康)

参考文献

- 吉崎昌一編 1995『北大構内の遺跡 10』北海道大学
 小泉 格・林 謙作編 2000『北大構内の遺跡 11』北海道大学
 小杉 康 2001 a 「北大の地底世界」『北大の125年』北海道大学
 小杉 康 2001 b 「足下に眠る古代集落」『文学研究 科・文学部ニュース』45号

報告書抄録

ふりがな	ほくだいこうないのいせき じゅうに							
書名	北大構内の遺跡 Ⅺ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	北大構内の遺跡							
シリーズ号	Ⅺ							
編著者名	小杉 康・高倉 純							
編集機関	北海道大学							
所在地	〒060-0810 札幌市北区北 8 西 5 丁目 TEL.011-706-2111 FAX.011-758-7531							
発行年月日	2002年 3 月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
けいさんじゅうきゅういせき K 3 9 遺 跡	札幌市北区	1101	39					
ちきゅうかんきょうかがくけんきゅうかだいにちてん 地球環境科学研究科研究棟第 2 地点				43度 4 分 13秒	141度21分 2 秒	19990602～ 19990615	981	研究棟建設
ほんぶうちてん 本部裏地点				43度 4 分 9 秒	141度21分 2 秒	20000707～ 20000725	83	渡り廊下建設
こうがくぶじまいあいとうかんちてん 工学部 J ・ I 棟間地点				43度 4 分 23秒	141度20分 33秒	20000622～ 20000728	83	ボンベ庫・ 液 体 燃 料 庫・排水溝
にしもんちてん 西門地点				43度 4 分 29秒～43 度 4 分34 秒	141度20分 8 秒～141 度20分18 秒	19990916～ 19991008, 19991017～ 19991029, 20000619～ 20000715	2372	西 門 車 歩 道・排水溝 設置・樹木 移植
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
地球環境科学研究科研究棟第 2 地点	集落址	擦文		竪穴住居址 1 基		土器		
本部裏地点	集落址	擦文		竪穴住居址 1 基		土器・石器		
工学部 J ・ I 棟間地点	集落址	擦文		竪穴住居址 1 基		土器		
西門地点	集落址	擦文～中・近世		竪穴住居址 2 基 屋外炉址 3 基 炭化物集中箇所 2 土坑12基 礫群 1 基		土器・石器		

北大構内の遺跡Ⅻ

平成 14（2002）年 3 月 29 日発行

発行 北海道大学

札幌市北区北 8 条西 5 丁目

編集 小杉 康

印刷 ㈱アイワード

060-0033 札幌市中央区北 3 条東 5 丁目
011-241-9341

HOKKAIDO UNIVERSITY

CAMPUS SITES

XII

